

東京国立文化財研究所要覽

1996

平成8年度

はじめに

東京国立文化財研究所が、中長期計画として定め、進めている研究は28件である。このうち、6件が特別研究として、7件が国際研究交流事業として予算化された研究である。また、文部省の科学研究費の交付を受けた研究は、16件に上っている。

これらの研究のうち、特別研究など政府予算に係る研究、あるいは研究交流事業は、すべて継続的研究として維持された。科学研究費分については6件が研究を終了し、9件が平成8年度の新規の研究として立ち上がった。

この他、在外日本古美術品の修復協力やさまざまな研究集会を行っており、平成8年度の当研究所の活動は、例年通り多忙であり、しかも相当の成果を挙げ得たものと思う。第20回の国際研究集会は、芸能部が担当し、「歌舞伎一変遷と展望一」という主題を掲げて行われたが、この種の国際研究等は我が国でも初めての試みであり、内外の研究者から高い評価を得た。芸能部の研究活動に新しい展望を開いた事業であったと思う。

外部の専門家による懇談会は3月に行われ、研究活動の報告を行ったが、その評価はおおむね良好であったことを嬉しく思っている。

平成9年4月

東京国立文化財研究所長

渡 邊 明 義

目 次

I. 沿革	1
1. 設立の経緯	1
2. 年代別重要事項	1
3. 歴代所長	6
II. 機構・職員・予算	7
1. 機 構	7
2. 職 員	8
3. 名誉研究員	11
4. 予 算	12
5. 特別研究一覧	13
6. 科学研究費補助金交付一覧	13
7. 受託研究一覧	14
III. 調査研究	15
1. 中長期研究計画一覧	15
2. 美 術 部	16
(1) 概 要	16
(2) 各 論	17
3. 芸 能 部	22
(1) 概 要	22
(2) 各 論	23
4. 保存科学部	25

(1) 概 要	25
(2) 各 論	26
5. 修復技術部	38
(1) 概 要	38
(2) 各 論	39
6. 情報資料部	44
(1) 概 要	44
(2) 各 論	45
7. 国際文化財保存修復協力センター	51
(1) 概 要	51
(2) 各 論	51
8. 国際調査研究	55
(1) 敦煌文化財保存修復に関する調査研究	55
(2) スミソニアン研究機構との国際研究交流	57
(3) タイ国レンガ造遺跡の劣化現象と保存処置に関する調査研究	58
(4) 文化財保護に関する日独学術交流	58
(5) シリア、アインダーラ神殿遺跡の保存修復	60
(6) 文化財の保存修復技術に関する国際共同研究	60
(7) 在外日本古美術品保存修復事業に伴う調査	61
(8) 海外所在日本美術品調査	62
(9) 中国青銅器に関する国際研究	62
9. 主要研究業績	63
IV. 大学院教育	81
V. 事 業	83

1. 出	版	83	
(1)	美術研究	83	
(2)	日本美術年鑑	84	
(3)	芸能の科学	84	
(4)	保存科学	84	
2.	黒田清輝巡回展	85	
3.	公開学術講座	85	
4.	夏期学術講座	86	
5.	能楽技法講座	87	
6.	博物館・美術館等保存担当学芸員研修	87	
7.	国際研究集会	89	
8.	敦煌莫高窟壁画保存修復協力事業の実施	94	
9.	第5回「紙の保存修復」の国際研修	95	
10. 会	議	96	
(1)	文化財保存修復研究協議会	96	
(2)	アジア文化財保存修復研究会	97	
11.	国際・国内交流	99	
(1)	平成8年度職員の海外渡航	99	
(2)	招へい研究員等	104	
(3)	平成8年度海外研究者等の来訪	106	
VI.	研究施設・設備	108	
1.	蔵	書	108
2.	資	料	109
3.	主要機器・設備	110	
4.	黒田記念室	114	

5. 閱 覽 室114

VII. 関 係 法 規115

I. 沿革

1. 設立の経緯

東京国立文化財研究所は、昭和27年4月1日に発足したが、その前身であり母体となったものは、昭和5年に創設された政府機関の帝国美術院附属美術研究所である。

この美術研究所は、大正13年7月、帝国美術院長子爵故黒田清輝の遺言により美術奨励事業のために寄附出捐した資金で遺言執行人が選択決定した事業である。すなわち遺言執行人代表伯爵樺山愛輔は、故子爵の遺志にしたがってこの資金で行うべき事業の選択を伯爵牧野伸顕に一任した。牧野伯爵は帝国美術院長福原隼二郎及び東京美術学校長正木直彦とはかつて諸方面の意見を徴し、また、わが国美術研究の必要に照らして次の事業を行うこととした。

- (1) 美術に関する基礎的調査研究機関として美術研究所を設けること。
- (2) 黒田子爵の作品を陳列して同子爵の功績を記念すること。
- (3) 前二項の目的を達するために適当な建物を造営すること。
- (4) 事業成立の上は一切これを政府に寄附すること。

2. 年代別重要事項

昭和元年12月 前記の事業を遂行するため委員会が組織され、東京美術学校長正木直彦が委員長に就任し、美術研究所事業については東京美術学校教授矢代幸雄、黒田子爵作品陳列については東京美術学校教授久米桂一郎・同岡田三郎助・同和田英作・同藤島武二及び大給近清、建物造営については東京美術学校教授岡田信一郎、会計事務については遺言執行人打田伝吉を各委員として事務を分掌進行させた。

昭和2年2月 美術研究所準備事業を開始した。

同 年10月 東京市上野公園内に鉄筋コンクリート造、半地階2階建、延面積1,192㎡の建物1棟を起工した（本館）。

沿 革

- 昭和3年9月 前記の建物が竣工したので、黒田記念館と名付け、美術研究所開設のため必要な備品・図書・写真等の研究資料を設備し、また、館内に黒田子爵記念室を設け、黒田清輝の作品を陳列した。
- 昭和4年5月 遺言執行人代表者樺山愛輔は、建物・設備・研究資料等一切の外に金15万円をそえて帝国美術院長に寄附を願い出た。
- 昭和5年6月28日 勅令第125号により帝国美術院に附属美術研究所が置かれ、東京美術学校長正木直彦が同研究所の主事に補せられた。
- 同 年10月17日 美術研究所開所式を挙行政した。
- 昭和7年1月 美術研究所の研究成果発表機関誌として、定期刊行物『美術研究』を創刊した。
- 同 年4月18日 株式会社朝日新聞社より明治大正美術史編纂費として本年から向う5か年間毎年5千円、合計2万5千円を帝国美術院に寄附したいとの申出があった。
- 同 年5月26日 帝国美術院はこの申出を受理した。
明治大正美術史編纂委員会規程を設け、美術研究所は明治大正美術史の編纂に関する事務を行うことになった。
- 昭和9年10月18日 毎年10月18日を開所記念日と定めた。
- 昭和10年1月28日 鉄筋コンクリート造、2階建、延面積129㎡の書庫が竣工した。
- 同 年4月 『日本美術年鑑』の編纂事務を開始した。
- 同 年6月1日 勅令第148号により美術研究所官制が公布された。
研究資料閲覧規定を制定し、閲覧事務を開始した。
- 昭和12年6月24日 勅令第281号により美術研究所官制中改正の件が公布され、従来、帝国美術院に附置されていたのを文部大臣の直轄に改められた。
- 同 年11月29日 美術研究所長職務規程、美術研究所事務分掌規程が制定された。
- 昭和13年2月12日 木造、平屋建、延面積97㎡の写真室1棟が竣工した。
- 昭和19年8月10日 黒田清輝の作品、並びに写真原版を東京都西多摩郡小宮村谷間家倉庫に疎開した。

昭和20年5月28日 美術研究所の図書・諸資料全部を山形県酒田市本町1丁目本間家倉庫3棟に疎開した。

同 年7～8月 酒田市本間家倉庫に疎開した図書資料を爆撃の危険を避けるため、さらに酒田市内牧曾根村松沢世喜雄家倉庫・観音寺村村上家倉庫・大沢村後藤作之丞家倉庫にそれぞれ分散疎開した。

昭和21年3月29日 酒田市疎開中の図書・諸資料等の東京向け発送を終了した。

同 年4月4日 酒田市疎開中の図書・諸資料等が東京に到着し、引揚げを完了した。

同 年4月16日 東京都西多摩郡に疎開中の黒田清輝作品並びに写真原版の引揚げを完了した。

昭和22年5月1日 美術研究所官制が廃止され、国立博物館官制が制定された。美術研究所は同館の附属美術研究所となった。

国立博物館に保存修理課発足。同課内に保存技術研究室を置いた(保存科学部の前身)。昭和23年度より専任の職員を配置し、研究を開始した。研究室は国立博物館本館地下の修理室の一室(66㎡)に設けた。

昭和25年8月29日 文化財保護法の制定にともない、美術研究所は文化財保護委員会の附属機関となった。

同 年8月29日 文化財保護委員会事務局設置にともない、保存科学研究室は国立博物館保存修理課から文化財保護委員会事務局保存部建造物課に所属換えとなった。

昭和26年1月31日 美術研究所組織規程が定められ第一研究部・第二研究部・資料部・庶務室が置かれた。

昭和27年4月1日 文化財保護法の一部が改正、東京文化財研究所組織規程が定められ、美術部・芸能部・保存科学部・庶務室の3部1室が置かれ、美術研究所組織規程が廃止された。

また、文化財保護委員会事務局保存部建造物課保存科学研究室も廃止された。

同 年7月1日 芸能部研究室として東京芸術大学音楽学部邦楽科教室2室を同大学から借用し、研究を開始した。

沿革

- 昭和28年4月26日 保存科学部研究室として、東京国立博物館構内の倉庫132㎡を改造のうえ移転した。
- 昭和29年7月1日 東京文化財研究所組織規程の一部が改正され、東京国立文化財研究所となった。
- 昭和32年3月22日 東京国立博物館構内に木造、外部鉄網モルタル塗、平屋建、8㎡の保存科学部の薬品庫が竣工した。
- 同 年11月30日 従来の2階建書庫のうえにさらに1階を増築3階建とし、増築分延面積71㎡が竣工した。
- 昭和34年4月30日 東京国立文化財研究所研究受託規程が定められ、この年度から受託研究が開始された。
- 昭和36年9月16日 東京国立文化財研究所組織規程の一部が改正され、従来の庶務室は庶務課となった。
- 昭和37年3月31日 東京国立博物館内に保存科学部庁舎（保存科学部実験室）として、鉄筋コンクリート造、2階建、延面積663㎡の建物1棟が竣工した。
- 同 年7月1日 東京国立文化財研究所組織規程の一部が改正され、新たに保存科学部に修理技術研究室が置かれた。
- 同 年7月20日 芸能部研究室は、保存科学部庁舎の竣工にともない、旧保存科学部庁舎に移転した。
- 昭和43年6月15日 文部省設置法の一部が改正され、本研究所は文化庁附属機関となった。
- 昭和44年8月23日 保存科学部庁舎に隣接して新営される別館庁舎（延1,950.41㎡）の起工式が行われた。
- 昭和45年3月25日 前記の別館が竣工したので、同年5月26日竣工式が行われた。
- 同 年3月25日 芸能部は、別館3階に移転した。
- 同 年5月8日 保存科学部は別館の地階～2階に実験用機械類の移転据付を完了した。
- 同 年6月29日 保存科学部庁舎の1階の模様替工事に着手し、同年10月15日工事が完了した。
- 同 年11月2日 所長及び庶務課は、本館から保存科学部庁舎の1階に移転し

た(本館は、美術部庁舎となる)。これにより研究所の所在地表示は「12番53号」が「13番27号」に変更された。

昭和46年4月1日 保存科学部庁舎及び別館の敷地2.658㎡を東京国立博物館から所管換された。

昭和48年4月12日 文部省設置法施行規則の一部が改正され、新たに修復技術部が設けられ4部1課となり、修復技術部に第一修復技術研究室及び第二修復技術研究室が置かれ、保存科学部修理技術研究室は廃止された。

昭和52年4月18日 文部省設置法施行規則の一部が改正され、情報資料部の新設により5部1課となり、情報資料部に文献資料研究室及び写真資料研究室が置かれ、美術部資料室は廃止された。

昭和53年3月20日 本館構内の写場等(木造、平屋建、延面積144㎡)を取りこわし、情報資料部研究棟として、鉄筋コンクリート造、地下1階、地上3階、延面積569.95㎡の建物が竣工した。

昭和53年4月5日 文部省設置法施行規則の一部が改正され、新たに修復技術部に第三修復技術研究室が置かれた。

昭和59年6月28日 文部省組織令が改正され、本研究所は文化庁施設等機関となった。

平成2年10月1日 文部省設置法施行規則の一部が改正されて新たにアジア文化財保存研究室が置かれ、5部1室1課となった。

平成5年4月1日 文部省設置法施行規則の一部が改正されてアジア文化財保存研究室は、国際文化財保存修復協力室となった。

平成7年4月1日 文部省設置法施行規則の一部が改正されて国際文化財保存修復協力室が廃止され、新たに国際文化財保存修復協力センターが設置された。同センターには、企画室及び環境解析研究指導室が置かれ、1センター5部1課となった。

同 年4月1日 東京芸術大学と「東京芸術大学大学院美術研究科文化財保存学専攻の教育研究に対する連携・協力に関する協定書」が交わされ、連携併任分野として独立専攻大学院文化財保存学専攻(システム保存学)が設置された。

3. 歴代所長 (昭和5年～平成8年)

主 事	正 木 直 彦	(昭和 5. 6.28～昭和 6.11.24)
主 事	矢 代 幸 雄	(昭和 6.11.25～昭和10. 5.31)
所長事務取扱	和 田 英 作	(昭和10. 6. 1～昭和11. 6.21)
所 長	矢 代 幸 雄	(昭和11. 6.22～昭和17. 6.28)
所長事務取扱	田 中 豊 藏	(昭和17. 6.29～昭和22. 8.15)
所 長	田 中 豊 藏	(昭和22. 8.16～昭和23. 5.10)
所 長 代 理	福 山 敏 男	(昭和23. 5.11～昭和24. 8.30)
所 長	松 本 栄 一	(昭和24. 8.31～昭和27. 3.31)
所長事務代理	矢 代 幸 雄	(昭和27. 4. 1～昭和28.10.31)
所 長	田 中 一 松	(昭和28.11. 1～昭和40. 3.31)
所 長	関 野 克	(昭和40. 4. 1～昭和53. 4. 1)
所 長	伊 藤 延 男	(昭和53. 4. 1～昭和62. 3.31)
所 長	濱 田 隆	(昭和62. 4. 1～平成 3. 3.31)
所 長	西 川 杏太郎	(平成 3. 4. 1～平成 8. 3.31)
所 長	渡 邊 明 義	(平成 8. 4. 1～現在)

II. 機構・職員・予算

東京国立文化財研究所は、文化財に関する調査研究、資料の作成およびその公表を行うことを目的として設立された文化庁の施設等機関である。その機構等は次のとおりである。

1. 機 構



2. 職 員

(平成9年3月30日現在)

所 属	職 名	氏 名	専 門 分 野
所 庶 務 係	長 課	渡 邊 明 義	(美術史)
	課 長 補 佐	山 代 文 雄	
	課 長 補 佐	篠 原 一 夫	
	係 長 員	小 関 仁 志	
	係 員	宮 腰 香 代 子	
	事 務 補 佐 員	鈴 木 紀 枝	
	"	武 田 知 子	
	係 長 員	横 山 直 樹	
	係 員	本 澤 英 伸	
	事 務 補 佐 員	時 田 真 理	
会 計 係	"	後 藤 由 希 子	
	"	村 上 浩 子	
	勞 務 補 佐 員	菊 地 廣 吉	
	部 長 員	鶴 田 武 良	(中国絵画史)
	主 任 研 究 官	島 尾 新	(日本中世絵画史)
	"	山 梨 絵 美 子	(日本近代絵画史)
	"	岡 田 健	(中国彫刻史)
	第 一 研 究 室	室 長 中 野 照 男	(東洋絵画史)
	調 査 員 (非)	北 澤 憲 昭	(日本絵画史)
	第 二 研 究 室	室 長 田 中 淳	(日本近代絵画史)
芸 能 部	部 長 蒲 生 郷 昭	(日本音楽史)	
演 劇 研 究 室	室 長 鎌 倉 惠 子	(日本近世演劇)	
音 楽 舞 踊 研 究 室	調 査 員 (非)	細 井 尚 子	(中国演劇)
	室 長	羽 田 昶	(日本中世演劇)
	研 究 員	高 桑 いづみ	(日本音楽史)
	調 査 員 (非)	石 井 倫 子	(日本中世演劇)
民 俗 芸 能 研 究 室	室 長	中 村 茂 子	(民俗芸能)
	調 査 員 (非)	串 田 紀 代 美	(民俗芸能)
保 存 科 学 部	部 長	三 浦 定 俊	(計測工学)
	主 任 研 究 官	佐 野 千 絵	(光化学)

所 属	職 名	氏 名	専 門 分 野
化 学 研 究 室	室 長	平 尾 良 光	(無機化学)
	研 究 員	早 川 泰 弘	(無機化学)
物 理 研 究 室	室 長	石 崎 武 志	(地球科学)
生 物 研 究 室	室 長	三 浦 定 俊	(計測工学)
	事 務 取 扱 員	木 川 り か	(生物化学)
修 復 技 術 部	調 査 員 (非)	山 野 勝 次	(応用昆虫学)
	部 長	増 田 勝 彦	(装漬技術)
	主 任 研 究 官	川 野 邊 涉	(高分子化学)
	"	尾 立 和 則	(装漬技術)
第 一 修 復 技 術 研 究 室	室 長	中 里 壽 克	(漆芸技法)
第 二 修 復 技 術 研 究 室	室 長	松 本 修 自	(建築史)
第 三 修 復 技 術 研 究 室	技 術 補 佐 員	坂 本 雅 美	
	室 長	青 木 繁 夫	(考古学)
情 報 資 料 部	技 術 補 佐 員	犬 竹 和	
	部 長	松 島 健	(日本彫刻史)
	主 任 研 究 官	井 手 誠 之 輔	(東洋絵画史)
文 献 資 料 研 究 室	"	長 岡 龍 作	(日本彫刻史)
	室 長	米 倉 迪 夫	(日本中世絵画史)
写 真 資 料 研 究 室	研 究 員	勝 木 言 一 郎	(中国絵画史)
	事 務 補 佐 員	中 村 節 子	
国 際 文 化 財 保 存 修 復 協 力 セ ン タ ー 画 室	室 長	鈴 木 廣 之	(日本近世絵画史)
	専 門 職 員	野 久 保 昌 良	(美術写真)
	調 査 員 (非)	玉 蟲 敏 子	(日本絵画史)
環 境 解 析 研 究 指 導 室	セ ン タ ー 長	宮 本 長 二 郎	(建築史)
	室 長	中 島 健 次	
	係 員 (併任)	松 下 冬 樹	
	調 査 員 (非)	吉 野 貴 子	
保 存 科 学 部	"	大 江 佐 知 子	
	研 究 員	松 原 美 智 子	
修 復 技 術 部	室 長	西 浦 忠 輝	(材質改良学)
情 報 資 料 部	研 究 員	朽 津 信 明	(地質学)
国 際 文 化 財 保 存 修 復 協 力 セ ン タ ー	事 務 補 佐 員	二 神 葉 子	
	客 員 研 究 員	二 宮 修 治	(無機化学)
修 復 技 術 部	"	松 田 史 朗	(腐食工学)
情 報 資 料 部	"	伊 與 田 光 宏	(情報工学)
国 際 文 化 財 保 存 修 復 協 力 セ ン タ ー	"	松 本 健	(考古学)

機構・職員・予算

平成8年度における異動者

所 属	官 職 名	氏 名	異 動 日	異 動 内 容
庶務課	所 長	渡 邊 明 義	平8. 4. 1	採 用
	係 長	小 関 仁 志	平8. 4. 1	転 任
	係 長	横 山 直 樹	平8. 4. 1	昇 任
	係 員	本 澤 英 伸	平8. 4. 1	転 任
美術部	事務補佐員	村 上 浩 子	平8.12.16	採 用
	室 長	田 中 淳	平8. 4. 1	昇 任
芸能部	調査員(非)	北 澤 憲 昭	平8. 4. 1	採 用
	調査員(非)	串 田 紀 代 美	平8. 4. 1	採 用
保存科学部	室 長	石 崎 武 志	平8.12. 1	転 任
	研 究 員	早 川 泰 弘	平8. 4. 1	採 用
情報資料部	部 長	松 島 健	平8. 4. 1	昇 任
	国際文化財 保存修復協 力センター	室 長	中 島 健 次	平8. 4. 1
	事務補佐員	二 神 葉 子	平8. 4.15	採 用
	客員研究員	松 本 健	平8. 4. 1	採 用

平成8年度における退職者等

所 属	官 職 名	氏 名	在 所 期 間	備 考
庶務課	課 長	山 代 文 雄	平6. 4. 1~平9. 3.31	転 出
	課長補佐	篠 原 一 夫	平3. 4. 1~平9. 3.31	転 出
	係 員	宮 腰 香 代 子	平5. 5. 1~平9. 3.31	転 出
	係 員	本 澤 英 伸	平8. 4. 1~平9. 3.31	転 出
	事務補佐員	鈴 木 紀 枝	平6. 4. 1~平9. 3.30	退 職
	事務補佐員	瀧 澤 桂 子	平6. 4. 1~平9. 1.15	退 職
	事務補佐員	小 倉 聖 子	平6. 4. 1~平9. 3.30	退 職
美術部	調査員(非)	北 澤 憲 昭	平8. 4. 1~平9. 3.31	退 職
	保存科学部	客員研究員	二 宮 修 治	平8. 4. 1~平9. 3.31

3. 名誉研究員

氏名	退職時官職名	在所期間	名誉研究員 発令年月日
白畑よし		昭5. 6.30~昭27. 8. 1	53.10.18
高田修	美術部長	昭27.12. 1~昭44. 3.31	"
登石健三	保存科学部長	昭27.10. 1~昭50. 4. 1	"
岡畏三郎	美術部長	昭20. 5.15~昭51. 4. 1	"
関野克	所長	昭40. 4. 1~昭53. 4. 1	"
秋山光	美術部第一研究室長	昭16.10. 1~昭42. 2. 1	54.10.18
久野健	情報資料部長	昭20. 5.31~昭57. 4. 1	57.10.18
川上涇	美術部長	昭21. 2.28~昭57. 4. 1	"
関千代	美術部第二研究室長	昭18.12.15~昭58. 4. 1	58.10.18
横道万里雄	芸能部長	昭28. 3.16~昭51. 4. 1	59.10.18
上野アキ	情報資料部文献資料研究室長	昭17.11. 3~昭59. 4. 1	"
江上綏	情報資料部主任研究官	昭38. 5.18~昭59. 3.31	"
田村悦子	美術部主任研究官	昭22. 6.16~昭60. 3.31	60.10.18
猪川和子	情報資料部文献資料研究室長	昭22. 6.27~昭60. 3.31	"
伊藤延男	所長	昭53. 4. 1~昭62. 3.31	62.10.18
柳澤孝	美術部長	昭21. 9.30~昭62. 3.31	"
三隅治雄	芸能部長	昭27.10. 1~昭63. 3.31	63.10.18
樋口清治	修復技術部長	昭37.11. 1~昭63. 3.31	"
田實榮子	美術部主任研究官	昭23. 3.31~平元. 3.31	1.10.18
見城敏子	保存科学部物理研究室長	昭34. 4. 1~平元. 3.31	"
濱田隆	所長	昭62. 4. 1~平4. 3.31	3.10.18
関口正之	美術部長	昭42. 2. 1~平3. 3.31	"
佐藤道子	芸能部長	昭34. 4. 1~平4. 3.31	4. 4. 1
馬淵久夫	保存科学部長	昭50.10. 1~平4. 3.31	"
新井英夫	保存科学部長	昭45. 9. 1~平5. 3.31	5. 4. 1
石川陸郎	保存科学部主任研究官	昭32. 4.15~平5. 3.31	"
西川杏太郎	所長	平3. 4. 1~平8. 3.31	8. 4. 1
門倉武夫	保存科学部生物研究室長	昭32. 4. 1~平8. 3.31	"
三輪英夫	美術部第二研究室長	昭53. 8. 1~平8. 3.31	"

4. 平成8年度予算

() は補正後を表す

事 項	金 額
	(393,845) 千円
人件費	395,935
	(376,372)
運営費	406,701
	(30,379)
事業管理	33,969
	(43,633)
一般研究	47,151
	(147,703)
特別研究	159,734
	(2,414)
受託研究	2,414
	(152,243)
文化財保存修復の国際交流事業の促進等	163,433
	(1,866,932)
施設費	866,618
文部省	6,246
各所修繕	565
在外研究員旅費	4,761
退職手当	490
赴任旅費	430
文化庁	33,872
文化振興費	27,872
文化財保存事業費	6,000
計	(2,637,149)
	1,709,372

5. 平成8年度特別研究一覧

事 項	金 額
	千円
中国仏教美術基準作品調査研究	6,902
日本近代美術の発展に関する明治後期から昭和初期の基準資料集成	5,519
近代歌舞伎の伝承に関する研究	5,523
文化財施設の保存(収蔵展示)環境の研究	7,846
文化財における環境汚染の影響と修復技術の研究協力	80,000
文化財の保存を目的としたレンガの劣化現象と保存対策に関する調査研究	4,974
計	110,764

6. 平成8年度科学研究費補助金交付一覧

研究種目	研 究 課 題	研究代表者	交付額
			千円
重点領域研究(1)	化学的・光学的情報を用いた遺跡探査の手法に関する研究	三浦 定俊	5,600
重点領域研究(2)	美術史研究支援ツールの研究	米倉 迪夫	2,200
基礎研究(A)(1)	文化財の保存修復に用いられた材料の効果に関する研究	増田 勝彦	7,000
基礎研究(A)(2)	文化財収蔵庫の庫内空気環境調査法の公定化のための基礎的研究	佐野 千絵	9,700
基礎研究(A)(2)	古建築の保存を目的とした石材強化保存用合成樹脂の物性評価	西浦 忠輝	8,300
基礎研究(C)(2)	弥生時代青銅器の産地推定	平尾 良光	1,400
基礎研究(C)(2)	環境の湿度変化が国宝中尊寺金色堂に与えた影響に関する研究	三浦 定俊	300
基礎研究(C)(2)	古代日本の動物遺体のDNA解析	木川 りか	700

機構・職員・予算

研究種目	研究課題	研究代表者	交付額
奨励研究(A) (2)	初唐・盛唐の敦煌における極楽イメージの形成について —阿弥陀浄土変相や観経変相にみる九品住生の表現を中心に—	勝木言一郎	1,000
奨励研究(A) (2)	古墳の装飾に用いられた赤色顔料に関する鉱物学的研究	朽津 信明	1,000
基礎研究(A) (1)	美術工芸品等の防災に関する調査研究	中野 照男	7,000
国際学術研究	タイ国レンガ造遺跡の劣化現象と保存対策に関する調査	西浦 忠輝	2,000
国際学術研究	中国砂漠地帯における文化財の保存対策に関する共同研究	宮本長二郎	2,100
国際学術研究	古代東アジアにおける青銅器の変遷に関する考古学的・自然学的研究	平尾 良光	4,600
国際学術研究	文化財の微量試料分析法の開発	三浦 定俊	4,800
国際学術研究	建造物保存修復の理念及び方法に関する研究	松本 修自	7,100
計			64,800

7. 平成8年度受託研究一覧

研究課題	受入額
	円
太宰府市観世音寺一丁目地内出土の漆手箱復元に関する研究	800,000
装潢材料の生化学研究	300,000
根塚遺跡出土鉄製品の修復研究	276,000
藩札の保存および料紙に関する研究	420,000
猪俣北古墳群第1号墳出土鉄製品の修復研究	618,000
計	2,414,000

III. 調査研究

1. 中長期研究計画一覧

部 名	課 題 名	研究代表者	期 間
美 術 部	*美術に関する基礎資料の研究 室町水墨画資料	島尾 新	平 6. 4 ～平11. 3
	鎌倉後期彫刻の基準作品資料	松島 健	平 8. 4 ～平13. 3
	日本絵画史年記資料集成15世紀	鈴木 廣之	平 3. 4 ～平 9. 3
	*東アジアにおける造形と社会	島尾 新	平 6. 4 ～平11. 3
	*中国仏教美術基準作品調査研究	中野 照男	平 4. 4 ～平10. 3
	*明治後期から昭和前期の美術団体、 内外博覧会に出品された作品及びそ の作家の研究	田中 淳	平 8. 4 ～平13. 3
芸 能 部	*近代歌舞伎の伝承に関する研究	蒲生 郷昭	平 8. 4 ～平12. 3
	*近現代における能楽技法の伝承に関 する研究	羽田 昶	平 7. 4 ～平11. 3
	*元禄期の浄瑠璃・歌舞伎の研究	鎌倉 恵子	平 6. 4 ～平10. 3
	*「翁」の技法集成	羽田 昶	平 6. 4 ～平 9. 3
	*日本音楽の伝承に関する研究	蒲生 郷昭	平 6. 4 ～平 9. 3
	*伝統的唱歌の研究	高桑いづみ	平 5. 4 ～平10. 3
	*芸能に用いられる武器の研究	中村 茂子	平 5. 4 ～平 9. 3
保存科学部	*文化財施設の保存（収蔵・展示）環 境の研究	三浦定俊	平 7. 4 ～平12. 3
	*新しい文化財防虫防霉法の研究	三浦定俊	平 6. 4 ～平13. 3
	*古代東アジアにおける青銅製品の変 遷に関する研究	平尾良光	平 7. 4 ～平12. 3
修復技術部	*文化財における環境汚染の影響と修 復技術の開発研究	増田 勝彦	平 4. 4 ～

美術部

部名	課題名	研究代表者	期間
修復技術部	*文化財の伝統的修復材料の研究(第2期) *敦煌文化財保存修復に関する調査研究(第2期)	中里 壽克	平5.4 ~平9.3 平8~平9
情報資料部	*美術情報処理システムの研究—データの共有化を中心として— *検索辞書システムの研究 *デジタル画像データの蓄積と活用に関する基礎的研究	松島 健 米倉 迪夫 鈴木 廣之	平元.4 ~平11.3 平6.4 ~平11.3 平6.4 ~平11.3
国際文化財保存修復協力センター	*世界、特にアジア諸国における文化財保存に関する情報の収集 *屋外石造文化財の劣化と保存修復処置に関する研究 *文化財の保存を目的とした、レンガの劣化現象と保存対策に関する調査 *敦煌文化財の保存修復に関する日中共同研究	松本 修自 西浦 忠輝 西浦 忠輝 宮本長二郎	平3.4 ~平12.3 平3.4 ~平12.3 平6.4 ~平15.3 平3.4 ~平13.3

2. 美術部

(1) 概要

美術部は日本・東洋の古美術並びに日本の近代・現代美術とこれらに関連ある西洋美術についての基礎的調査研究を行い、かつ、その成果を公表することを活動の目的としている。美術部は二室より構成され、第一研究室は古美術を担当し、第二研究室は近代・現代美術を担当している。

調査研究は各時代にわたり、絵画・彫刻・工芸の各分野について、作品と文献資料との両面から実証的に進め、ともに基礎となる研究資料の作成と整理とにつとめている。その他、現代美術の動向に関する調査と資料収集も並行して行っている。また当部では、作品に対する科学的な鑑識法を早くから積極的に活用してきた。これも当部の研究活動の特色である。なお情報資料部員との間では、研究や調査の面において緊密な協力体制がとられている。

そのほか他機関との共同研究による広領域の研究にも参加している。なお、

研究員それぞれの研究課題と内容は(2)の各論の項に示すとおりである。

調査研究の結果は、機関誌『美術研究』（昭和7年創刊）やその他の学会誌に発表し、単行の研究報告も随時刊行している。さらに、研究成果の一部を広く一般の理解に資するために、情報資料部との共同で毎年一回公開学術講座を開催している。また毎年『日本美術年鑑』（昭和11年創刊）を発行している。

なお美術部は黒田清輝の遺産に基づいて創立された美術研究所を前身とする。現在も黒田清輝の作品その他関係資料を保管し、毎週一回木曜の午後にはその多くを陳列する黒田記念室を公開している。

第一研究室

江戸時代までの日本美術及び東アジア地域の美術に関する調査研究並びに資料収集、公表を主務とする。また、『美術研究』の編集を担当している。

第二研究室

明治以降の日本近代美術に関する調査研究と、これに関連する西洋美術及び日本近世の洋風美術の調査研究、とくに現代美術に関する調査研究においては、その年度に収集した資料を整理し、その成果を『日本美術年鑑』として毎年刊行している。平成8年度は、平成7年の内容をもった平成8年版を刊行し、引続き平成9年版の編集に着手した。

また、昭和52年度以来実施してきた黒田清輝巡回展は、平成8年度はブリヂストン美術館・石橋美術館・京都国立近代美術館・日本経済新聞社との共催で「白馬会—明治洋画の新風」展として行った。

(2) 各 論

1. 美術に関する基礎資料の研究

(1) 室町水墨画資料（中長期：5年計画の第3年次）

1) 下記の作品の調査を行った。

室町水墨画及び関連作品（京都国立博物館・個人蔵）

美術部

東京国立博物館所蔵狩野家模本中の雪舟画（東京国立博物館と共同）

2) 本年度は雪舟関係の資料を収集した。東京国立博物館所蔵狩野家模本については、約600点の模本について、画中の書込みの読解と編年の作業を開始した。また、売立目録所載の雪舟画の整理、「天橋立図」「四季山水図巻」（京都国立博物館）等について、添状等の基礎資料を収集した。

3) 収集した資料については、整理とデータベース化を進めた。<島尾、(情)井手>

(2) 鎌倉後期彫刻の基準作品資料（中長期：5年計画の第1年次）

1) 在銘作品及び納入品所在作品の調査

2) 作品及び仏師関連資料の収集

造像需要が全国的に広がる鎌倉後期には仏所が分立して各地で活躍、そのこともあって仏師名を明記した作品が著しく増大するが、主として円派仏師とその既知作品の資料収集を行ない、在銘作品の年表を作成した。この過程で、朝円作毘沙門天像など、この派の新資料を発掘することができた。研究成果の一部は来年度に公刊の予定である。<(情)松島>

(3) 日本絵画史年記資料集成15世紀（中長期：6年計画の第6年次）

昨年度は、「一五世紀絵画史年表」（改定第1稿）について、重複項目を削除し、名称、所蔵などの誤りを訂正し、さらに昨年度新たに採集した項目から追加して「増補改定第1稿」を作成した。ただし時間の制約から、採集項目のすべてを年表に追加することができず、絵画を中心に計85件の項目の追加にとどまった。「一五世紀絵画史年表」（増補改定第1稿）の収録件数は次のとおり。

絵画：287件、彫刻：166件、工芸：58件、書跡：17件、合計：528件

本年度は、収録項目のうち絵画を中心にして1430年代初頭までの銘文・奥書・賛文などの翻刻と解説の作業を終えた。<(情)鈴木>

2. 東アジア美術における造形と社会（中長期：5年計画の第3年次）

(1) 制作と享受の場についての研究

1) 古代的空間意識と彫像の機能

8・9世紀日本の武装像について、そのかたちと機能を、当時の対外意識や境界観と関連づけて考察し、太宰府観世音寺、隼人町隼人塚などで関連作品を調査した。その中間報告を所内研究会においておこなった。

2) 寧波・杭州における寺院信仰と絵画

奈良国立博物館で開催された『東アジアの仏たち』展出品の中国仏画・高麗仏画の基本資料を蒐集するとともに、その国籍・制作地・制作年代等について、再検討した。また14世紀の普陀山の景観を描いた作品を紹介した（『美術研究』365号、1996年10月）。

3) 明治期における古美術評価

内国勸業博覧会・内国絵画共進会等において当代美術とならんで多数出品された古美術品に注目し、その作品評価の変遷史をたどるため、基礎的調査を開始した。

(2) 流通と交流についての研究

1) 朝鮮仏画の請来事情

請来された高麗仏画と李朝仏画の所在地について情報を集め、その分布状況の違いに着目して、朝鮮から仏画を請来した地域・時代の社会的背景について考察を進めた。

2) 室町時代における美術の流通と価値観の形成

室町時代における唐物と座敷飾りについての研究を継続し、それらが儀礼・売買・鑑識等を含む総合的なシステムを形成する過程を探求した。

3) 入明画僧の旅の実態

遣明使の入明経路と事蹟についての史料を収集し、それを基礎に雪舟をはじめとする入明画僧の旅の具体的な様相を解明する作業を進めた。

(3) 技術と素材についての史的研究

室町時代の夏珪様山水図巻について、画師が画本からどのように画面を組み立てたかを具体的に探る作業に着手した。<島尾、中野、(情) 鈴

美術部

木、井手、長岡、(調)玉蟲>

3. 中国仏教美術基準作品調査研究(中長期:6年計画の第5年次)

本研究は、中国仏教美術作品のうち、銘記、落款、印章、賛文等によって、制作年、制作地、作者、発願者などが明らかなものを「基準作品」として調査し、基本的なデータや詳細な写真を整備することによって、中国仏教美術の体系を見直し、その特質を明らかにするための「ものさし」を作ろうとするものである。

本年度は下記の調査、研究を行なった。

(1) 研究会(研究協力者会議)の開催

中国仏教美術、中国や日本に深く関わりのある朝鮮半島の仏教美術、また日本における中国仏教美術の受容の諸相について研究実績をもつ研究者を招き、各自のデータを持ち寄って、問題の所在を検討し、さらに今後の調査研究の方法等について討議した。本年度の研究発表者は次の6名である。

- 肥田路美(早稲田大) 「法隆寺金堂壁画に描かれた山岳景の意義」
岡田 健(東文研) 「初唐期阿弥陀如来像の諸相」
「調査研究報告 東寺兜跋毘沙門天像について」
松浦正昭(奈良博) 「木彫仏請来動向から見た東寺兜跋像」
長岡龍作(東文研) 「九世紀日本の武装像—『境界の像』の観点から」
武田和昭(円明院) 「定印阿弥陀像について」
泉 武夫(京博) 「仏画における黄金身の表現」

(2) 現地調査

日本国内では、年紀を有する中国仏教美術作品を中心に調査、写真撮影、X線透過撮影等を行なった。本年度は、東寺木造兜跋毘沙門天像、同観智院木造五大虚空蔵菩薩像、大徳寺五百羅漢像(京博、奈良博寄託分)等の調査を実施した。また、中国や欧米への出張の折に、美術館、博物館、寺院等において、その所蔵作品の調査を実施した。

(3) 基礎資料の収集

引き続き、基礎資料の収集を行なった。本年度は、情報資料部が保管する拓本、約3000枚について整理、研究を始めた。その内、約2000枚は、

中国河南省龍門石窟の造像銘記の拓本である。龍門石窟分の基本カードの作成を終了した。

(4) データベースの作成

欧米に所在する中国仏教彫刻に関するデータベースを作成した。また、中国仏教美術研究の基礎史料として、『(梁)高僧伝』、『龍門石窟石刻録』のデータを入力した。

(5) 研究成果の公表

調査研究や研究会の成果を、『美術研究』等に発表した。宮崎法子(363, 364号), 井手誠之輔(365号), 岡田健(366号), 肥田路美(『仏教芸術』230号)など。龍門石窟造像銘記拓本の目録, 東寺木造兜跋毘沙門天像の研究等, 今年度の調査研究の成果も順次公表する予定である。<中野, 島尾, 岡田, (情)米倉, 井手, 長岡, 勝木>

4. 明治後期から昭和前期の美術団体, 内外博覧会に出品された作品及びその作家の研究(中長期:5年計画の第1年次)

(1) 明治後期~昭和前期美術資料

- 1) 万国博覧会資料の研究成果として「万国博覧会美術品出品目録」(東京国立文化財研究所編)を刊行した。
- 2) 岩手県立博物館, 萬鉄五郎記念館所蔵の大正期に制作された作品を調査・撮影した。
- 3) 二科展, フェーザン会展, 草土社展の出品目録をデータベースを構築した。
- 4) 光風会, 国画会, 独立美術協会の出品目録を収集整理した。
- 5) 林忠正宛書簡の調査・研究に着手した。<田中, 山梨>

5. 近百年來中国繪画史研究

日本留学中国人美術学生及び1912年-37年に中国で紹介された欧米美術について調査を行った。また, 北京, 上海で現代中国繪画の動向について調査を行った。<鶴田>

3. 芸 能 部

(1) 概 要

芸能部は、日本の伝統芸能に資するために必要な基礎研究を行うことを目的とし、演劇研究室・音楽舞踊研究室・民俗芸能研究室の三室によって構成されている。芸能部の研究目標としては、諸芸能の理念・構造・技法およびその継承保存に関する研究などがあり、その研究に必要な資料の収集・整備、および記録の作成のための撮影・録音・録画などの作業を行う。研究の成果は、刊行・夏期学術講座・公開学術講座などによって公表する。

平成8年度は、特別研究「近代歌舞伎の伝承に関する研究」（4年計画）の第1年次にあたり、資料収集、記録作成、実地調査を行い、研究会を開催した。研究成果は夏期学術講座・「芸能の科学」などで公表する。

演劇研究室

日本古典演劇について芸能学的に調査・研究を行い、また、これら諸芸能の周辺にあって、伝統芸能の成立に深い関係をもつ諸分野についても調査研究を進めている。

平成8年度は、個人研究として「元禄期の浄瑠璃・歌舞伎の研究」「中国演劇の研究」、共同研究として「近代歌舞伎の伝承に関する研究」に参加した。

音楽舞踊研究室

日本の音楽について、芸能学的・音楽学的な調査研究を行い、これら伝統音楽の成立に深い関係をもつ周辺分野についても、調査研究を進めている。

平成7年度は、個人研究として、「日本音楽の伝承における研究」「近現代における能楽技法の伝承に関する研究」「伝統的唱歌の研究」「狂言に見る風俗としての衆道」を行ったほか、共同研究「近代歌舞伎の伝承に関する研究」「翁の技法集成」に参加した。

民俗芸能研究室

全国各地に分布伝承される民俗芸能を対象とし、それらの保存・継承に資するために必要な研究を行っている。

平成8年度は、個人研究として「芸能に用いられる武器の研究」「東京都の祭囃子の研究」を行ったほか、共同研究「近代歌舞伎の伝承に関する研究」に参加した。

(2) 各 論

1. 近代歌舞伎の伝承に関する研究（4年計画の第1年次）

幹部俳優の死去や高齢化、俳優の生活環境や意識の変化、観客の嗜好の変化、興行のあり方等が、歌舞伎の正当な演技の伝承に深刻な影響を与えている。本研究は近代歌舞伎の歩みの中で、具体的に何が変わったのか、その原因は何かを考え、今後の歌舞伎がどうあるべきかを検討し提言しようとするものである。本年度は1年次で下記の調査、研究を行った。

- (1) 日本芸術文化振興会（国立劇場）の俳優養成事業の調査。
- (2) 歌舞伎批評の実態
- (3) 海外における歌舞伎研究の調査
- (4) 民俗芸能の歌舞伎調査

2. 元禄期の浄瑠璃・歌舞伎の研究（6年計画の第3年次）

元禄期の歌舞伎について、動物の登場する場を中心に絵画、仏典も視野に入れて調査した。〈鎌倉〉

3. 「翁」の技法集成（5年計画の第3年次）

本年度は芸能部舞台で和泉流、大蔵流の三番叟（さんばそう）と千歳（せんざい）の実技者の型を撮影記録し、技法に関する聞き取り調査を行った。また技法の比較のため、日本舞踊花柳流の「種蒔三番叟」「二人三番叟」を撮影収録した。なお、撮影したフィルムの一部はphoto-CD化し、型の比較を試みている。〈羽田・高桑・石井〉

4. 日本音楽の伝承に関する研究（3年計画の第3年次）

日本音楽の変化の諸相について考察する。本年度は下記の研究を行った。

芸 能 部

- (1) 長唄とめりやすの詞章集『めりやす豊年歳』について、研究史を踏まえつつ、その性格の一面と各版の内容とを考察した。
- (2) 『教訓抄』語彙索引作成を継続し、「年代編」を完成した。<蒲生>
5. 近現代における能楽技法の伝承に関する研究（5年計画の第2年次）
近現代も変遷し続けている能楽の、特に技法の伝承と演出のあり方に関わる事象を重点的な研究課題とする。
本年度は、明治以後に脚色上演された歌舞伎舞踊の能取り物について、「紅葉狩」を中心に、原典の能と比較しながら演出論的に検討を進めた。
<羽田>
6. 伝統的唱歌の研究（5年計画の第4年次）
日本の伝統音楽は「唱歌」というスタイルで伝承されてきた。唱歌の分析を行い、その変遷をたどることで伝統音楽の歴史を考察する。本年度は下記の研究を行った。
 - (1) 室町末期から現行に至る能管の唱歌を分析し、能の舞中で奏するオロシの成立過程を考察した。
 - (2) 能管の発生から流儀の確立に至る流れと音楽の特質を、唱歌の検討を交えながら考察した。
 - (3) 鬼狂言の型「責メ」に用いられる囃子の古態を、唱歌から検討した。
 - (4) 平安末期から鎌倉期にかけての雅楽の古い唱歌を考察し、能の翁の詞章「とうとうたらし」との関連性を考察した。<高桑>
7. 芸能に用いられる武器の研究（4年計画の第4年次）
 - (1) 民俗芸能・民俗行事で棒の果たす役割を考察し公表した。
 - (2) 刀剣と芸能に関する資料を収集した。<中村>
8. 中国福建省泉州の『目連戯』と日本の目連（国際共同研究：2年計画の第2年次）
日本学術振興会から研究費を得て、下記の調査、研究を行った。
 - (1) 泉州の人形戯『目連救母』の撮影を行い、詳細な演出記録を作成した。
 - (2) 人形戯に関係深い宗教儀礼の様相を記録した。
 - (3) 泉州の人形戯実技者と享受者の聞き取り調査を行った。
 - (4) 泉州で、関連する美術作品の調査を行った。

- (5) 石川県石川郡の盆踊り『目連尊者地獄めぐり』の調査を行った。
- (6) 8月21日・22日に泉州海外交通史博物館で中国の研究者・実技者とシンポジウムを行った。〈鎌倉・中村・細井・勝木（情報資料部）〉

9. 中国演劇の研究

中国泉州の廟で奉納される人形戲の実演調査を行い、廟と演者、享受者の関係について考察した。成果は「芸能の科学」25で公表した。〈細井〉

10. 狂言に見る風俗としての衆道

狂言の古台本を素材に、衆道がどのように描かれているかを考察した。成果は第27回公開学術講座で発表した。〈石井〉

11. 東京都の祭囃子調査

東京都に伝承されている祭囃子を調査し、特に里神楽との相関性を考察した。成果は「芸能の科学」25で公表した。〈串田〉

4. 保存科学部

(1) 概 要

文化財の材質・構造・技法および劣化機構の科学的ならびに文化財のおかれている保存環境の科学的研究を行い、これらを基礎として文化財保存技術に関する研究を行っている。言い替えば、文化財の自然科学的研究、文化財を試料とする科学技術史的研究、文化財保存科学のための科学技術の応用研究の3方面である。研究組織は化学研究室、物理研究室、生物研究室の三室からなり、研究成果は修復技術部と共同編集の機関誌「保存科学」などに公表され、文化財の指定・保存対策・修復処置の基礎資料として役立てられている。

化学研究室

化学研究室では文化財の材質ならびに保存環境に関する問題点を化学的手法を用いて調査・研究している。X線分析法、質量分析法などを用い、主として金属文化財に関する劣化、保存対策、材料産地の推定などの研究を進め

保存科学部

ている。また、文化財を取り巻く環境からの大気汚染、酸性雨などの影響について汚染度の測定、影響評価法の研究を行っている。

物理研究室

物理研究室では文化財の材質ならびに保存環境に関する問題点を物理的手法を用いて調査・研究している。文化財の材質、構造の調査方法としてγ線・X線・赤外線などを用いている。また展示、収蔵、梱包・輸送などの文化財を保存する環境の評価と劣化防止の方法について研究を行っている。

生物研究室

生物研究室では文化財の保存に関する問題点を生物学的に調査・研究している。文化財の生物による劣化、すなわち微生物や昆虫などによる被害の実態を調査して、これらの加害生物がおよぼす劣化の原因を機構を明らかにし、加害生物の防除法の研究と開発を行っている。

(2) 各 論

1. 文化財における環境汚染の影響と保存修復法の開発（5年計画の第5年次修復技術部と共同）

(1) 気象および酸性雨などの観測と評価法の研究

鎌倉市内4地区および東大寺において観測と調査を引き続き行った。測定項目は温湿度、日照、風向、風速、雨量、雨水、ミストおよび大気中の酸性汚染物質などで、影響評価には大理石とブロンズテストピースを用いている。〈早川・二宮〉

2. 文化財施設の保存（収蔵展示）環境の研究（5年計画の第2年次）

(1) 収蔵庫内の空気環境の評価法の確立

本年度はこれまでの研究成果の見直し、測定対象物質の選定とその測定法の検討、汚染物質濃度とその文化財材質への影響に関する基礎研究を行った。また、諸法令で室内汚染物質をどのように、どこまで規制しているか検討した。特に酸性物質について行った。

検討の結果、収蔵庫の空気汚染物質の基準濃度、測定法について定められた法令はなく、新たに検討が必要であることがわかった。文化財材質への影響がある程度明らかにされている酢酸・ギ酸およびホルムアルデヒドを対象として庫内濃度を実測したところ、変色試験紙の色調が黄色になる場所で酢酸濃度は数10ppb程度であった。ホルムアルデヒドについては建築直後には数100ppb、5年後でも50～80ppbの高濃度で存在していた。展示室は閉館後に濃度がすばやく減少するが、収蔵庫は濃度レベルが変わらないことなど、館内のホルムアルデヒドの挙動についての重要な知見が得られた。得られた研究成果は「保存科学」第36号に掲載した。〈佐野・三浦〉

(2) 展示収蔵方法の安全性評価

今年度も引き続き、特に地震による被害を最小限とするために、免震装置に関する情報を集めるとともに、展示具などの強度試験を行った。絵画用吊り金具（S環）については、引っ張り強度は内径の曲率の小さな形態が強度の点からは優れていること、引っかかりが浅いとはずれやすく、太さは直径6mm程度の金属で市販の金具でも十分な引っ張り強度（120kgf）があることがわかった。テグスの結びについては、かた結びの方が引っ張り強度が高くなるが簡単に切れ易いことがわかった。ワイヤーについては接続部分の強度が弱く、使用には注意が必要ことがわかった。その他、転倒防止用ワックス、粘着マットなどについても試験し、使用上の注意点を検討した。

吊り金具の試験結果は「文化財保存修復学会誌」第41号に掲載した。

〈三浦〉

(3) 消火剤の文化財材質に対する影響の検討

新ガス系消火設備の個別評価が行われて、新ガス系消火設備を採用する収蔵施設が増加しつつある。文化財材質に対する各種消火剤の非火災時、火災時の影響について検討した。また、平成5年度以降に文化財収蔵施設で選定された消火設備の選定の動向について、資料をまとめた。得られた研究成果は「保存科学」第36号に掲載した。〈佐野・三浦〉

(4) 収蔵展示環境に関する研究会を行った。〈佐野・三浦〉

第1回 平成8年10月23日 テーマ「文化財収蔵施設の空気環境」

第2回 平成9年2月20日 テーマ「新ガス系消火設備の開発・利用動向とその課題」

3. 古代東アジアにおける青銅製品の変遷に関する研究（5年計画の第2年次）

青銅器資料の化学組成および鉛同位体比から青銅器の産地や製法に関する研究を進めている。今年度は弥生時代の資料を重点的に集めるために、東京国立博物館所蔵の弥生時代資料、各県教育委員会などから提供された弥生時代資料を中心に約100点の鉛同位体比を測定した。これらのデータを従来から蓄積している値と比較検討することを試みている。

古代中国出土の資料として、殷墟時代、二里头遺跡などの資料約70点の鉛同位体比分析をした。〈平尾・早川〉

4. 新しい文化財防虫防霉法の研究（7年計画の第3年次）

(1) 新しい虫害防除法に関する基礎研究

文化財の燻蒸ガスとして長らく使用されてきた臭化メチルが、ハロンの使用撤廃のため数年内に使用できなくなる。そこで、代替策の導入が緊急の課題である。すでに欧米などでは、代替策として二酸化炭素燻蒸法や、凍結処理法、低酸素濃度殺虫法などが検討され始めている。そのなかで文化財材質に対する影響を考慮すると、低酸素濃度殺虫法が最も好ましいと考えられる。そこで、この方法が実際に使えるかどうか、コクゾウや日本の主な文化財害虫を用いて実験を進めている。

1) 低酸素濃度殺虫処理装置

昨年度までは、プラスチックバッグと脱酸素剤による実験を行ってきたが、本年度はある程度の大きさをもつ文化財の処理を念頭に、低酸素濃度殺虫処理装置を設計・導入した。

設計にあたって、留意した点は以下の通りである。

1. 気密性に優れていること。
2. 正確に調温・調湿された窒素ガス（酸素濃度0.1%未満）を処理室に導入でき、処理室の温度・湿度条件を正確に維持できること。
3. 故障などの不慮の事態が起こっても、処理する文化財を安全に維

持できること。

2) 低酸素濃度殺虫法に関わる基礎実験

低酸素濃度処理は、材質への影響が少ないと期待されるが、過去には酸素濃度0.1-0.2%の環境に1カ月おくと、丹、密陀僧、岱緒に変色がおきることが報告されているので、種々の脱酸素剤の使用に伴って変色が起きるかどうかを試験した。鉛白、丹、密陀僧、弁柄、黄土、朱、群青、岱緒、白緑、および染料の藍について、顔染料単独、および和紙に膠で彩色したものの2つの場合に対して、6カ月間、25℃で脱酸素環境に維持し、影響試験を行った。その結果、鉄系の脱酸素剤であるエージレスZでは、目視で明らかな変退色は認められなかったが、二酸化炭素を発生するタイプのエージレスG、およびRPシステムの改良型（Kタイプ、開発途上試作品）では、一部の顔料に変色が認められた。このため、脱酸素剤の使用に際しては、種類に十分留意する必要があることがわかった。〈木川〉

(2) 燻蒸および防虫防黴法に関する調査

1) 既存の薬剤使用削減に向けて

保存担当学芸員研修において、全国の美術館、博物館、資料館の学芸員20名を対象に燻蒸および防虫防黴法に関するアンケート調査を実施した。今年度は比較的小規模の館が多かったためか、定期的な清掃と手作業で生物被害に対処しているところが多くみられた。すなわち、年1回定期的な収蔵庫燻蒸を行う館は20%にすぎず、数年に1回程度必要なときに燻蒸する傾向があった。また、収蔵庫燻蒸を行わない館も35%あった。今回は実地の作業で所蔵品によく触れる学芸員が多かったため、生物被害の予防法・モニター法を含めた具体的な被害対処法に関する研修の要望も強かった。これは従来の燻蒸薬剤の使用を減らす意味でも極めて重要なことであり、来年度以降、積極的に検討していきたい。〈木川〉

2) 殺虫法としての凍結法について

薬剤を使用しない殺虫法として、欧米等では一部の文化財に限って凍結処理する方法が試みられている。国内でも美術館の建設にあたっ

て、収蔵品の殺虫施設に冷凍室を検討したいという館があり、収蔵品に対する影響を明らかにする必要がある。凍結法は、一部の収蔵品、例えば、光沢のない紙からなる書籍や大部分の皮革製品、織物・布地等には適していると考えられる。しかし、金属と木などの複合材質からなる収蔵品は、冷凍・融解時の収縮率が材質によって異なるため、亀裂を生じる可能性がある。彩色されたものについても剥落の危険性があり、漆製品など相対湿度の急激な変化に弱い材質の場合も適さない。従って、限定された範囲にのみ使用するには差し支えないが、美術品全般の殺虫法にはなり得ないということを知らせていく必要がある。〈木川〉

5. 文化財の材質・構造・技法に関する研究

(1) 鉛同位体比を利用した銅製品の材料産地推定

文化庁、東京国立博物館、県や市町村の教育委員会・発掘事務所・埋蔵文化財センターなどが所蔵する、約100点の銅製品、発掘品などに関して鉛同位体比を測定した。トルコ出土の金属資料約50点に関して鉛同位体比を測定した。

なお、今年度は㈱フィニガンマット社製の新機器が導入されたのでその調整を行った。〈平尾・早川〉

(2) 蛍光X線分析法を利用した研究

文化庁、東京国立博物館、県や市町村の教育委員会・発掘事務所・埋蔵文化財センターなどが所蔵する約200点の銅製品、発掘品などに関して蛍光X線分析法による化学組成の測定を行った。〈平尾・早川〉

(3) X線回折法を利用した研究

文化庁および各県教育委員会から銅製品に発生している錆の結晶組成測定の依頼を受け、約100資料を測定した。〈平尾・早川〉

(4) ICP 発光分光/質量分析法を利用した研究

昨年度末、新機器が導入されたので、その調整を行った。いくつかの試料としてトルコ出土の銅製品の化学組成を測定した。〈平尾・早川〉

(5) GC/質量分析法を用いた研究

熱分解加熱により固体試料を前処理なしに導入できるように整備し、

絹や漆などの有機質文化財試料の材質同定に用いるための基礎研究を行っている。〈佐野〉

(6) 赤外線、エミシオグラフィおよびエックス線透視撮影による調査

下記の作品のX線透視撮影とエミシオグラフィによる調査を行った。この成果は静嘉堂文庫美術館主催の展覧会「琳派・造形と伝承展」(平成9年4月5日～5月25日)で特別展示される予定である。〈三浦〉

作品名	所蔵者(依頼者)
-----	----------

絵画	源氏物語関屋濡標屏風	静嘉堂文庫美術館
----	------------	----------

6. 文化財材質の劣化に関する研究

(1) GC/質量分析法を用いた研究

微量の絹試料を熱分解加熱により導入し絹のアミノ酸組成を求め、絹繊維の劣化判定を行うための基礎研究を行っている。このテーマのもと、日本学術振興会の助成を受けてメアリー・ベッカー氏(アメリカ、ポストドクトラルフェロー)を特別研究員(平成8年9月6日～平成9年9月5日予定)として迎えている。〈佐野〉

(2) 化学発光検出器を利用した研究

国文学研究資料館との共同研究で、歴史史料の劣化と化学発光強度の関係についての基礎研究を行っている。今年度は文化財試料の測定に適用する際の市販の機器の問題点について明らかにし、関係学会において報告した。また、史料測定用の機器の開発について検討し、平成8年度に国文学研究資料館に導入した。〈佐野〉

(3) 多孔質材料の凍結による劣化機構の研究

石造文化財などに見られる多孔質材料の凍結・融解による劣化機構と対策手法を検討するため、多孔質体の凍結・融解の際の熱移動・水分移動機構に関する研究会を3月12、13日に開催した。今後、一定の温度勾配、凍結速度条件のもとで多孔質材料を凍結し、劣化機構の解明に関する実験研究を進めていく予定である。〈石崎〉

7. 環境に関する調査研究

(1) 温度・湿度・水分

次の地点で、温度・湿度などの気象観測を継続して行っている。〈三浦〉

史跡等の名称	観測項目	観測開始時期
中尊寺金色堂	温湿度・変位・含水率	1986年3月
鎌倉市内	温湿度・雨量・日照・風向・風速	1992年12月

(長谷寺大仏、永福寺跡)

(2) 洞窟の保存環境に関する調査研究

フゴッペ洞窟や手宮洞窟内には、岩体に大きな亀裂が入っている部分が観察され、洞窟内に水を供給する要因の一つとなっている。また洞窟内の水としては岩体内の微細な間隙を流れてくる水もあり、水の供給される主要経路を把握することが重要であり、現在調査を進めている。岩体表面に黒色析出物が観察され、それはマンガンであることが確認されたが、現在その析出過程とその対策手法の検討を行っている。本研究は国際文化財保存修復協力センターと共同で行っている。〈石崎・三浦〉

(3) 美術館・博物館等館内環境調査について

- 1) 国宝・重要文化財などの指定品および東京国立博物館蔵資料の借用展示に関して館内環境調査を行い、報告書を作成提出した。

〈三浦・佐野〉

北海道	北海道開拓記念館	北海道立帯広美術館
岩手	遠野市立博物館	
栃木	ミュージアム氏家	
東京	昭和女子大学光葉博物館	
神奈川	神奈川県立歴史博物館	
石川	石川県七尾美術館	
富山	高岡市美術館	富山県立〔立山〕博物館
長野	下諏訪町立諏訪湖博物館・赤彦記念館	
愛知	岡崎市美術博物館	
大阪	大阪人権博物館	
和歌山	田辺市上秋津公民館	
鳥取	鮎渡辺美術館	
広島	広島城	三原リージョンプラザ

- 山口 山口県立萩美術館・浦上記念館
 香川 丸亀市猪熊弦一郎現代美術館 丸亀市立資料館
 佐賀 唐津市近代図書館 ④河村美術館
 鹿児島 ミュージアム知覧

現地調査は瀬戸田町平山郁夫美術館，広島県立美術館，下諏訪町立諏訪湖博物館・赤彦記念館，日本銀行金融研究所貨幣博物館，渋谷区立松涛美術館，高岡市美術館，昭和女子大学光葉博物館，横浜人形の家，神奈川県立歴史博物館，広島城，三原リージョンプラザ，一関市立博物館(仮)，瑞巖寺宝物館，ミュージアム知覧，江戸東京たてもの園，茅野市神長官守矢資料館，MOA美術館，多賀城市埋蔵文化財センター，村田町歴史みらい館，頼山陽史跡資料館，大阪人権博物館，平等院収蔵庫，東京都写真美術館，唐津市近代図書館，④河村美術館，下関市立考古博物館，東京工業大学百年記念館，北網圏北見文化センター，北海道立北方民族博物館，大阪城天守閣，廿日市市美術ギャラリーの31館。

また，全国151館の新設既設美術館・博物館等文化財展示収蔵施設に対して環境改善に関する相談を受け，助言を行った。

- 北海道 北海道開拓記念館 北海道立帯広美術館
 北網圏北見文化センター 北海道立北方民族博物館
 岩手 一関市教育委員会博物館建設対策室 遠野市立博物館
 宮城 村田町歴史みらい館 瑞巖寺宝物館
 宮城県立歴史博物館 多賀城市埋蔵文化財センター
 宮城県使節船ミュージアム 東北歴史博物館
 秋田 秋田県立近代美術館 秋田経済法科大学
 山形 酒田市市民美術館
 福島 白河集古苑
 茨城 茨城県立天心記念五浦美術館
 国土地理院地図と測量の科学館
 栃木 ミュージアム氏家 宇都宮文化の森美術館
 群馬 群馬県立近代美術館

保存科学部

- 富岡市博物館・福沢一郎記念美術館
- 埼玉 朝霞市博物館設立準備室 浦和市美術館
荒川総合博物館 鷲宮町立資料館開設準備室
- 千葉 成田山書道美術館 大原幽学記念館 千葉市美術館
伊能忠敬記念館 (仮)
- 東京 江戸東京たてももの園 日本刀装具美術館
宮内庁書陵部図書課 東京都写真美術館
渋谷区立松涛美術館 上野の森美術館
日本銀行金融研究所貨幣博物館 齊田茶文化振興財団
学習院女子部図書館 昭和女子大学光葉博物館
世田谷文学館 東京国立博物館平成館
東京都養育院事業部 松岡美術館 東京大学総合資料館
府中市美術館準備室 北区郷土資料館 弥生美術館
日本習字教育財団 東京工業大学百年記念館
- 神奈川 相模原市立博物館 神奈川県立歴史博物館
横浜人形の家 横浜市歴史博物館 茅ヶ崎市郷土美術館
- 新潟 新津市美術館 (仮)
- 富山 高岡市美術館 新湊市博物館 富山県立〔立山〕博物館
富山県文化課
- 石川 石川県七尾美術館 能都町真脇縄文館
- 福井 福井市教育委員会美術館開設準備室 武生市教育委員会
宝珠寺収蔵庫
- 長野 長野県立歴史館 サンリツ服部美術館 豊科近代美術館
下諏訪町立諏訪湖博物館・赤彦記念館 碓氷美術館
茅野市神長官守矢資料館
- 岐阜 飛騨高山美術館
- 静岡 三嶋大社宝物館 MOA 美術館 静岡市教育委員会
豊田町香りの博物館 (仮)
- 愛知 岡崎市美術博物館 田原町博物館
- 三重 松浦武四郎記念館 猿田彦神社 鈴鹿市考古博物館(仮)

- 亀山市立歴史博物館 津市図書館
 朝日町歴史博物館 (仮)
- 滋賀 滋賀大学経済学部附属史料館 滋賀県立琵琶湖博物館
 近江商人博物館 MIHO 美術館 佐川美術館
 多賀町博物館 滋賀県立琵琶湖文化館
- 京都 宇治市源氏物語ミュージアム (財)細見美術館
 舞鶴市郷土資料館 城陽市歴史民俗資料館
 平等院収蔵庫 京都府立丹後郷土資料館
 園部町教育委員会
- 大阪 泉南市教育委員会 大阪城天守閣 大阪人権博物館
 大阪青山短期大学歴史文学博物館 歴史館いずみさの
 大阪府土木部砂防課
- 兵庫 小野市立好古館 龍野市歴史文化資料館
- 奈良 奈良国立博物館 奈良県立美術館
- 和歌山 田辺市立美術館 有田市郷土博物館
 田辺市上秋津公民館
- 鳥取 鳥取市立博物館準備室 (財)渡辺美術館
- 島根 和鋼博物館 島根県立美術館建設準備室
- 岡山 倉敷市美術館 高梁市歴史館
- 広島 宮島町立宮島歴史民俗資料館 瀬戸田町平山郁夫美術館
 広島県立美術館 頼山陽史跡資料館 大田庄歴史館
 三原リージョンプラザ 広島城 広島市立大学芸術学部
 廿日市市美術ギャラリー開設準備室
- 山口 下関市考古博物館 吉川報効会史料館
 山口県立萩美術館・浦上記念館 新南陽市郷土資料館
- 香川 香川県立文書館 丸亀市猪熊弦一郎現代美術館
 丸亀市立資料館
- 愛媛 愛媛県立歴史文化館 愛媛県立美術館
- 高知 高知県立美術館
- 福岡 春日市ふれあい文化センター弥生の里 (財)石橋美術館

	太宰府市文化ふれあい館 福岡市美術館
	筑紫野市歴史アーカイブセンター
佐賀	唐津市立近代図書館 勘河村美術館
	有田ポーセリングパーク 佐賀県立名護屋城博物館
	伊万里有田焼伝統産業館
熊本	熊本県立装飾古墳館
大分	耶馬溪風物館 大分市教育委員会美術館開設準備室
	大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館
宮崎	宮崎県立美術館
鹿児島	ミュージアム知覧
沖縄	浦添市立美術館

2) 保存環境調査結果の集計と検討

平成7年度の調査報告書提出館29館の調査結果の集計を行い、「保存科学」第36号に発表した。〈佐野・三浦〉

8. 文化財の調査法に関する研究

(1) 遺跡探査に関する調査研究（修復技術部と共同）

平成4年度から科学研究費(重点領域)により「化学的・光学的情報を用いた遺跡探査の手法に関する研究」のテーマの下に研究を行っている。今年度は岩手県盛岡市の実験地を利用して、地中温度を用いた温度探査を行った。地中1mの深さに遺跡があった場合には地表面温度への影響はほとんど現れないが、地中0.5mの深さで測定すると季節的な温度変動の差として遺跡を探査できる可能性がある。〈三浦〉

9. 生物劣化に関する調査・研究

(1) 糸状菌(カビ)の調査

1) 青銅器に発生した糸状菌の調査

極楽寺所蔵の重要文化財の青銅器に白いカビの菌糸様のものが発生したとの報告を受け、調査した。培養した結果、青銅器自身からは好乾性の *Aspergillus* sp. が、また青銅容器の漆の台座からは好乾性の *Wallemia* sp. および *Penicillium* sp. が生育していることがわかった。処置法として、青銅器のカビは消毒用エタノールで処置すること、漆

台座のカビは燻蒸することを助言した。〈木川〉

2) 高松塚古墳の定期的微生物調査・保存処置

平成8年3月25日より5日間、高松塚古墳の定期点検が行われた。ここ数年の調査結果では、高松塚古墳石室壁画においては特に顕著な微生物被害はみられず、総じて安定した保存状態が保たれている。ただし石室入口プラスチックカバー上に結露が起こっており、白いカビ様のコロニーが散見された場合があるが、これが直接壁画に悪影響を及ぼす事態には至っていない。本年度は石室入口プラスチックカバー上のカビについては、エチルアルコール綿で除去・殺菌したのち、防黴剤TBZを配合したエチルアルコールを少量塗布し、防黴処置を施した。〈木川・尾立〉

3) 醍醐寺取蔵庫の糸状菌調査

平成8年11月に醍醐寺の取蔵庫においてカビ様のものが発生しているとの連絡を受け、現地調査が行った。障壁画取蔵庫の収納ケース、および古文書庫の唐櫃表面、屏風画面に発生しているカビ様のものを培養した。その結果、古文書庫の唐櫃表面、屏風画面から好乾性の *Aspergillus sp. restrictus gr.* のカビが有為に検出された。取蔵庫内は、通風が悪く湿度も高い状態にあってカビが発生しやすい状況にあるため、環境改善が望まれる。醍醐寺と共同で有効な改善策を検討する必要がある。〈木川〉

10. 受託研究

(1) 装こう材料の生化学的研究（修復技術部と共同）

紙本の修復において、効果的に糊ぬきを行うために酵素（アルファアミラーゼ）を使用する試みが進められており、その有効性が確認されている。昨年度は、酵素使用後の絵絹に残留している酵素活性量を、ブルーでんぷんのプレートを用いて簡便に見積る方法を確立するとともに、工房において、糊ぬきに最低限必要な酵素量を定めるテストをした。本年度は、絵絹に残留する酵素活性量とカビの生えやすさとの間に相関があるかどうかを調べた。その結果、明らかに残留酵素活性量が多いと処理後の絵絹にカビが生えやすくなるということがわかった。しかしながら、

修復技術部

この試験は28℃、96%RH および84%RH という、かなりの高温高湿条件で行ったものであり、良好な保存条件であればカビも発生しにくいため、実用化上致命的な問題にはならないと考えられる。〈木川・川野邊〉

5. 修復技術部

(1) 概要

文化財の修復に関する調査研究、科学的修復方法の開発研究、応用およびその公表を主務としている。研究の対象は美術工芸品、建造物、考古資料、民俗資料等の有形文化財をはじめとした、文化財すべてを含んでいる。組織としては、文化財を構成する主材料に合わせて三室からなっている。

第一修復技術研究室

工芸品、建造物など木材および漆を主な材質とする文化財の修復に関する科学的、技術的研究を行い、その成果の公表を行っている。

第二修復技術研究室

紙と布を素材とする文化財の修復技術を研究している。

絵画・文書類の素材として、和紙、絹布、麻布、木綿布とそれらの繊維、顔料、染料、接着剤（膠、糊など）を対象とする。繊維の強度変化・変色などについての基礎的研究と、紙・布としての劣化要因探求により、修復技術開発に資する。現代の修復技術に不可欠な合成樹脂その他の新素材も、文化財修復の観点から検討する。平成元年度から始まった「在外日本美術品の修復協力」には、修復技術専門家の立場から修復全般に関わると同時に、平成4年度からは、「紙の保存修復」国際研修をも担当している。

第三修復技術研究室

建造物、考古資料、美術工芸品など金属、石材、その他無機材質を主材料とする文化財の修復に関する科学的、技術的研究とその成果の公表を

行っている。

環境汚染物質によって無機材質で造られた文化財の劣化が進行して大きな社会問題になっているが、どんな修復保存処置が施せるかについて研究を行っている。また「近代の文化遺産」の重要文化財指定が本格化するに伴って従来の修復方法では対応出来ない文化財が多くなっているため「近代の文化遺産」の修復研究機能の充実をはかっている。

(2) 各 論

1. 文化財における環境汚染の影響と修復技術の開発研究（保存科学部・センターと共同）

鎌倉市内四カ所の観測ステーションを高徳院一カ所に集約し、自動測定装置に本年1月から切り替えた。風向・風速は従来どうり観測を継続している。

東大寺国宝金銅八角灯籠は、本年度から3カ年計画で修理が開始された。解体に際し立ち会うと共に錆の分析、金属組成分析、X線撮影などによる調査を行った。

島根県重要文化財日御碕神社においても自動測定装置を設置して観測を継続している。また日御碕灯台および神社周辺3カ所の風向・風速観測のために機器を設置して観測を行っている。その結果、海から入ってきた西風が谷筋に沿って流れ、神社に吹き付けていることが分かった。この風は、冬季に多い。

昨年度から韓国国立文化財研究所と共同研究が開始されているが、酸性雨試験器による大理石の耐候性試験を行った。また韓国の大理石の表面に付着した黒色の汚れについて分析し、石膏であることが分かった。〈青木、川野邊、三浦、朽津〉

2. 文化財の伝統的修復材料の研究

(1) 修復材料及び修復技法の開発研究（第3期 3年計画の第1年次）

a. 金属と漆の研究

焼付漆施工現場3カ所の調査を行った。建築金具を製作する工房で

修復技術部

は、焼付する金属は鉄であり、甲冑修理の場合は鉄と銅であった。熱源は七輪に炭火をしよう。焼付温度は240度以上、焼付時間20分以下、膜厚10 μ m前後であった。この結果を踏まえ新しく手板を製作して、付着試験、暴露試験、塩水噴霧試験などを行っている。〈中里〉

3. 文化財の劣化に関する研究

(1) 巖島神社・重要文化財高舞台の劣化調査

高舞台西面に発生した亀裂劣化の原因を知るために、試料を採取し、断面の顕微鏡観察、漆成分の半定量、塗膜構造などの調査を実施した。

4. 文化財修復技術

(1) 金属文化財の修復に関する研究

重要文化財和歌山市大谷古墳出土金属製品等の修復処置を実施した。昨年度に引き続き馬面、馬甲などの馬具を中心として修復を行った。象嵌遺物のプラズマ処理に関して、改良技術によって高崎市山名原口古墳出土円頭柄頭などの処理を行った。〈青木・犬竹〉

(2) 石造文化財の修復に関する研究

レーザーによる石材表面の汚染物質のクリーニング実験を行っている。クリーニング対象である汚染物質の分光特性などの調査と現場作業での取り扱い方法など検討した結果、アレキサンドライトレーザーが適当であると判断し、そのレーザーを光ファイバーを通して照射出来るような装置を製作することにした。〈青木〉

(3) 遺跡・遺構の保存修復に関する研究

a) 史跡千葉市加曾利貝塚には、貝層断面や住居跡が保存施設内で保存展示されているが、遺構表面が壕などで汚れているためにクリーニングが必要になっている。高圧水洗などでは遺構を破壊する危険があるため、レーザーによるクリーニング実験を試みた。貝層断面を破壊することなく隅之までクリーニングすることができ、かなり有効な方法であることが判った。〈青木〉

b) 熱赤外域における遺跡探査の効果と地表および地中温度の分布の相関を検討するために、地温測定システムを作成して実験を行った。温度センサーの種類と制御システムを遺跡探査のために最適化するめど

がついた。〈川野邊〉

5. 災害への対応処置に関する研究

(1) 緊急対応マニュアル作成

内外において近年発刊された災害予防と緊急時の対策に関する文献資料を収集した。英文の緊急対応マニュアルの一部を翻訳し、国内マニュアルとの比較を行った。また阪神・淡路大震災における救援活動実績をもとに、文化財関係機関で整備が急がれている、災害時の緊急対応マニュアルの試作を行った。それらの一部は、美術工芸品等の防災に関する調査研究報告書（平成8・9年度科学研究費）および文化財の防災に関する調査協力者会議による提案書作成のための基礎資料として使われている。〈増田・尾立〉

(2) 文化財転倒防止用粘着材の調査

転倒防止用の粘着材2種類の分析を行った。

粘着マットは発砲ポリウレタンを架橋したものと推測された。溶剤によって低分子物質が溶出する危険があり、土器のように多孔質の文化財に直接用いた場合、除去できない粘着物質が付着し取れなくなる可能性がある。アンカーワックスは、ほぼ純粋なパラフィンワックスであると推測される。粘着マットと同様に低分子量成分の文化財への浸透の可能性がある。〈川野邊〉

6. 文化財修復情報データベース作成

(1) 文化財修復情報

美術工芸品と考古遺物を中心に修理報告書のデータをもとに、文書データと画像データの入力を行っている。報告書の記載事項ならびにその後の調査研究結果を一覧できるデータベースを作成中である。現在入力件数は約780件である。

昭和39年から43年まで行われた中尊寺金色堂の漆芸部材の修復を機に、調査と写真記録を行ったが、その写真記録のデジタルデータベース化のために、処置前2093コマ(CD21枚)、処置後1649コマ(CD17枚)のCDROM作成を終了した。

修復技術部

(2) 合成樹脂使用例情報データベース作成

過去の文化財修復に用いられた合成樹脂の使用例とその後の経過を追跡し、データベース化を開始している。現在木造建造物を中心として、修理報告書を元に約1500件の報告書のデータを入力し、同時に現所在地地図、現状の全体写真、合成樹脂使用箇所の現状写真、劣化試料の分析データなどを取集中である。

(3) エックス線写真データベース作成

文化財の損傷状態や構造を知るために行われる、修復調査において撮影された X 線透過写真が、当部には、約2000枚ほど保管されている。

重要文化財など、あまり撮影の機会に恵まれない貴重な X 線写真を活用するため、現在それらの撮影条件情報をも含めた、X 線写真のデジタルデータベースを作成中である。考古学関係を中心にして、約500枚ほどの X 線写真デジタルデータベースが撮影条件と遺物の情報とともに入力済みである。

7. 調査指導

修復技術部では、修復現場からの要請によって、現場であるいは委員会等の場で技術的助言を行う事も重要な業務である。

平成8年度における、出張を伴う調査指導等は以下の通りである。

- (1) 正倉院伎楽面修理指導
- (2) 重要文化財中尊寺金色堂破損調査
- (3) 重要文化財法界寺阿弥陀堂内壁面の破損調査

重要文化財法界寺の内陣外壁の壁画の修復に当たって使用する修復材料と技法に関する調査・指導およびそれに伴う実験を行った。〈川野邊〉

- (4) 重要文化財水戸八幡宮本殿彩色調査

本殿外部に残存している風触部分から赤外および可視光、斜光などの画像により建築彩色と壁画の復元のためのデータ収集について調査・指導を行った。〈川野邊〉

- (5) 重要文化財高野山不動堂木材の強化処理指導
- (6) 重要文化財清巖寺鉄塔婆の修理指導
- (7) 東京都指定史跡出山横穴古墳保存施設建設指導

- (8) 館山市大寺山洞窟遺跡出土遺物の保存処置指導
- (9) 史跡群馬県矢瀬遺跡保存整備指導
- (10) 重要文化財東大寺金銅八角灯笼修理指導
- (11) 重要文化財高崎市八幡観音塚古墳出土品の劣化調査指導
- (12) 市原市草刈り遺跡出土金属製品の調査
- (13) 岐阜県古川市杉崎廃寺保存整備指導
- (14) 静岡県清水市巴川遺跡出土丸木舟保存処理指導
- (15) 史跡来住廃寺跡保存整備指導
- (16) 陶磁器製作用型の劣化調査(佐賀県陶磁総合調査)
- (17) 第五福竜丸船体の保存修復に関する指導

第五福竜丸船体の修復工事にあたって保存条件、修復材料に関する指導を行った。〈川野邊〉

8. 受託研究

- (1) 太宰府市観世音寺1丁目地内出土の漆手箱復原に関する研究

研究対象は、鏡などの内容物を伴っている点で貴重な平安時代の漆化粧箱である。漆断片の位置調査と発掘を並行して行い、漆箱の原形を推定して、木胎の復元を行い、その表面に発掘した漆断片を移植することを目的として計画を進めていた。

本年度途中で、木胎の構造および外形を推定するに十分な情報が得られ、また調査と発掘に予想以上の期日が要することが判明したので、計画を以下のように変更することで、太宰府市と合意して進めることとした。

- ① 調査・発掘は箱底部を残す段階で停止し、展示・保存に耐えるよう強化処理と外装を施す。
- ② 発掘した漆断片は、資料として別途保存する。
- ③ 調査によって得たデータをもとに、木胎漆塗りの漆化粧箱を復元する。
- ④ 漆塗り復元のために、漆断片の断面調査等を行い、地塗り、塗り回数、塗り厚さなどの情報を得る。

- (2) 藩札の保存および料紙に関する研究

情報資料部

日本銀行貨幣博物館所蔵の藩札の保存については、古文書の保存法に準じて、中性紙とボードによる包装、収納を助言した。料紙については、縦横厚さ寸法と重さの測定を行い、繊維調査によって繊維種類の同定と添料の推定を行い、藩札における製紙技術の特殊性を明らかにしようとしている。本研究は、高知県紙産業技術センター大川昭典氏と東京芸術大学文化財保存学稲葉政満氏と共同で行っている。

(3) 装潢材料の生化学的研究

「糊の除去法の研究」

保存科学部との共同研究

(4) 根塚遺跡出土鉄製品の修復研究

長野県木島平村から出土した弥生時代の鉄剣で、朝鮮半島でよく見られる渦巻状の装飾柄頭をもっている。日本では出土例が少なく、直接に朝鮮半島の影響を受けた遺物として、その交流を知る上で貴重な物である。X線撮影などの調査を行うとともに、考古学的な問題を検討しながら修復を行った。

(5) 猪俣北古墳群1号墳出土鉄製品の修復研究

埼玉県美里町猪俣北1号墳から出土した桂甲小札は、ほぼ一領分あり埼玉県の出土例としては初めてである。考古学的な検討を加えながら修復を行った。

6. 情報資料部

(1) 概要

情報資料部は、従来美術部資料室の行ってきた美術に関する研究資料の作成、収集、整理、保管、閲覧等の業務を充実発展させ、さらに当研究所各部所掌の研究資料に関する情報の統合化をはかることを目的とする。

当部所管の諸資料は美術部創設以来内外の研究者の利用に供され、文化財に関する研究資料センターの役割を果たしている。この機能をより充実させ、学術情報の増加と多様化に対応した所蔵研究資料の効果的利用を図るため、

データの共有化を中心とする美術情報処理システムの研究、画像処理技術の応用、文献データベースの開発などを行っている。

当部研究員は、上記業務を行うとともに日本・東洋美術史各分野で研究活動を行っている。調査研究活動の成果は「美術研究」ほか学会誌、美術部と共催の公開学術講座等で発表されている。

当部は、文献資料研究室と写真資料研究室の二室をもって構成される。

文献資料研究室

美術史関係を中心とした図書・雑誌、調査研究活動によって収集された各種研究資料の整理・保管・閲覧を行っている。また、日本・東洋古美術関係の文献目録の作成とともに文献データベースの開発を行っている。各年分の文献目録は『日本美術年鑑』に掲載し、一定期間ごとに総合・増補し『日本・東洋古美術文献目録』として刊行している。現在、昭和41年～60年分について編纂作業をすすめている。

写真資料研究室

研究用写真資料の作成、収集、整理、保管、閲覧を行うとともに、各研究者の調査研究活動に協力して研究資料を撮影し、資料の充実につとめている。また、これに併行して、美術史研究へのデジタル画像処理技術の応用及び、美術研究所創立以来蓄積してきた写真原板のデータベース化に関する研究を行っている。

(2) 各 論

1. 美術情報処理システムの研究—データの共有化を中心として—(10年計画の第8年次)

(1) 共有データの生産・蓄積

1) 文献・図書データ

定期刊行物所載文献・所蔵図書データの inputs を継続。あわせて芸能部図書データ(約10,000件)を inputs。

情報資料部

2) 美術史研究資料

『日本美術年鑑』のデータ化を継続。5年間分(昭和60～平成元年度版)を入力。黒田清輝関係資料として『黒田清輝日記』(全5巻)、著作集『絵画の将来』(1巻)、年譜、カタログ、白馬会関係新聞記事を全文入力した。

3) 画像データ

デジタル画像(約2,000件)を入力。写真資料関連文字データの入力を継続した。

(2) パイロットシステムの構築

1) 定期刊行物所蔵文献データベース及び所蔵図書データベース検索システムの運用・評価

日常的に順調に稼働中。

2) ローカルエリアネットワークシステムの整備・運用・評価

マッキントッシュ端末で所内イントラネット・システムの試作を行い、検討の後、専用サーバ(WWW2)を立ちあげて運用中。

3) 画像データベース構築のための基礎実験

プロフォト CD マスターに入力した画像について、画質・容量等の諸条件を検討した。

4) 検索辞書システムの研究

基礎的な諸条件について調査・検討した。

(3) 「共有化」環境の検討

1) 「共有化」環境をめぐる諸問題についての研究会の開催

関連研究分野の研究者6名を招聘し、協議を行った。

2) 文化庁を中心とする文化財情報ネットワークシステムへの対応

平成7年度の補正予算によって所内 LAN システムと学術情報センターを介したインターネット環境が整備されたが、これらのネットワーク環境の有効な活用と機器運用の諸条件を検討した。開設したホームページ(URL=<http://www.tobunken.go.jp>)は、バージョンアップを計画中。

3) オフラインによるデータ共有システムの拡充

「共有化」環境をめぐる研究会の開催のほか、メディアの多様化にともなうデータ交換の諸条件を検討した。

4) オンラインデータ通信の有効利用

学術情報センター・国文学研究資料館の雑誌記事索引データベースを利用し、将来のデータベース公開に向けた諸条件を検討した。

2. 美術史研究における語彙の研究（5年計画の第3年次）

(1) 冊子目録の見出し語と目録分類の枠組み

『東洋美術文献目録（明治～昭和11年）』『日本東洋古美術文献目録（昭和11年～昭和40年）』のデータを対象とし、冊子目録の分類構造と分類された文献群の見出し語の関係を明らかにすることによって、語彙のなかでもある位置づけをになうものの特性を検討する。さらに本データを現行のデータベースに取り込むためのひとつの手順として検討する。

冊子目録からの入力データは、文献書誌のうち著者・論文名・収録雑誌名・号数のみを収録している。このデータファイルを現行の文献データベースへ再構築するためには更にデータを付加してゆかなければならない（例：刊行年月日、ページ、キーワード等）。この文献目録の分類原則はジャンルと地域（国）で、文献数のまとまりに応じてさまざまな上位見出し語と下位見出し語が立てられている（文献数の多い領域には見出し語が多くなる）。

1) 文献分類と見出し語

現目録の見出し語を目録分類構造にそって、それぞれの階層化状況を明らかにするためのテーブルを作成した（例：絵画・日本・仏画・如来・阿弥陀）。

2) 文献分類の枠組み

明治から昭和40年までの文献を収録した2冊の分類構造に基本的な相違はない。ただし昭和11年～40年版には文献数の増加による分類の細分化が顕著である。

3) 見出し語の下位にある語彙

目録の最下位見出し語にまとめられる文献には、実際にはその下位にあるべき語彙は明示されていないが、これによってひとつの分類相

における見出し語階層テーブルの最下位のレベルが想定できる（例：
絵画・日本・作家→大雅）。

便宜的に付されたとはいえ、これらの見出し語はある時期における
分類下の研究文献群をくくる語彙であり、その属性の検討は分類相の
検討とともに研究史を顧みる上で重要であろう。

1994年刊行の文献を対象にして、分類・ファイル化して、同様のテー
ブルを作成した（ジャンル、地域分類されたファイルは WWW で公開
した）。これらをもとに文献資料一覧ファイルの公開運用評価を行っ
た。

(2) 検索対象資料としての画像データ

画像検索のベースとなる画像記述データの問題点を検討することを課
題として（当研究所所蔵の黒田清輝関係資料を対象とする）画像を記述
したカタログ解説をデータ化し、次年度の課題に備えた。

3. デジタル画像データの蓄積と活用に関する基礎的研究（5年計画の第3
年次）

(1) アナログ画像データ（デジタル画像データ）

昨年度に引き続き、情報資料部所蔵4×5カラーポジフィルム1190
カットを入力し、プロフォトCDマスターを作成した。また、科学研究費
データベース刊行費による「有形文化財データベース」（代表者：東京国
立博物館・高見沢明雄）により、所蔵エックス線フィルム（四切り）約
800カットを入力した。

(2) デジタル画像の記憶媒体

入力済みの画像データを利用して、画像処理アプリケーションの活用
実験をおこなった。また、美術部第2研究室所蔵の黒田清輝作品を撮影
した4×5カラーポジフィルムにより、昨年度作成したプロフォトCD
の一部を、東京国立文化財研究所ホームページ中に構築が予定されてい
る、黒田の仮想美術館を入り口とする小規模画像データベースの実験材
料として活用した。

(3) ハード、ソフト・ウェア

インターネットの普及に伴い新しく期待される、研究情報の蓄積と共

有化のあり方の当研究所における一つのモデルとして、黒田清輝関係資料の総合的なデータベース化が構想できる。他フィールド情報とのリンクによる画像データの提供・公開のひとつの方法として有効とみなされる。

4. 請来仏画研究

中世以来、日本に将来された宋元及び高麗の仏画について、それらを区別する必要から、高麗仏画の領分を華嚴思想との密接な関係性から再検討するとともに、これまでの研究の枠組みのなかでは解決できない、宋元か高麗か、あるいは日本の中世かなど、国籍のゆらいでいる作品群がはらむ問題点について、考察をくわえ、その研究成果を発表した(「華嚴思想と高麗仏画の領分」『高麗の仏画』韓国・時空社)。<井手>

5. 古代仏教彫刻史研究

文部省派遣在外研究員として、欧州各地の美術館所蔵の関連作品を広く調査し、また、中国江蘇省、山東省、河北省、山西省、四川省の主に晩唐から北宋時代の作例について調査した。国内では、福岡観世音寺兜跋毘沙門天像、鹿児島隼人塚四天王像、山口防府国分寺四天王像等を調査し、9世紀日本の対外意識と造像の関係について見通しをつけた。その中間報告を、美術部・情報資料部研究会にておこなった<長岡>。

6. 中世絵画史研究

中世肖像画の研究：本年は神像、役行者像、新羅明神像など、肖像画という研究領域の周辺にありながら、肖像画の「かたち」のスキーマや、「かたち」を媒介とした主題の変容を考える上で重要な役割を果たした作品の調査を行った。これら作品群に焦点をあてた発端は中世期に大量に生産された「藤原鎌足像」の図様の源とその図様変遷の解明にあるが、肖像画の周辺(人の像と神の像の曖昧領域)における主題の揺らぎは予想以上に複雑である。さらに足利義兼像をはじめとする足利氏像の調査も進めた。

文化財研究情報の研究：「文化財情報システム」プログラムが進捗するなかで、「美術」、「文化財」という枠組みとその情報化の問題を考えることは、データベースやノリッジベースの構造が多かれ少なかれ現在の知の枠組みを反映せざるをえないという現実をふりかえれば、意味なしとは言え

ない。そのためには「文化財」や「美術作品」の誕生を回顧する手続きが必要となるが、近年こうした領域に光が当てられていることは周知であり、参照すべき研究が多い。本年はこうした問題とは別に、情報化のさしあたつてのキイとなる「モノ」がつくられ、こわれ、なおされ、わすれられ、再発見され、解釈され、ある価値を与えられる歴史社会的なありようと、その情報化の問題を問い直し、中間報告を「第15回国際美術史研究会シンポジウム」で発表した〈米倉〉。

7. 中国における石窟美術の研究

中国石窟にみられる阿弥陀浄土変相の図像学的研究を継続した。数年来、初唐・盛唐期の敦煌における阿弥陀浄土変相の調査研究を続けてきている。そのフィールドワークのデータをもとに、敦煌莫高窟第431窟における来迎引接式九品往生図の壁画の考察を行った。その研究成果の一部は報告書への論文掲載という形で公表した。

石窟寺院の窟内構成に関する研究を開始した。中国の石窟では三仏造像という構成方法が取られることがある。これらはちょうど法隆寺金堂壁画の四大壁や興福寺五重塔の塔本四仏などを論ずる際に取り上げられる「四方浄土」あるいは「四方四仏」という概念に類似している。これらの構成方法がどのようにつくられてきたか、また中国から日本へどのように伝わってきたかについて考察をすすめた。そして河南省の石窟寺院において三仏造像の調査を行った。さらにこの研究の一部は公開学術講座における口頭発表の形で公表した。

福建省泉州地区における仏教造像の調査を行った。老君岩造像や草庵摩尼教摩崖造像など、仏教以外の宗教造像も調査した。また泉州開元寺における斗拱飾りの意匠について考察を行った。その研究成果の一部は報告書への論文掲載という形で公表することになっている。〈勝木〉

7. 国際文化財保存修復協力センター

(1) 概 要

文化財は人類共通の遺産であり、国家、民族を越えて、その保存・修復に当たらなければならない、そのためには国際協力が不可欠である。国際文化財保存修復協力センターは、世界の文化財の保存・修復に関する国際的な研究交流、保存修復事業への協力、専門家の養成、情報の収集と活用等を実施し、文化財保護における国際的な責務を果たすことを目的として、平成7年4月に従来の国際文化財保存修復協力室を拡充し発足した。現在、センターでは世界各国、各地域の文化財とその保存に関する資料の収集、整理、データベースの作成を行っており、また、国際共同研究、国際会議・セミナーの企画、実行や諸外国の専門家の研修に関する仕事を行っている。さらに、基礎研究として、屋外の石造および木造文化財の劣化と保存処置に関する研究等を行っている。

企画室

国際協力事業の企画、運営、諸外国、関係機関との連絡、調整等の事務を行っている。

環境解析研究指導室

世界の文化財の保存、修復に関する調査研究を行い、また、国際協力事業の技術的内容についての調査、指導を行っている。

(2) 各 論

1. 世界、特にアジア諸国における文化財保存に関する情報の収集(中長期：10年計画 第6年次)

(I) 文化財の劣化状態および保存対策についての調査

国際文化財保存修復協力センター

- 1) 世界、特にアジア地域における文化財保存修復国際協力事業における現状と問題点について研究会を行い、事例紹介と質疑応答、討議を行った。本研究会は今後定期的に開催する予定である。〈宮本・中島・西浦・松本・朽津・二神〉
 - 2) IIC 大会, ICOM-CC 大会, ICOMOS 総会等, 国内・外で開かれた国際的な会議, 講演会, 研究会等に参加し, 多くの情報を得た。〈西浦・松本・朽津・二神〉
 - (2) 組織, 機構, プロジェクト等についての調査
 - 1) トルコ共和国の中央修復研究所等の研究機関を訪れ, トルコにおける文化財の研究組織に関する情報収集を行った。〈朽津〉
 - 2) 東京国立文化財研究所を訪れた諸外国の文化財保存関係者から個別に各国の状況を聞き取り, 資料とした。〈西浦・松本・朽津・二神〉
 - 3) 海外で行われている国際的な研修事業における教育カリキュラムの調査を行った。〈松本〉
 - 4) 国内・外で開かれた国際的な会議, 講演会, 研究会等に参加し, 多くの情報を得た。〈西浦・松本・朽津・二神〉
 - 5) ユネスコ(世界遺産センター), イクロム等を訪れ, 事業内容と現状の問題点, 今後の協力関係等についての調査と協議を行った。〈松本〉
 - (3) 保存担当者リストの作成
 - 1) 世界, 特にアジア諸国の文化財保存関係機関, 組織の国別リストを作成すべく, 情報の収集に努め, データベース化を進めている。〈西浦・松本・二神〉
 - 2) 国内の文化財保存に関わる機関及び人材のリストを作成している。特に, 国際協力に関わっている人材についての詳細な調査を行っており, 利用価値の高いデータベースとすべく整理中である。〈西浦・松本・二神〉
 - 3) 国内の機関, 研究者の海外協力事業の内容およびその課題と問題点についての調査を行っている。これについては, 定期的に情報を公開する予定である。〈西浦・松本・二神〉
2. 屋外石(レンガ)造文化財の劣化と保存修復処置に関する研究(中長期:

10年計画 第6年次)

(1) 洞窟、磨崖仏等の劣化現象と保存対策に関する調査研究

- 1) 福島県の清戸迫横穴において、彩色壁画の表面を汚している黒色物質を分析した結果、それがカビなどではなくマンガン化合物であることが判明した。その形成原因を考えつつ、今後の再発を防止する方法を検討している。〈朽津〉
- 2) 北海道のフゴッペ洞窟において、岩体の水分特性や表面の析出物の鉱物組成等を調査しながら、劣化原因の特定とそれに対する保存対策に関する考察を進めている。〈朽津〉
- 3) 神奈川県、重文・元箱根石仏群の保存修復について、材料の選択や処理方法の検討等を継続して行っている。〈西浦〉

(2) 石材の劣化現象についての岩石学、鉱物学的調査研究

- 1) 韓国の敬天寺石塔において、石材表面の汚れと劣化状況を観察したところ、大理石の表面が石膏化する際に埃を吸着して汚れるというヨーロッパ石造文化財の表面で見られるのと全く同様な劣化が観察された。そこで、ヨーロッパ石造建築での実績を参照しつつ、保存対策を検討している。〈朽津〉
- 2) 建築材料として用いられている漆喰の表面の劣化状況を鉱物学的に観察した。その結果、大理石と同様のメカニズムで、方解石が石膏へと変質することに伴って劣化が引き起こされていることが判明した。この現象への対策について現在考察中である。〈朽津〉

(3) 石材の保存材料に関する調査研究

- 1) 石材の強化および撥水処理に用いられる代表的なシリコーン樹脂について、その物性を比較検討するための実験を行っている。凝灰岩、砂岩、安山岩試験片を用いた浸透性測定、石粒を用いた強化力評価実験、処理石材の水蒸気透過性試験を行っており、特に、ヨーロッパで広く用いられているエチルシリケート系強化剤である Wacker OH と日本で多く用いられているメチルトリエトキシシラン系撥水強化剤である SS-101 との比較を行っている。本年度は、これらシリコーン樹脂で処理した石材の透気性を、水蒸気の透過速度を測定することに

よって検討した。この結果、シリコン系の樹脂では、処理後も高い透気性を維持していることが確認された。〈西浦〉

2) パキスタン、ガンダーラの仏教寺院遺跡であるラニガト遺跡の保存修復についての調査を行った。その結果、残存建造物がその上部からの雨水の浸入により急激な劣化、崩壊が進行していることが明らかとなった。そこで、上部からの雨水の浸入を阻止する方法として、従来のセメント塗布による防水層の形成に替えて、粘土と石灰の混合物を厚く塗り付け、その上層部に撥水性のシリコン樹脂を含浸して防水層とする、新しい方法をテスト中である。〈西浦〉

(4) 屋外石造文化財の環境と劣化に関する研究

1) 大分県の石造文化財調査に顧問として参加し、調査マニュアルの作成を行い、調査方法および調査結果の解析方法についての指導を行った。〈西浦〉

2) タイ国東北部のクメール石造遺跡の劣化現象についての調査を行っており、特にパノム・ルン遺跡においては、無電源長期環境計測システムを設置し、環境データの測定を行っている。〈西浦・朽津〉

3) 埼玉県・吉見百穴において、洞窟の塩類風化のメカニズムとその速度を解明する目的で、蒸発量をはじめとする各種の環境計測を続けている。現在までに、塩類の析出は蒸発の激しい洞窟入り口付近のみに集中し、また、一年のうち、特に乾燥が激しくなる冬の時期に殆どが起きていることが明らかにされた。〈朽津〉

4) 千葉県の上総市貝塚において、環境計測を行いながら、その保存方法を検討している。〈朽津〉

3. その他

(1) 顔料分析など

1) 広島県厳島神社と岩手県正法寺惣門壁画において、鉛丹の変色したと考えられる部分を鉱物学的に分析し、鉛丹が白変したり黒変したりするメカニズムを明らかにした。この結果に基づき、正法寺惣門壁画の変色前の絵柄をコンピューター上で画像復元した。〈朽津〉

2) 島根県および鳥取県下の古墳のうち、赤色顔料が用いられているも

のについて、鉱物学的な分析を行った。その結果、従来はベンガラと朱の2種類に分けて記載が行われていたもののうち、ベンガラと呼ばれていたものは、更にいくつかのより細かい範疇に分類可能なことが明らかにされた。この事実から、今後古代における赤色顔料の使い分けに関する議論の発展が期待される。〈朽津〉

3) 熊本県の重要文化財・山田大王神社の解体修理に伴い、同神社本殿に用いられていた顔料を鉱物学的に分析した。その結果、現在丹土と呼ばれている顔料と類似の成分のものが用いられていることが判明し、分析結果が塗りなおしに反映されることになった。〈朽津〉

(2) 石造文化財、遺跡建造物の保存整備事業についての指導、助言

4) 美術館保管中に劣化が進行し、平成6年に保存修復処置を行った石灰岩製レリーフ（大阪市立美術館蔵コプト石彫、下関市立美術館蔵エジプトレリーフ）について、処置後2年余を経過して、若干の再劣化現象が観察されたので、再処置の指導を行った。〈西浦〉

5) 国内遺跡の保存、修復、整備に関する調査、指導として、下記の遺跡の整備について、現地調査と指導を行った。〈宮本〉

青森県 三内丸山遺跡

栃木県 下野薬師寺跡、吉田新宿古墳群

群馬県 赤高瀬観音山遺跡

福岡県 平塚川添遺跡

長崎県 原ノ辻遺跡

佐賀県 吉野ヶ里遺跡

8. 国際調査研究

(1) 敦煌文化財保存修復に関する調査研究（中長期：第2期3カ年計画の第1年次）（保存科学部・修復技術部・国際文化財保存修復協力センターの共同研究）

第2期研究は、修復材料班による壁画修復に関する調査研究を中心として

国際調査研究

行われることになり、第53窟をフィールドとして壁画修復のための研究が以下のような内容で行われることになった。

- ・写真測量による壁画の損傷記録と修復記録用図面の作成。
- ・赤外線などの光学的手法による壁画の調査
- ・壁画彩色顔料の分析調査
- ・修復用樹脂材料の物性調査
- ・壁画面の構造とその土壌調査
- ・日中壁画修復用語集の作成

本年度は、壁画の赤外線撮影、写真測量用の基準点の検討など、これら研究の予備的実験を行った。

研修事業については、敦煌研究院から2名の研究者を招聘し、現在、敦煌で使用している壁画修復用樹脂の物性測定実験および用語集編集の検討と一部の入力を行った。

- 1) 長いスパンでの敦煌莫高窟の保存環境について考察するために、地球規模での長期の環境変動について、種々のデータから解析したところ、中国中央部においては、AD1200以降は気温変動が他の地域に比べて小さく、遺跡保存の点で有利であったと考察された。
 - 2) 第194, 53, 258窟に設置した環境計測機器により、外気温度、外気湿度、日照強度、風速、洞窟内各部位の温度と湿度、岩体内温度と湿度等を測定している。本年度も継続して計測しており、回収したデータの解析を行った。
 - 3) 敦煌周辺の水の分析調査、特にイオウの起源を探る分析調査を行っている。
 - 4) 洞窟内外の粉塵量の調査を行った。特に開放窟における見学者の出入りに伴う変化について測定し、現在解析中である。未だ十分なデータは得られていないが、今後中国側でデータの集積がなされる予定である。
- (2) 病害研究班
- 1) 壁画の塩類風化の進行速度を見積もるために、洞窟内外での蒸発量の計測を行った。その結果、通常状態における壁画表面からの蒸発は計測困難なほど小さく、従って塩類風化は、通常的环境下では殆ど進まず、

大雨のような例外的な状況の下で一気に進行することが推定された。

- 2) 第194窟における大規模な壁画の崩落と塩類の析出が、いつどの様な状況で起きたかについて、文献等から調査したところ、1908年ベリオによって撮影された第194窟内部の状態と現在の状態とがほぼ同じであることが判った。このことから、現在の第194窟の劣化は、1908年以前の極めて例外的な大雨によるものではないかと考察された。

(3) 修復材料研究班

- 1) 第53窟の壁画の斜光写真撮影を終え、図化を行う予定である。
- 2) 洞窟内壁画の写真撮影を簡便かつ精巧に行うための撮影装置を開発し、試作した。現在最終的な改良を行っているところである。
- 3) 第258窟の煙燻壁画のクリーニングを行うに当たって、レーザーガンによるクリーニング方法について、試験片を使った実験を行った。実際に現場で応用できるかどうか、今後検討していく。
- 4) 壁画修復用擬土について、特にその透気性、透水性について、実験室での測定を行った。

(4) 国際研究集会

「敦煌莫高窟保存国際シンポジウム」を開催し、研究報告と討議を行って、莫高窟保存の課題と展望について考察した。

(5) 研修事業

敦煌研究院から2名の研究者を招へいし、壁画の修復材料、技法についての研修を行った。

(2) スミソニアンとの研究交流及び日本美術品修復協力

文部省科学研究費補助金を受けて、平成8年度より新テーマ「陶磁器文化の交流に関する科学的研究」を3年計画で開始した。研究代表者の交代により事務局を奈良国立文化財研究所に移し、日本側の研究体制を見直す年となった。この3年間は陶磁器の流通をテーマとするため、主たる研究交流は国立歴史民俗博物館の研究者等が当たっている。本研究は、今後3年間は研究分担機関として、主に基礎研究分野の交流に当たるとともに、研究体制

国際調査研究

の見直しなどの委員会運営を担当することとなった。

(3) タイ国レンガ造遺跡の劣化現象と保存処置に関する調査研究

科学研究費国際学術研究海外学術調査として、昨年度から3ヶ年計画で調査研究を開始した。本年度は6月、12月、3月にタイ国を訪れ、タイ国内のレンガ造遺跡の調査を行い、代表的な遺跡であるアユタヤおよびスコータイで下記の調査研究を実施した。

- ・アユタヤ遺跡のラチャブラーナ寺院に環境計測機器を設置し、大気温度、大気湿度、雨量、日照強度、レンガ表面温度、レンガ壁内部温度の測定と解析を継続して行っている。
- ・アユタヤ遺跡のマハタート寺院を中心に、レンガの劣化現象についての定点調査を行っており、またレンガ内の水分の現場測定を行った。
- ・スコータイ遺跡のスリサワイ寺院に環境計測機器を設置し、大気温度、大気湿度、雨量、日照強度、レンガ表面温度、レンガ壁内部温度の測定と解析を継続して行っている。
- ・スコータイ遺跡のスリチュム寺院の大仏（苔類、藻類の繁茂により黒緑化している）のクリーニングとクリーニング後の保護防水処理（撥水性シリコーン樹脂の含浸）の現地実験を行った。

また、3月にタイ側研究者4名を招へいし、調査研究結果と今後の研究計画についての協議を行った。

(4) 文化財保護に関する日独学術交流

(1) 文化財の微量試料分析法の開発

平成5年度から7年度まで科学研究費により共同研究「漆・ニスなど伝統的天然樹脂塗膜の劣化と保存」を行ったが、今年度から新たに「文化財の微量試料分析法の開発」という課題で3年間の子定で共同研究を行っている。9月に斉藤努と坂本稔(国立歴史民俗博物館)が金属試料の分析に関

して、工楽善通(奈良国立文化財研究所)が発掘資料の調査に関してそれぞれ訪独して共同研究を行い、3月に渡邊明義、三浦定俊、加藤寛(東京国立博物館)、日高薫(国立歴史民俗博物館)が訪独してドイツ国内の漆工品および関連資料についての調査を行った。また11月にドイツ側からキューレントール、ヴァルヒ(バイエルン州立文化財研究所)、ホルガー(漆工技術者)の3氏が来日して、石川、京都、奈良などにおいて漆工品の調査を行うとともに、関係者と研究協議を行った。

(2) 建造物保存修復の理念及び方法に関する研究

本研究は文化財保護についての制度が整い、実績を有する日独両国による、建造物の保存修復ならびに活用についてより高度な展望をひらくための共同研究である。本年度は各1回の相互訪問、2回の訪独自主調査を行った。調査の結果、日本側は、研究の対象として①木造建築を主体とした町並の修復理念と手法、②石造・レンガ造の修復技術、③構造補強の技術、④技術者教育の制度・施設・カリキュラム、⑤記念物保存の制度と運用、⑥産業遺産の保存、など多岐にわたる参考事例を得ることができた。

- 1) 第1次訪独(1996.8.18-28) 松本(文化庁亀井、奈文研村田、芸大斎藤)

日本側公式訪問(ヴィースバーデン、フルダ、シュマルカルデン、クェドリンブルク、ポツダム、ベルリン、リューブク)

- 2) 第2次訪独(1996.10.28-11.9) 松本(奈文研木村・長尾)

日本側自主調査(リンブルク、ヴァイルブルク、ライブツィヒ、クェドリンブルク、ドレスデン、ティアハウプテン、ミュンヘン)

- 3) ドイツ側公式訪問(1996.11.12-21) ジークフリート・エンデルス、ゲルト・カスター、ディートリヒ・ヴォルプス

東京(文化庁)、函館、札幌、白川郷・五箇山、高山、奈良、京都

- 4) 第3次訪独(1997.2.22-3.9) 宮本・松本(文化庁亀井)

日本側自主調査(ヒルデスハイム、ゴスラー、ケルン、アーヘン、カールスルーエ)

(5) シリア、アインダーラ神殿遺跡の保存修復

アインダーラ神殿遺跡は BC10世紀に遡る古代オリエントの重要な遺跡で、1956年と1976年に発掘が行われた。この遺跡を特徴づけるのは玄武岩に彫られたスフィンクス及びライオン像のレリーフである。これらは発掘直後から損傷が著しく、早急な保存修復処置が必要とされていた。そこで昨年度より5年計画で、住友財団の助成を受け、シリア考古総局との共同で、保存修復事業を行っている。日本側研究者及び技術者が5月に現地を訪れ、石彫レリーフのクラックへの樹脂注入充填処置、足跡石の強化防水処置、床石の嵩上げ処置等を行った。夏には1ヶ月間シリアから研修生を招へいし、保存修復の基本技術を習得させた。

(6) 文化財の保存修復技術に関する国際共同研究—文化財の保存修復に用いられる新材料〈1〉合成樹脂—(9年計画 第3年次)

本研究は文化財の保存修復に用いられる新材料についてのタイ国及びベルギー国との国際共同研究である。本年度はその第2年次として、合成樹脂について、タイ国立博物館およびベルギー王立文化財研究所との共同研究を行った。

1) 建造物等屋外文化財の保存修復に用いられる合成樹脂に関する調査研究

① タイ国において建造物、遺跡等屋外の文化財の保存、修復に用いられている合成樹脂に関する調査を、タイ国政府芸術局考古部と共同で実施した。東北部のクメール遺跡、アユタヤ遺跡、スコータイ遺跡での調査を石材及びレンガの保存対策と絡めて進めている。

② ベルギー王立文化財研究所が進めている石造建造物の保存、修復に用いられる合成樹脂の物性評価法の標準化について、種々の情報を収集した。

2) 美術工芸品等屋内文化財の保存修復に用いられる合成樹脂に関する調査研究

- ① タイ国等東南アジアで、美術工芸品、考古遺物、民俗資料、古文書等、博物館、美術館の収蔵品を中心とした屋内に保存されている文化財の保存、修復に用いられている合成樹脂に関する調査を、タイ国立博物館保存部と共同で行った。東南アジアでは天然樹脂もかなり用いられており、合成樹脂との使い分けや、その根拠などについても調査を実施した。
 - ② 大英博物館で行われている合成樹脂の物性評価方法について、情報収集を行った。
- 3) 各種合成樹脂の物性等に関する研究
- ① タイ国の研究者を日本に招へいし、修復用合成樹脂の物性についての研究協議を行った。
 - ② 実験的研究として、木造古建築の外装塗装としての丹塗りへの合成樹脂の応用について、その耐久性の面からの評価実験を行った。

(7) 在外日本古美術品保存修復事業に伴う調査

次年度修復作品選定のための調査

在米日本美術品の調査には修復技術部第2修復技術研究室尾立和則研究員が、在欧州日本美術品の調査には、修復技術部長増田勝彦が、国際センター企画室、文化庁美術工芸課、国際交流基金人物交流部、外務省文化1課の職員とともに出張し、作品損傷状況等の調査を行うとともに、調査記録の整理、第1候補の修理費概算見積等の作業を担当する。

平成8年度修復

「在外日本古美術品保存修復協力委員会」「在外日本古美術品保存修復指導委員会」のための資料として、前年度修復結果および当該年度の修復仕様および計画を作成する。修復進行と共に、修理中の技術的事項、記録作成にたいする助言を行う。修復中に来日する所蔵期間のスタッフと工房訪問に立ち会い状況説明等を行う。

(8) 海外所在日本美術品調査

当研究所では、昭和63年以来、欧米所在の明治時代以前の日本美術作品に関する基礎データの収集に努めてきた。平成2年度より、文化財保存修復学会（旧古文化財科学研究会）が日本芸術文化振興会から助成を得て「海外所在の日本文化財を対称とする調査研究」を行うことになり、当研究所が委嘱を受けて調査研究を担当した。平成2年度のメトロポリタン美術館、3年度のバーク・コレクション、バーク・ファウンデーション、4年度のフィラデルフィア美術館、5年度のプライス・コレクション、6年度のサンフランシスコ・アジア美術館、7年度のブルックリン美術館の調査に引き続き、8年度はハーバード大学サックラー美術館の絵画・彫刻作品の調査を行い、ブルックリン美術館の調査概報を刊行した。

(9) 中国青銅器に関する国際研究

今年度から文部省科学研究費補助金「古代東アジアにおける青銅器の変遷に関する考古学的・自然科学的研究」を利用して、国際交流研究を進めている。中国から金正耀（社会科学院世界宗教研究所）、鄭光（社会科学院考古研究所）、王増林（社会科学院考古研究所）の3氏を招請し、日本側から平尾良光、早川泰弘、井上洋一（東京国立博物館）が訪中した。これらの交流を通じて、日本側の研究施設・研究法などを理解してもらい、日本側では中国の発掘システムなどを理解できた。北京大学などとも交流の機会を得、今後への希望がもてる交流ができた。

9. 主要研究業績

- ①：著書・編書 ②：論文 ③：解説 ④：研究発表
 ⑤：講演・放送 ⑥：その他 平成7.4～8.3

美術部

鶴田 武良（美術部長）

- ① 中国近代美術大事年表 和泉市久保惣記念美術館 9. 3
 ② 中国全国美術展覧会略史 「現代中国の美術展」国立国際美術館 9. 7
 ② 清末・明国初期の美術教育—近百年來中国絵画史研究四—
 「美術研究」365 8.10
 ② 留日美術学生—近百年來中国絵画史研究 五一 「美術研究」367 9. 3
 ③ 『中国年鑑1996年版』文化・美術の項 中国研究所 8. 6
 ⑤ 社会主義美術から前衛美術へ—中国美術の50年—
 国立国際美術館 8. 7
 ⑤ 全国美術展から見た中国油畫の60年 福岡市美術館 8. 9
 ⑤ 文人画から近代絵画へ—中国美術の転換期— 日中友好会館 8.10

島尾 新（主任研究官）

- ① 『雪舟』新潮日本美術文庫1 新潮社 8.12
 ② The Stewards of Art in Muromachi Japan : Naomi, Geiami, and Soami
 Chanoyu Quarterly 84 8.10
 ② 会所の美術—室町時代の「美術」システム
 「国立歴史民俗博物館研究報告」95 9. 3
 ③ 二つの夏珪様山水図巻 「美術研究」367 9. 3
 ③ 瓢鮎図 「二枚の絵」毎日新聞 8. 9
 ⑤ 狩野派登場前夜 京都国立博物館土曜講座 8.10.19
 ⑤ 詩画軸の世界 静嘉堂文庫美術館 8.10.26

山梨絵美子（主任研究官）

主要研究業績

- ① 『日本の近代絵画』（山口桂三郎編，佐伯英里子，小池満紀子と共著）
ブレーン出版 8.10
- ① 清親と明治の浮世絵 「日本の美術」368 至文堂 9. 1
- ② 島霞谷の仕事とその視覚の特色 「島霞谷」展図録 戸定歴史館 8.10
- ⑤ 白馬会の風景表現 ブリヂストン美術館土曜講座 8.11. 9

岡田 健（主任研究官）

- ② 關於優填王造像の若干報告（中国語）
『龍門石窟一千五百周年國際學術討論會論文集』 文物出版社 8. 5
- ② 山東歷城黃石崖造像 「美術研究」366 9. 2
- ③ 作品解説「誕生釈迦仏立像・灌頂盤（模造）」他
「東大寺展」図録 8. 6
- ③ 作品解説「（東大寺）大日如来坐像，千手観音・四天王立像」
「中日新聞」 8. 6.27・28
- ④ 初唐期阿弥陀如来像の諸相 美術部・情報資料部研究会 8.11.27
- ④ 東寺兜跋毘沙門天像について 美術部・情報資料部研究会 9. 1.29
- ⑤ 東寺諸仏像納入品について 東寺 8.10. 5
- ⑥ 翻訳・段文傑「敦煌芸術総論」他
「砂漠の美術館—永遠なる敦煌」展図録 8. 6

中野 照男（第一研究室長）

- ② 中央アジア美術に現われた神と人間
『エルミタージュ美術館特別名品展 神と人間』図録
新潟県立近代美術館 8. 8
- ② シルクロードの塑像 「日影会会報」38 8. 8
- ② 探検家による収集品
『砂漠の美術館—永遠なる敦煌』図録 東京都美術館 8.10
- ② ル・コック 『東洋学系譜 [欧米篇]』（高田時雄編著）大修館書店 8.12
- ④ 敦煌・西域の美術と法隆寺金堂壁画
「古代日本海交流シンポジウム」上淀廃寺検討専門部会

主要研究業績

- 「上淀廃寺を復元する(II)～堂内荘嚴～」 淀江町役場 8. 7. 8-9
- ⑤ 仏教絵画の見方 四街道市立旭公民館講座 8. 6.22
- ⑤ 中央アジアの寺院装飾に現われた神と人間
新潟県立近代美術館 8. 8.24
- ⑥ 平成6・7年度科学研究費補助金(一般研究C)研究成果報告書
「中央アジア・クチャ地方における中国様式絵画の移入」 9. 3
- ⑥ 平成7・8年度科学研究費補助金成果報告書
「美術工芸品等の防災に関する調査研究」 9. 3

田中 淳(第二研究室長)

- ① 萬鉄五郎 新潮日本美術文庫35 新潮社 9. 2
- ② 川上涼花ノート 「東京国立近代美術館研究紀要」 8. 8
- ② 白馬会と東京美術学校
「結成100年 白馬会 明治洋画の新風」展図録,
ブリヂストン美術館等 8.10
- ② 劉生が見つめていたもの 「劉生と御舟」展図録 豊田市美術館 8.12
- ② 序論 「萬鉄五郎」展図録 東京国立近代美術館等 9. 3
- ③ 青木繁他50名作家解説 マイクロソフト エンカルタ97
エンサイクロペディア 8.11
- ④ 1912年の自画像 萬鉄五郎と岸田劉生
美術部・情報資料部公開学術講座 東京都美術館 8.10.30
- ④ 黒田清輝と白馬会 明治美術研究学会 ブリヂストン美術館 8.11.17
- ⑤ 黒田清輝と白馬会 京都国立近代美術館 9. 1.12

芸 能 部

蒲生 郷昭(芸能部長)

- ② 『めりやす豊年歳』をめぐって—研究史を軸に—
「芸能の科学」25 9. 3
- ② 長唄正本研究164～175(共同研究)
「邦楽と舞踊」550～561 8. 4～9. 3

主要研究業績

- ④ 『めりやす豊年蔵』研究小史
(出東洋音楽学会第402回定例研究会, 東京芸大音楽学部 11. 9
- ⑥ 第20回文化財の保存及び修復に関する国際シンポジウム
「歌舞伎—変遷と展望—」について」『月刊文化財』 9. 2
- ⑥ 横道万里雄『能劇そぞろ歩き』(共同編集) 能楽書林 8.10
- ⑥ 『日吉小三八問書き』(共同編集) 日吉和人・日吉小乃発行 9. 2

鎌倉 恵子 (演劇研究室長)

- ④ 日本の目連 泉州嘉礼戯学術座談会 中国福建泉州市
海外交通史博物館 8.8
- ④ 元禄歌舞伎に登場する動物 第20回国際シンポジウム「歌舞伎の変遷と展望」
江戸東京博物館会議室 11.13
- ⑥ 目連研究のあらまし 「日本目連傀儡研究会中間報告」
早稲田大学演劇博物館 レクチャールーム 8. 4

細井 尚子 (演劇研究室)

- ① 『ドラマとしての復讐と仇討ち』共著 新しい演劇研究会 9. 3
- ② 廟宇・廟祝・人形戯—中国泉州東嶽廟・城隍廟
「芸能の科学」25号 9. 3
- ④ 道教の超度, 木偶戯, 打城戯『日本目連傀儡研究会中間報告』
早稲田大学演劇博物館 レクチャールーム 8. 4
- ④ 泉州提線木偶戯戯神相公爺の靈性について 泉州嘉礼戯学術座談会
中国福建泉州市 海外交通史博物館 8. 8
- ④ 泉州提線木偶戯の戯神「相公爺」 民俗芸能研究会 9. 1
- ⑥ 川劇にみる化粧 (10) (翻訳/原文 張中学)「化粧文化」34号
ポーラ文化研究所 8. 5
- ⑥ 川劇にみる化粧 (11) (翻訳/原文 張中学)「化粧文化」35号
ポーラ文化研究所 8. 5
- ⑥ 中国の地方戯 京劇ニコニコ新聞 オーロラオーバル 97. 3

羽田 昶 (音楽舞踊研究室長)

- ③ 狂言の世界に跳梁跋扈する動物・植物たち 『狂言入門』(淡交社) 8. 4
 ③ 能と三島の「葵上」 蝸牛の会パンフレット 8. 4
 ③ 『能芸論』解説 『馬場あき子全集 8』(三一書房) 8. 9
 ⑤ 批評の機能 第20回国際シンポジウム「歌舞伎の変遷と展望」
 江戸東京博物館会議室 8.11.14
 ⑥ 横道萬里雄『能劇そそろ歩き』(共同編集) 能楽書林 8.10

高桑いづみ (音楽舞踊研究室)

- ② 能管の世界—その歴史と音楽— 「笛 秘曲の会」パンフレット 8. 8
 ② 「とうとうたたり」と雅楽の唱歌 「鉄仙」449号 9. 1
 ② オロン考—舞事の形成序説— 「芸能の科学」25号 9. 3
 ⑤ 狂言の古演出—乱声・責メ・海道下り—
 第27回芸能部公開学術講座 8.10.2
 ⑤ 能楽鑑賞講座 国立能楽堂公開講座 9.1~3

石井 倫子 (音楽舞踊研究室)

- ② 能の中の新古今~名歌・名句の言葉をとること~
 「国文学」42-13号 8.11
 ② 能と蹴鞠と兵法と~伝書にみる身体~ 「国語と国文学」887号 8.10
 ⑤ 狂言に見る風俗—衆道をめぐって— 第27回芸能部公開学術講座 8.10.2
 ⑥ 書評 堂本正樹『世阿弥の能』 「能楽タイムズ」 8.10

中村 茂子 (民俗芸能研究室長)

- ① 『神楽—原出雲の風土に生きる』共著 島根県大東町 9. 3
 ② 神戸市の鬼追行事に見る民俗的意義 「芸能史研究」133号 8. 4
 ② 棒を用いる民俗行事と民俗芸能 「芸能の科学」25 9. 3
 ③ 花祭りを支える人々 「音楽鑑賞教育」324 8. 1
 ④ 民俗芸能の棒 芸能部夏期学術講座 8.7~10
 ④ 盆踊りとしての「目連尊者地獄巡り」の伝承 泉州嘉礼戯学術座談会

主要研究業績

- 中国福建泉州市 海外交通史博物館 8. 8
- ⑤ 歌舞伎俳優の養成 第20回国際シンポジウム「歌舞伎の変遷と展望」
江戸東京博物館会議室 11.14

串田 紀代美 (民俗芸能研究室)

- ② 東京都の祭囃子—江戸里神楽からの影響をめぐって
「芸能の科学」25 9. 3
- ④ 江戸祭囃子の現状 芸能学会研究大会 8.12
- ⑥ 祭囃子 「中野区民俗調査第一次報告 鷺宮」 9. 3
- ⑥ 異文化理解 “ハイブリッド文化” のすすめ
「外国人刑事弁護団ニュースレターLAFOCC」11号 8. 6

保存科学部

三浦 定俊 (保存科学部長)

- ② 敦煌莫高窟の気象と壁画の保存 「東方学」92, pp.133-140, 8. 7
- ② 絵画用S環の安全性の評価
「文化財保存修復学会誌」41, pp.38-45, 8.12
- ② 化学的・光学的情報を用いた遺跡探査の手法に関する研究 (川野邊・佐野・中條・中浜・山口)
『重点領域研究「遺跡探査」第5回研究成果検討会議論文集』
pp.207-214, 9. 2
- ② 博物館等施設の室内空気汚染—ホルムアルデヒドの庫内濃度—
(佐野・小瀬戸恵美・三浦) 「保存科学」36, pp.28-36, 9. 3
- ② 国指定品新規公開施設を目指す収蔵展示施設の消火設備の設置状況—ハロン
生産中止後の動向—(佐野・三浦) 「保存科学」36, pp.37-46, 9. 3
- ② 展示公開施設の館内環境調査報告—平成7年度—(佐野・三浦)
「保存科学」36, pp.98-103, 9. 3
- ③ 絵画にひそむもの
「エネルギーレビュー (特集「古代を探る」)」16(8), pp.4-7, 8. 8
- ③ 文化財科学一般 (第13回大会研究発表をふりかえって)

主要研究業績

〔日本文化財科学会会報〕32, pp.21-22, 8.10

- ③ 資料保存に対する阻害要因とその対策
「IBEC (特集「博物館・美術館の省エネルギー」)」99 pp.24-28, 9.3
- ④ 文化財公開施設の収蔵・展示環境 (佐野・三浦)
美術史学会第49回全国大会, 8.5.25-27
- ④ 隠された肖像の画像解析(3) (花泉・田中)
第18回文化財保存修復学会講演会大会, 8.6.1~2
- ④ 東京都美術館「法隆寺金堂壁画展」に関する保存環境調査
(佐野・三浦・木川) 同上
- ④ スカイポールからの画像を用いた遺跡探査 (三浦・川野邊)
日本文化財科学会第13回大会, 8.6.15-16
- ④ かくされた情報を画像からよみとる, 文化財保存科学の世界 (東北芸術工科大学公開講座, 第3回美をまもる) 9.2.22
- ⑤ 梱包概論 (梱包の科学), 指定文化財 (美術工芸品) 取り扱い講習会 (東京), 8.7.18
- ⑤ 同上, 同上 (京都) 8.11.27
- ⑤ 文化財の保存環境の考え方 平成8年度文化財行政基礎講座
(国立オリンピック記念 青少年総合センター), 8.10.24
- ⑤ 科学的方法による材料及び技術の分析
指定文化財 (美術工芸品) 修理技術者講習会 (京都) 8.11.1
- ⑤ 保存科学概論, 歴史民俗資料等専門職員研修会 (国立歴史民俗博物館) 8.11.26

佐野 千絵 (主任研究官)

- ② コンクリートから発生するアルカリ性物質について (II)
「文化財保存修復学会誌」41, pp.46-53, 8.12
- ② 化学的・光学的情報を用いた遺跡探査の手法に関する研究 (三浦・川野邊・佐野・中條・中浜・山口)

〔重点領域研究「遺跡探査」第5回研究成果検討会議論文集〕

pp.207-214, 9.2

主要研究業績

- ② 博物館等施設の室内空気汚染—ホルムアルデヒドの庫内濃度—(佐野・小瀬戸
恵美・三浦) 「保存科学」36, pp.28-36, 9. 3
- ② 国指定品新規公開施設を目指す取蔵展示施設の消火設備の設置状況—ハロン
生産中止後の動向—(佐野・三浦) 「保存科学」36, pp.37-46, 9. 3
- ② 展示公開施設の館内環境調査報告—平成7年度—(佐野・三浦)
「保存科学」36, pp.98-103, 9. 3
- ④ 紫外線による絹の劣化とその修復材料としての可能性(川野邊・佐野)
第18回文化財保存修復学会講演会大会, 8.6.1~2
- ④ 化学発光法の文化財試料への応用における問題点
同上, 8.6.1~2
- ④ 東京都美術館「法隆寺金堂壁画展」に関する保存環境調査(佐野・三浦・木
川) 同上, 8.6.1~2
- ⑥ 文化財を守る—時代とともに変わる保存技術(木川, 佐野)
「ゑれきてる」(東芝)61, pp.29~34, 8.10

平尾 良光(化学研究室長)

- ① 釘・鋸の化学的調査(平尾, 榎本淳子)『東大寺南大門国宝木造金剛力士像修
理報告書』本文篇, 文化庁編, pp.142~148, 5. 3
- ① 鉛製弾丸の自然科学的調査(平尾, 榎本淳子)『同上』pp.150~156 5. 3
- ① 神庭荒神谷遺跡から出土した青銅製品の化学組成(平尾・内田ら)『出雲神庭
荒神谷遺跡』本文編第3部第1章第1節,
島根県教育委員会, pp.153~170, 8. 3
- ① 神庭荒神谷遺跡出土青銅器の非破壊分析と鉛同位体比測定(馬淵・平尾ら)
『 同上 』本文編第3部第1章第2節,
島根県教育委員会, pp.171~186, 8. 3
- ① 神庭荒神谷銅剣に発生した錆の調査(平尾・渡辺ら)
『 同上 』本文編第3部第2章,
島根県教育委員会, pp.187~208, 8. 3
- ② 群馬県から出土した弥生時代青銅器の自然科学的研究—群馬県高崎市進歩遺
跡出土の巴形銅器, 甘楽郡甘楽町天引狐崎遺跡出土の銅釧, 渋川市有馬遺跡

主要研究業績

- 出土の銅鍍銅釧に関して一(平尾・榎本淳子) 群馬県埋蔵文化財調査事業団
発掘調査報告書第21集 『天引狐崎II』, pp.209-224, 8.12
- ② 虺龍文鏡および福岡県北九州市から出土した弥生～古墳時代の青銅製遺物の
鉛同位体比(平尾・榎本淳子),
「北九州市立考古博物館研究紀要」3, pp.1-9, 8.6
- ④ カマン・カレホユック遺跡出土銅器および青銅器のマイクロスコープ分析,
(津越敬寿・阿部尚正・古谷圭一・平井昭司・平尾)
57回分析化学会討論会, 8.3
- ④ 古代鉄釘中の微量元素の分布(岡田往子・鈴木章悟・平井昭司・平尾),
日本文化財科学会第13回大会研究発表要旨集, pp.38-39, 8.6.15-16
- ④ 島根県荒神谷遺跡から出土した銅製遺物の化学組成,(平尾・内田哲男),
同上
- ④ 放射線を利用した文化祭試料の非破壊的測定
第33回理工学における同位体元素研究発表会, pp.153-162, 8.7.3
- ④ XAFS法による古代銅遺物中の状態分析
1996年分析化学会X線討論会, 8.9.19
- ④ 文化財試料の非破壊分析 第11回立教大学原子力研究所講演会, 8.11.9

早川 泰弘(化学研究室)

- ② 日韓硬玉製勾玉の自然科学的分析(早乙女雅博・早川)
「朝鮮学報」162, pp.21-42, 9.1
- ② ICP 発光分光/質量分析装置の基本特性の評価
「保存科学」36, pp.85-90, 9.3
- ④ 日韓硬玉製勾玉の自然科学的分析(早乙女雅博・早川)
朝鮮学会第47回大会講演要旨集, pp28, 8.10.5

石崎 武志(物理研究室長)

- ② Experimental study on unfrozen water migration in porous materials
during freezing Journal of Natural Disaster Science, 17(2) pp.65-74

8.8

主要研究業績

- ② Premelting of ice in porous silica glass. (T.Ishizaki, M. Maruyama, Y. Furukawa & J.G. Dash) Journal of Crystal Growth, 160 (3), pp.455-460
8. 9
- ④ Field observation of microclimatic and ground thermal regimes beneath high way (T. Ishizaki, M. Fukuda, N. Mishima, S. Yokota, K. Toya) Int. Conf. on Snow Engineering 8. 5
- ④ 凍結過程における土の凍結面近傍の微視的観察 (渡辺晋生・石崎・武藤由子・溝口勝) 1996年度農業土木学会全国大会, 8. 7
- ④ 東シベリア, コリマ川下流域のエドマの形成年代 (仙頭宣幸・福田正己・石崎・五十嵐八枝子・中村俊夫・V.サルコフ) 1996年度日本雪氷学会全国大会, 8. 9

木川 りか (生物研究室)

- ④ 東京都美術館「法隆寺金堂壁画展」に関する保存環境調査 (佐野・三浦・木川) 第18回文化財保存修復学会講演会大会 8.6.1-2
- ④ Polyethylene Glycol Degrading Bacteria Found in the Treatment Solution of Excavated Waterlogged Wood (Rika Kigawa and Akira Yokota) 16th International Congress of IIC, Archaeological Conservation and Its Consequences 8.8.26-30
- ⑥ 文化財を守る一時代とともに変わる保存技術 (木川・佐野) 「ゑれきてる」(東芝) 61, pp.29-34, 8.10

山野 勝次 (生物研究室)

- ② 千葉県木更津市で発見されたアメリカカンザイシロアリ「しろあり」104, p.30-38, 8. 4
- ③ 臭化メチルの使用規制と代替防除法研究の現状, 「文化財の虫菌害」31, p.8-13, 8. 6
- ③ 図書館のメンテナンス 害虫対策, 「学校図書館」548, p.46-47, 8. 6
- ③ シロアリ防除の過去, 「しろあり」105, p.3-23, 8. 7
- ③ シロアリの生態に関する実務的知識(1), 「同上」107, p.12-21, 9. 1

- ⑤ 文化財の害虫と防除対策, 第18回文化財の虫菌害保存対策研修会,
 勸文化財虫害研究所, 8.7.17

修復技術部

増田 勝彦

- ③ 「和紙とはどういう紙ですか」 和紙の手帖II 8.7
- ③ 「文化財修復の現状—絵画—」 駿河台大学文化情報部特別講座 8.6.4
- ③ 劣化と保存各論III—紙— 博物館・美術館等の保存担当学芸員研修 8.7.27
- ③ 修復材料各論—伝統材料—
 博物館・美術館等の保存担当学芸員研修 8.7.27
- ③ 「劣化損傷史料の保存修理I」 国文学研究資料館史料館研修 8.9.13
- ③ 「史料の保存環境と劣化損傷要因」 国文学研究資料館史料館研修 8.9.17
- ③ 「公開のためには史料の保存をどう位置づけていくべきか—外交史料館所蔵史料保存管理検討委員会報告に基づいて—」,
 外交史料館 研究会 8.9.20
- ③ 「近代の文化遺産—文書—」 博物館保存科学研究会 8.11.8
- ③ 「昔の紙, 今の紙—紙に含まれる非繊維物質を中心に—」
 国宝修理装演師連盟中堅職員研修 8.11
- ③ 「古代中世の料紙研究」, 国文学研究資料館史料館特定研究「記録史料の情報資源化と史料管理学の体系化に関する研究」,
 保存と修復研究部会研究会 9.1.17
- ③ 「被災文書の救助と処置」東京芸術大学シンポ「国際シンポジウム, 災害から文化財を守る—緊急時の対策と活動の指針—」 9.1.24
- ③ 史料の保存科学 埼玉県文書館主催平成8年度文書史料取扱講習会 9.2.4
- ⑥ 「紙の保存・修復」国際研修 8.11.20/12.13

川野邊 渉

- ② 古建築の外装塗装の物性に関する研究IV 保存科学36号 9.3
- ② 東大寺国宝八角灯籠の表面に生成する腐食生成物の解析
 保存科学36号 9.3

主要研究業績

- ② 化学的・光学的情報を用いた遺跡探査の手法に関する研究（三浦・佐野・中
條・中沢・山口）『重点領域研究「遺跡探査」第5回研究成果検討会議論文集』
pp.207-214 9. 2
- ② 熱分解ガスクロマトグラフィーによる漆試料の同定の可能性について
保存科学36号 9. 3
- ⑤ 高分子学会東海地区若手研究者夏期研修会で講演「高分子と文化財」
- ⑤ 国立歴史民俗博物館にて
文化庁修理技術者講習会で講演「合成樹脂」 9.12
- ⑤ 日本建築センターで講演「文化財建造物と合成樹脂」 10. 2
- ⑤ 国宝修理装こう師連盟中堅職員講習会「合成樹脂」 9.11
- ⑥ 「合成樹脂」博物館・美術館等保存担当学芸員研修 9. 8

中里 壽克

- ⑥ 講演「日本漆芸品技法史と漆芸品修復」 台湾省手工業研究所 8. 4.18
- ⑥ 保存担当学芸員研修 各論—漆— 8. 7.23
- ⑥ 講演「漆芸品の模造について」IICJapanセミナー
東京国立文化財研究所 8. 9.11

尾立 和則

- ⑥ 保存担当学芸員研修 各論—絵画の彩色層— 8. 7.24
- ⑥ 「下張り文書研究会」 茨城県牛久市立中央公民館 8. 7.27
- ⑥ 「紙の保存・修復」国際研修 8.11.20/12.13
- ⑥ 「大英博物館、修復専門家のための一日研修」 9. 3.24

松本 修自

- ② 山田寺と玉虫厨子—飛鳥時代の建築技法— 「日本の国宝」2 9. 3.
- ③ 玉虫厨子 「日本の国宝」2 9. 3.
- ③ 唐招提寺金堂・講堂・鼓楼・経蔵・宝蔵 「日本の国宝」6 9. 3.
- ⑥ 木造建築のダンディたち Japan ICOMOS Information 3-5

青木 繁夫

- ② 重要文化財の大气腐食に関連した風観測 「日本風工学会誌」67号 8. 4
- ② 東大寺国宝金銅八角灯籠の表面に生成する腐食生成物の解析
「保存科学」36号 9. 3
- ⑥ 劣化と保存—金属文化財の保存—
博物館・美術館学芸員保存担当学芸員研修 8. 7
- ⑥ 劣化と保存—考古資料の保存—
博物館・美術館学芸員保存担当学芸員研修 8. 7
- ⑥ 我が国における遺跡保存の現状 国士館大学文化遺産保存研究会 8.10
- ⑥ 金属文化財の保存について 歴史民俗博物館等博物館学芸員研修 8.11
- ⑥ 考古資料の保存について 佐賀県文化財保護担当者研修 8.12

情報資料部

松島 健 (情報資料部長)

- ① 大山祇神社の神像 大山祇神社 8. 4
- ① 週刊朝日百科『日本の国宝5 奈良薬師寺』編集 朝日新聞社 9. 3
- ② 白杵摩崖佛の成立試論 『国華』1215 9. 2
- ③ 彫刻の国宝指定をめぐる 『国立博物館ニュース』588 8. 3
- ③ 男神坐像 京都府出雲大神宮—新国宝・重要文化財紹介
『国立博物館ニュース』588 8. 3
- ③ 興福寺の歴史 『日本仏教美術の宝庫 奈良・興福寺』展図録概説
フランス RMN 8. 9
- ③ 運慶とその時代1 産経新聞 8.11
- ③ 運慶とその時代3 産経新聞 8.12
- ③ 《国宝の旅3》整形された仁王の顔 『一冊の本』10 朝日新聞社 9. 1
- ③ 運慶とその時代5 産経新聞 9. 1
- ③ 運慶とその時代7 産経新聞 9. 2
- ③ 運慶とその時代9 産経新聞 9. 3
- ③ 解説 薬師如来及び両脇侍像
週刊朝日百科『日本の国宝5 奈良薬師寺』朝日新聞社 9. 3

主要研究業績

- ③ 解説 薬師寺 藤原京から平城新京へ移転
週刊朝日百科『日本の国宝5 奈良薬師寺』朝日新聞社 9. 3
- ③ 解説 薬師寺の移転をめぐる論争
週刊朝日百科『日本の国宝5 奈良薬師寺』朝日新聞社 9. 3
- ⑤ 興福寺南円堂本尊不空罽索観音像について—修理時の所見を中心に—
東京国立博物館主催 興福寺国宝展記念シンポジウム
「興福寺南円堂の彫刻をめぐる」 9. 1

井手誠之輔（主任研究官）

- ② 長野・定勝寺所蔵 補陀洛山聖境図 『美術研究』365 8.10
- ② 華嚴思想と高麗仏画の領分（韓国語翻訳文）
『高麗の仏画』韓国・時空社 9. 3
- ③ 図版解説（韓国語翻訳文）、阿弥陀如来図（島津家旧蔵・萩原寺）・観経序分
変相図（西福寺・大恩寺）・観経十六観変相図（西福寺・知恩院・隣松寺）
『高麗の仏画』韓国・時空社 9. 3
- ④ 長野・定勝寺蔵「補陀洛山聖境図」について
美術部・情報資料部研究会 8. 7.31

長岡龍作（主任研究官）

- ④ An Analysis of Japanese Buddhist Sculpture: The topology of Yakushi
-nyorai of Jingoji, Kyoto
ロンドン大学オリエントアフリカ研究学院日本研究センター研究会
8. 6. 5
- ④ 9世紀日本の武装像—「境界の像」の観点から
美術部・情報資料部研究会 9. 1.29
- ⑤ The Current State of Japanese Art History—The Study and System
ロンドン大学オリエントアフリカ研究学院サザビーズコース 8. 5.22

米倉迪夫（文献資料室長）

- ④ ふたつの頼朝像—主題の浮上— 美術部・情報資料部研究会 8. 6. 5

- ④ 美術というシステム—東洋美術の情報部門からの観察
 第15回国際美術史研究会シンポジウム 8.10.24
- ⑤ 神護寺の肖像画をめぐる一世紀でたどる日本史～14世紀・動乱の100年—
 朝日カルチャーセンター・横浜 9. 3. 4

勝木言一郎（文献資料研究室）

- ② 敦煌莫高窟431窟の九品往生図壁画に関する一考察
 科学研究費一般研究C「クチャ地方の中国様式絵画」（代表者中野照男）報告書 9. 3
- ④ 法隆寺金堂壁画について考える
 美術部・情報資料部公開学術講座（於東京都美術館） 8.10.30
- ⑥ 中国語翻訳 劉東光「響堂山石窟に関するいくつかの問題について」
 『仏教芸術』230号 9. 1

鈴木 廣之（写真資料研究室長）

- ② 類似の発見—室町の〈擬〉、江戸の〈見立て〉— 『日本の美学』24 8. 9
- ② 国民国家イデオロギーと日本美術史（上） 『月刊百科』409 8.11
- ② 国民国家イデオロギーと日本美術史（下） 『月刊百科』411 9. 1
- ④ 見立ての変容—室町と江戸— 第89回東京読画連 8. 6.22
- ④ “The Reconstruction of the Body and the Inauguration of 'Bijutsu' (Fine Arts) in the Meiji Period”
 College Art Association, 85th Annual Conference 9. 2.14
- ④ “The Reconstruction of the Body and the Institutionalization of "Bijutsu" (Fine Arts) in the Late Meiji Period” Duke University 9. 2.17
- ④ “The Physiognomy of Culture: A Pilgrimage to Old Temples by Watsuji Tetsuro” University of California, San Diego 9. 2.19

国際文化財保存修復協力センター

宮本長二郎（センター長）

- ① 日本原始古代の住居建築 中央公論美術出版 8. 7

主要研究業績

- ② よみがえる巨大建築物 「歴史読本」新人物往来社 8. 4
- ② 瀬名遺跡出土建築部材の復原 「瀬名遺跡V(遺物編II)」
静岡県埋蔵文化財調査研究所 8. 4
- ② 縄文人と弥生人の住宅事情 「歴史読本」新人物往来社 8.11
- ② 竪穴住居の復元
「考古学による日本歴史15 家族と住まい」雄山閣 9. 1
- ② 温故知新 「月刊つち」1～3号 9.1-3
- ② 弥生の大型建物 「歴史九州」997年2月号 9. 2
- ③ 弥生王国の建築 「朝日新聞」文化欄 8. 7.29
- ④ 掘立柱建物の出現と展開 奈良国立文化財研究所シンポジウム 8.10.30
- ④ 弥生・古墳時代の祭儀場 大分県日田市まちづくりフォーラム 8.11. 9
- ⑤ 三内丸山遺跡 小平市民会館 9. 1.11
- ⑤ 弥生の大型建築 九州歴史大学講座 9. 2. 8
- ⑤ 古代の住居 栃木県文化財協議会 9. 2.24

西浦 忠輝 (環境解析研究指導室長)

- ① 敦煌保存修復の事例から見た国際協力
「アジア知の再発見：文化財保存修復と国際協力」クバプロ 8. 8
- ① シリアのアインダーラ神殿遺跡の保存修復〔I〕
「第3回西アジア発掘調査報告書」クバプロ 9. 1
- ① Conservation Project for Ain Dara Temple, Syria (An Interim Report: June 1995-December 1996)
Japan Center for International Cooperation in conservation, Tokyo
National Research Institute of cultural Properties & Aleppo Museums
and Antiquities, Syria 9. 3
- ① シリア・アインダーラ神殿遺跡保存修復プロジェクト(年次報告:
1995.6-1996.12)
東文研・国際文化財保存修復協力センター, シリア国アレppo考古局 9. 3
- ② シリアのアインダーラ神殿遺跡の保存修復〔概要〕(井上らと共著)
「保存科学」36 9. 3

- ③ 敦煌莫高窟保存日中共同研究 「絲綢之路」22 8.10
- ④ 丹色塗装の屋外曝露試験 (岡部, 川野邊と共同)
第18回文化財保存修復学会講演会大会 8. 6
- ④ シリアのアインダラ神殿遺跡の保存修復 [II] (井上らと共同)
第18回文化財保存修復学会講演会大会 8. 6
- ④ アジア諸国における文化財保存の現状—アンケート調査の結果と考察(1)
(二神と共同) — 第18回文化財保存修復学会講演会大会 8. 6
- ④ 石材強化保存用シリコン樹脂の物性評価—Wacker OH と SS-101 (大石ら
と共同) 日本文化財科学会第13回大会 8. 6
- ④ Conservation of Newly Excavated Architectural Monument in Syria
-Joint Project between Japan and Syria for the Conservation of Ain Dara
Temple (BC10)-
16th International Congress of the International Institute for Conservation
in Copenhagen 8. 8
- ④ Conservation of Excavated Monument in Syria-Conservation Project of
Ain Dara Temple (BC10)
11th ICOMOS International Symposium of the Heritage and Social
Changes in Sophia, Bulgaria 8.10
- ④ ガンダラ・ラニガト遺跡保存, 修復, 整備の現状と問題点 (増井と共同)
第1回アジア文化財保存修復研究会 9. 3
- ④ シリアのアインダラ神殿遺跡の保存修復 (井上らと共同)
第4回西アジア発掘調査報告会 9. 3
- ⑤ アインダラ神殿遺跡の修復 シリア・アレppo市考古学協会例会 8. 5
- ⑤ 世界文化遺産の保存と国際協力 目黒区社会教育講座 (3回) 8.6-7
- ⑤ 劣化と保存各論—木— 博物館・美術館等保存担当学芸員研修 8. 7
- ⑤ 劣化と保存各論—石— 博物館・美術館等保存担当学芸員研修 8. 7
- ⑤ 世界文化遺産の保存修復と国際協力 杉並ユネスコ協会講演会 8. 9
- ⑤ 国際博物館会議保存委員会大会報告 文化財保存修復学会例会 8. 9
- ⑤ おもしろい熱帯アジアの考古学・建築学—国際文化協力と日本
上智大学公開講座 8.11

主要研究業績

- ⑤ Application of a New Capping Method for the Conservation of Excavated Monuments at Ranigat Site
UNESCO Workshop for Conservation of Gandhara Monument, Pakistan 8.11
- ⑤ 石造文化財の保存修復
京都造形芸術大学集中講義（保存学実習II） 8.12
- ⑤ 屋外遺跡保存国際協力事業の現状と問題点
(注)日本工業技術振興協会 Polymers-in-Concrete 部会 9. 2
- 朽津 信明（環境解析研究指導室研究員）
- ② 銅剣埋納坑の土壌分析 「出雲神庭荒神谷遺跡」島根県教育委員会 8. 4
- ② 鉛丹の変色に関する鉱物学的考察 「保存科学」36 9. 3
- ② X線分析顕微鏡による文化財試料の分析 「保存科学」36 9. 3
- ② 微小部X線回折による文化財試料の分析 「保存科学」36 9. 3
- ② 塩津山1号墳の赤色顔料 「塩津山古墳群」 島根県教育委員会 9. 3
- ② 地質学から見た国分寺六ッ目古墳
「国分寺六ッ目古墳」香川県教育委員会 9. 3
- ④ 地表条件における鉛鉱物の変質—絵画顔料の変色から—
日本地質学会第103年年会 8. 4
- ④ 松戸市立博物館蔵の板絵に見る鉛白の変色と再白色化
文化財保存修復学会第18回大会 8. 6
- ④ タイの遺跡における石材とその劣化(I)—使用石材の概要と劣化状況—
日本文化財科学会第13回大会 8. 6
- ④ 敦煌莫高窟に見られる顔料
保存科学研究集会97 奈良国立文化財研究所 9. 2
- ⑤ 地質学と文化財研究 川崎市市民講座 8. 5
- ⑤ 劣化と保存各論—ガラス—
博物館・美術館等保存担当学芸員研修 8. 7
- ⑤ Analysis of inorganic pigments トルコ中央修復研究所セミナー 8.10

IV. 大学院教育

平成7年4月より東京芸術大学大学院と連携して大学院教育に従事し、人材養成を行っている。システム保存学（連携研究分野）は、文化財の置かれている環境問題を考究する保存環境学講座と、保存修復に適用される材料について考究する修復材料学講座に分かれており、所員が各講座3名ずつ併任教官として指導にあたっている。

(1) 併任教官及び担当授業

保存環境学講座

併任教授 三浦定俊（保存科学部長）： 保存環境計画論（前期）

併任教授 平尾良光（保存科学部化学研究室長）：
保存環境学特論Ⅱ（後期）

併任助教授 佐野千絵（保存科学部主任研究官）：
保存環境学特論Ⅰ（前期）

修復材料学講座

併任教授 宮本長二郎（国際文化財保存修復協力センター長）：
修復計画論（後期）

併任教授 増田勝彦（修復技術部長）： 修復材料学特論Ⅰ（前期）

併任助教授 川野邊渉（修復技術部主任研究官）：
修復材料学特論Ⅱ（後期）

集中講義

西川杏太郎客員教授：「文化財保存学の基本」（平成8年9月18日）

(2) 文化財保存学演習（併任教官が担当）

第1回（平成9年1月7日）：所内見学

第2回（平成9年1月14日）：グループ演習（佐野，川野邊両併任助教授担当）
宮本長二郎併任教授による講義「三内丸山遺跡と修復」

大学院教育

(3) 平成9年度入学選抜試験

平成9年度の入学選抜試験は以下のように実施された。

修士課程

実施日：平成9年2月3日～5日

試験内容：筆答試験（英語・基礎・専門・小論文），面接

受験者数：3名 合格者数：0

博士課程

実施日：平成9年2月6日

試験内容：筆答試験（英語・専門），面接

受験者数：1名 合格者数：0

V. 事 業

1. 出 版

(1) 美術研究

平成8年度は第365号から第367号が下記の内容で刊行された。

美術研究 第365号 (平成8年10月)

清末・民国初期の美術教育

—近百年來中国絵画史研究 四—

鶴田 武良

(図版解説)

長野・定勝寺所蔵 補陀洛山聖境図

井手誠之輔

美術研究 第366号 (平成9年2月)

棄丸の幻影

—都久夫須麻神社本殿母屋をめぐって— アンドリュー・M・ワツキー

三戸信恵訳

(研究資料)

山東歴城黄石崖造像

岡田 健

美術研究 第367号 (平成9年3月)

グレーニッシュルロワンの黒田清輝

—未完の「大きな肖像」と芸術家ブルス夫妻—

荒屋 鋪透

留日美術学生

—近百年中国絵画史研究 五—

鶴田 武良

(図版解説)

二つの夏珪様山水図巻

島尾 新

事 業

(2) 日本美術年鑑

平成8年度版(平成9年4月)

平成7年の内容をもつ。B5版335ページ

平成7年の美術界年史

美術展覧会(現代美術・西洋美術)

美術展覧会(東洋古美術)

美術文献目録(定期刊行物所載)(現代美術・西洋美術)

美術文献目録(定期刊行物所載)(東洋古美術)

物故者

(3) 芸能の科学

古典芸能についての研究論文, 調査報告, 資料翻刻等を掲載している。平成8年度は下記の論考集を刊行した。

芸能の科学25(平成9年3月発行)

オロシ考—舞事の形成序説—

高桑いづみ

棒を用いる民俗行事と民俗芸能—突き技と組打ち技を中心に—中村 茂子

『めりやす豊年蔵』をめぐって—研究史を軸に—

蒲生 郷昭

東京都の祭囃子—江戸里神楽からの影響をめぐって—

串田紀代美

廟宇・廟祝・人形戲—中国泉州東嶽廟・城隍廟—

細井 尚子

(4) 保存科学

所属研究員による文化財の保存と修復に関する科学的調査, 受託研究報告等の論文報告及び修復処置概報等を掲載している。平成8年度は第36号を発行した。掲載論文は下記の通りである。

保存科学第36号

東大寺国宝金銅八角灯籠の表面に生成する腐食生成物の解析

松田 史郎・青木 繁夫・川野邊 渉

博物館等施設の室内空気汚染—ホルムアルデヒドの庫内濃度—

佐野 千絵・小瀬戸恵美・三浦 定俊

国指定品新規公開施設を目指す収蔵展示施設の消火設備の設置状況

—ハロン生産中止後の動向— 佐野 千絵・三浦 定俊

古建築の外装塗装の物性に関する研究 (IV)

—丹色塗装の屋外曝露試験 西浦 忠輝・岡部 昌子・川野邊 涉
鉛丹の変色に関する鉱物学的考察 朽津 信明

島根県荒神谷遺跡出土銅剣の鉛同位体比の解釈について

—久野雄一郎氏に答える— 馬淵 久夫

シリアのアインダーラ神殿遺跡の保存修復〔概要〕

西浦 忠輝・井上 洋一・海老澤孝雄・山崎やよい・
ワヒード ハイヤータ・ハミード ハマーデ

ICP 発光分光／質量分析装置の基本特性の評価 早川 泰弘

X線分析顕微鏡による文化財試料の分析 朽津 信明

微小部X線回折による文化財試料の分析 朽津 信明

展示公開施設の館内環境調査報告

—平成7年度— 佐野 千絵・三浦 定俊

平成8年度 修復処置概報 修復技術部

2. 黒田清輝巡回展

今年度は、ブリヂストン美術館・石橋美術館・京都国立近代美術館・日本経済新聞社との共催で「白馬会—明治洋画の新風」展として行った。会場と開催期間は以下の通り。

ブリヂストン美術館 平成8年10月19日(土)～11月28日(木)

京都国立近代美術館 平成8年12月10日(土)～平成9年1月26日(木)

石橋美術館 平成9年2月7日(金)～3月16日(日)

3. 公開学術講座

美術部・情報資料部 (第30回)

日 時 平成8年10月30日(水) 13:30～16:00

事 業

会 場 東京都美術館講堂

講 演 (1) 「法隆寺金堂壁画について考える」 勝木言一郎

(2) 「1912年の自画像
—萬鉄五郎と岸田劉生—」 田中 淳

芸能部 (第27回)

日 時 平成8年10月2日(水) 18:00~20:30

会 場 梅若能楽院会館

テ ー マ 鬼狂言の復曲

講 演 (1) 狂言に見る風俗 石井 倫子

講 演 (2) 狂言の古演出 高桑いづみ

復曲実演 「立山詣」—虎明本「くも」より— 茂山千五郎

茂山千之丞

松田 弘之

金春 国和

4. 夏期学術講座

芸能部 (第21回)

芸能部では、芸能の多角的かつ総合的な研究に資することを目的として、例年夏期4日間にわたる学術講座を、首都圏各大学の大学院生を対象に実施している。会場を東京国立文化財研究所別館会議室とし、芸能部員がそれぞれの専門分野における研究成果を体系的に論ずる。

平成8年度は「民俗芸能の棒」というテーマを設け、中村茂子が担当し、7月8日から11日までの4日間にわたり実施した。受講者は東京学芸大学、日本大学、共立女子大学、成城大学、早稲田大学、慶應義塾大学、明治大学、実践女子大学の各大学院生で、受講者数は19名。日程及びテーマ細目は下記の通りである。

7月8日(月)

序論

棒振り芸

「振り技」の展開Ⅰ

7月9日（火）

「振り技」の展開Ⅱ

「振り技」の展開Ⅲ

「振り技」の展開Ⅳ

7月10日（水）

「組み打ち技」Ⅰ

「組み打ち技」Ⅱ

「突き技」Ⅰ

7月11日（木）

「突き技」Ⅱ

民俗行事の棒

質疑

5. 能楽技法講座

芸能部では能楽研究を志す学生や若手研究者を対象に、実技の修得、脚本構造の技法分析等、能楽を楽劇として総合的に把握するための基礎的な講義を行っている。

講 師 高桑いづみ 羽田 昶 及び外部の研究者・実技者

期 間 平成7年から2年間（毎週水曜日午後6時～8時）

場 所 別館会議室または芸能部舞台

内 容 脚本構造・謡の技法・囃子の技法・面装束の用法・狂言の技法等

6. 博物館・美術館等の保存担当学芸員研修

- 研修内容
- ・文化財の保存環境に関する科学的な基礎知識及び調査処理法の指導
 - ・文化財の修復技術に関する基礎知識及び科学的な基礎技法の指導

事 業

期 間 平成8年7月15日(月)～7月26日(金)

場 所 東京国立文化財研究所別館会議室

参加者 21名

7月15日(月)

開講式・オリエンテーション

保存環境総論 —文化財の保存と環境— 保存科学部長 三浦 定俊

保存環境〈実習〉 —温湿度測定機器の取扱い— 三浦 定俊

16日(火)

保存環境 各論 —温湿度— 三浦 定俊

保存環境 各論 —展示梱包ケースの湿度調節—

国立歴史民俗博物館 神庭 信幸

保存環境〈実習〉 —湿度の制御法— 三浦 定俊

17日(水)

保存環境 各論 —光と劣化— 保存科学部主任研究官 佐野 千絵

保存環境 各論 —照度基準— 神庭 信幸

保存環境〈実習〉 —照度の測定と調節— 佐野 千絵

18日(木)

保存環境 各論 —大気汚染とその影響— 化学研究室長 平尾 良光

保存環境 各論 —室内汚染— 佐野 千絵

保存環境〈実習〉 —室内汚染の調査法— 佐野 千絵

19日(金)

生物被害 虫 —害虫の生態と被害— 保存科学部調査員 山野 勝次

生物被害 カビ —要因とメカニズム— 生物研究室 木川 りか

劣化と保存 各論 —紙— 修復技術部長 増田 勝彦

劣化と保存 各論 —伝統材料— 増田 勝彦

保存環境〈実習〉 —環境調査 1— 佐野 千絵

22日(月)

劣化と保存 各論 —木— 環境解析研究指導室長 西浦 忠輝

劣化と保存 各論 —石— 西浦 忠輝

事業

修復材料 各論	— 絵画の彩色層 —	第二修復技術研究室	尾立 和則
劣化と保存 各論	— 考古遺物 —	第三修復技術研究室長	青木 繁夫
保存環境〈実習〉	— 環境調査 2 —		佐野 千絵

23日(火)

劣化と保存 各論	— 油彩画 —	東京芸術大学大学院教授	歌田 真介
劣化と保存 各論	— 漆 —	第一修復技術研究室長	中里 壽克
劣化と保存 各論	— 金属 1 —		青木 繁夫
劣化と保存 各論	— 金属 2 —		青木 繁夫
修復材料 各論	— 合成樹脂 —	修復技術部主任研究官	川野邊 渉

24日(水)

調査手法 各論	— 化学分析 —		平尾 良光
調査手法 各論	— 画像計測 —		三浦 定俊
劣化と保存 各論	— ガラス —	環境解析研究指導室	朽津 信明
保存環境〈実習〉	— 環境調査 3, 4 —		佐野 千絵

25日(木)

ケーススタディ (於: 横浜市歴史博物館)

— 博物館・美術館における収蔵・展示の問題とその対策 —		佐野 千絵
		三浦 定俊

26日(金)

文化財の国際交流		三浦 定俊
閉講式		

7. 国際研究集会

(1) 「第20回文化財の保存と修復に関する国際研究集会」

主 題	歌舞伎—変遷と展望—
期 間	平成8年11月12日~14日
会 場	江戸東京博物館会議室およびホール
参加者	122名(外国人22名)

事 業

発表者・発表題目等

基調講演

西洋演劇界における歌舞伎公演の価値と実用性

James BRANDON

ジェームス・ブランドン (ハワイ大学, アメリカ)

歌舞伎海外公演が教えるもの

河竹 登志夫 (早稲田大学)

セッション I : 西洋との出会い

ドイツ, オーストリア, スイスにおける川上音二郎と貞奴

Peter PANTZER

ペーター・パンツァー (ボン大学, ドイツ)

“日本劇”としての「修善寺物語」

— フィルマン・ジェミエによる1927年のパリ上演をめぐって—

中村 哲郎 (演劇評論家)

歌舞伎のヨーロッパ演劇への影響

Sang-Kyong LEE

サン・キョン・リ (ウィーン大学, オーストリア)

討論 I — セッション I をめぐって

セッション II : 江戸時代の歌舞伎

在欧初期歌舞伎資料の重要性

Thomas LEIMS

トーマス・ライムス (オークランド大学, ニュージーランド)

歌舞伎のパロディーによる力

— 「矢の根」の象徴的な遊び—

Laurence KOMINZ

ローレンス・コミンズ (ポートランド州立大学, アメリカ)

歌舞伎と文楽

— 近松の「双生隅田川」—

Andrew GERSTLE

アンドリュー・ガーストル (ロンドン大学, イギリス)

元禄歌舞伎に登場する動物

鎌倉 恵子 (東京国立文化財研究所)

セッションIII: 近代の歌舞伎

近代歌舞伎の「西洋」受容

大笹 吉雄 (演劇評論家)

近代化における歌舞伎の変容

神山 彰 (明治大学)

1930年代の歌舞伎

—多様化の10年—

Brian POWELL

ブライアン・パウエル (オックスフォード大学, イギリス)

明治初期の歌舞伎と西洋演劇

—失敗した出会い—

Jean-Jacques TSCHUDIN

ジャン-ジャック・チュディン (パリ第7大学, フランス)

討論II セッションIIIIIをめぐって

前説と実演「歌舞伎俳優の養成」

—日本芸術文化振興会の研修事業について—

歌舞伎俳優研修修了生・研修生の現状と将来

中村 茂子 (東京国立文化財研究所)

「第14期生の歌舞伎実技研修授業<菅原伝手習鑑>車引の場」

実技講師 中村又五郎

実 技 研修生 10名

セッションIV: 現代の課題

批評の機能

羽田 昶 (東京国立文化財研究所)

歌舞伎興行

—芸術と商業主義—

Annegret BERGMANN

事 業

アンネグレット・ベルクマン (ボン大学, ドイツ)

現代歌舞伎の演目の傾向と課題

服部 幸雄 (千葉大学)

芸の伝承

渡辺 保 (淑徳大学)

討論III セッションIVおよび総合討議

(2) アジア文化財保存セミナー

〔第6回アジア文化財保存セミナー〕

主 題 考古遺物の保存

期 間 平成8年10月16～18日

場 所 奈良県新公会堂

発表者・発表題目等 (以下のとおり)

基調講演

考古文化財に関するいくつかの考察

Marc Laenen

マーク・ラーネン (イクロム)

考古遺物の保存と修復

田中 琢 (奈良国立文化財研究所)

カンントリーレポート

インドにおける考古遺物の保存の現状と課題

Tej Singh

テジ・シン (インド国立文化財保存研究所)

ヨルダンにおける考古遺物の保存の現状と課題

Ziad Mohammad al-Saa'd

ジアド・モハマド・アルサアド (ヨルダン・ヤルムーク大学考古学研究所)

バングラデシュにおける考古遺物の保存

Mohammad Khalequzzaman

モハマド・カレクッサマン (バングラデシュ考古局)

考古遺物の保存—日本における保存科学の現状—

肥塚隆保 (奈良国立文化財研究所)

埋葬遺構出土遺物の保存の現状

Chalit Singhasiri

チャリット・シンハシリ (タイ芸術総局考古博物館部保存課)

発掘現場での保存レポート：ハラッパー発掘 (1991.12～1992.3)

Toseef Ul Hassan

トシーフ・ウル・ハッサン (パキスタン・カラチ国立博物館)

高麗王朝時代の船に用いられた木材の調査

金 益 柱 (韓国文化財研究所)

フィリピンにおける大型水浸出土木材の保存に対する PEG の利用

Orlando V. Abinion

オルランド・V・アビニオン (フィリピン国立博物館)

「Perak Man」の現場での保存

Sanim Bin Ahmad

サニム・ビン・アーマド (マレーシア博物館考古局博物館部保存課)

国立ベトナム歴史博物館における陶磁器の保存

Nguyen Dinh Chien

グエン・ディン・チエン (国立ベトナム歴史博物館)

シリアにおける出土ガラス、陶磁器の保存と管理

Omar Hinawi

オマール・ヒナウィ (シリア考古総局)

ブロンズの腐蝕メカニズムおよび保存の手段

Mananti Amperawan Marpaung

マナンティ・アンペラワン・マルポング (インドネシア文化庁文化財保護部)

2つの石造遺物の保存と修復に関するケーススタディ：シロアムの碑文と
アフロディーテの頭部

Ismet Ok

事 業

イスメット・オク (トルコ中央保存修復研究所)

スリランカにおける壁画の保存

Nanda Amara Wickramasinghe

ナング・アマラ・ウィックラマシンヘ (スリランカ考古局)

考古遺物の保存

Faruhaathu Ali Mohamed

ファルハアツ・アリ・モハメド (モルジブ国立言語歴史研究所)

ネパールにおける考古遺物の保存

Riddhi Baba Pradhan

リッディ・ババ・プラダン (ネパール考古局)

考古遺物の保存

Dorji Wangchuk

ドルジ・ワンチュク (ブータン文化財管理局)

アンコールワット保存の諸問題

Ang Choulean

アン・チュリアン (カンボジアアンコール遺跡保存事務所)

総合質疑応答・総合討議

[座長] 馬淵久夫 (作陽短期大学)

マーク・ラーネン (イクロム)

8. 敦煌莫高窟壁画保存修復協力事業の実施

ア) 訪中 (平成8年10月14日～10月20日)

増田 勝彦, 青木 繁夫, 川野邊 渉, 中野 照男, 中島 健次

イ) 研修 (平成9年1月31日～3月30日)

王 万 福, 蘇 伯 民

9. 第5回「紙の保存修復」の国際研修

修復技術部では、研修全般にわたる監督と並んで、研修に使用する印刷教材、実習教材の準備、実技会場における実技指導、研修旅行の引率、研修生に対するアンケートのまとめと研修備忘録の作成を担当している。

平成8年度の研修生は以下の通りである。

フリーマントル・ローズマリー・アン

FREEMANTLE, Rosemary Anne

紙保存修復担当官 メルボルン大学コンサベーションサービス/イアン・ポ
ター美術品保存修復センター オーストラリア

ヴァルコーヴァ・ムラドスト・ディミトローヴァ

VALKOVA, Mladost Dimitrova

助教授 保存修復課 ブルガリア国立美術アカデミー ブルガリア
トムセン・クラグ・メッテ

THOMSEN, Krag Mette

紙保存修復担当官 美術保存修復センター デンマーク

リヴァデネイラS・マルコス・ファブリシオ

RIVADENEIRA S., Marcos Fabricio

保存修復主任 ゲティ保存研究所/カスピカーラ財団 エクアドル
ミンティ・ロバート・グラハム

MINTE, Robert Graham

書籍保存修復担当官 保存修復センター オックスフォード大学付属ポー
トリアン図書館 イギリス

マックグイン・ニーヴ

McGUINNE, Niamh

紙保存修復担当官 アイルランド国立美術館 アイルランド

パエス・ラグネス・ミゲル・アンジェル

PAJES LAGUNES, Miguel Angel

紙保存修復担当官 国立民俗学研究所 メキシコ

事 業

フェルナンド・コルワゲ・ラッナシリ

FERNANDO, Koruwage Ratnasiri

文書修復担当官 スリランカ国立文書館 スリランカ

チョーラック・カルメン

CORAK, Karmen

紙保存修復担当官 スロヴェニア国立文書館 スロヴェニア

レルクディクル・スバラポン

RERKDIKUL, Suparaporn

文書館員 タイ国立文書館 タイ

オーウェン・アントワネット

OWEN, Antoinette

紙保存修復担当官 保存修復課 ブルックリン博物館 アメリカ

ホアン・ティ・ハイ・ヴァン

HOANG THI HAL, Van

図書館司書 テュア・ティエン・フェ県立図書館 ヴェトナム

10. 会 議

(1) 文化財保存修復研究協議会

主 題 「文化財建造物の非破壊調査—現状と展望—」

日 時 平成8年9月30日

会 場 東京国立文化財研究所別館会議室

主 旨 文化財保護法が改正され、近代の文化遺産の保存と文化財の公開・活用が進められつつある。これに伴い、建造物の修復においては、煉瓦・石造などの建物の保存が大きな問題となっている。それらの修復を行うには、損傷状態の正確な把握が必要であり、特に公開・活用に伴う安全性の観点からも重要である。

こうした調査は、文化財の特性からみて、非破壊調査でなければならない。ここでは非破壊調査法とその問題点について検

討を行うことを目的とする。

講 演

修復評価のための非破壊調査法に対する期待

東京国立文化財研究所修復技術部第三修復技術研究室長 青木繁夫
修理方針策定のための調査について

文化庁文化財保護部建造物課文化財調査官 大和 智
ケーススタディー ニコライ聖堂における劣化状態調査 文化財建造物
保存技術協会

重要文化財ニコライ堂保存修理事務所長 高村 功一
調査法の現状と可能性 —熱赤外画像—

東亜大学工学部教授 岡本 芳三
調査法の現状と可能性 —電磁波—

東京工業大学大学院情報理工学研究科助教授 亀井 宏行
調査法の現状と可能性 —超音波—

山形大学工学部電子情報工学科助教授 足立 和成

(2) アジア文化財保存修復研究会

日 時 平成9年3月3日(月)

場 所 東京国立博物館第1セミナー室

主 旨 現在、日本の専門家による海外の文化財の調査研究、保存修復事業への協力が行われている。しかし、日本とは大きく環境が異なる中で文化財の保存修復事業を行う際には、さまざまな問題と直面せざるを得ず、また、事業を行っている専門家相互の情報交換の場も不足しているのが現状である。

本研究会は、海外の文化財の調査研究、保存修復事業に携わるさまざまな分野の専門家による文化財保存修復国際事業に関する問題点に関する議論を行うとともに、専門家相互のネットワーク作りと情報交換を促進することを目的とする。

講 演

事例紹介と質疑応答、討議

事 業

イラン・チョガゼンビル遺跡の保存・修復・整備の現状と問題

国土舘大学イラク古代文化研究所 岡田 保良

埼玉大学工学部 渡辺 邦夫

ミャンマー・バガン遺跡の保存・修復・整備の現状と問題点

東京大学工学部都市工学科 鈴木 伸治

ガンダーラ・ラニガト遺跡の保存・修復・整備の現状と問題点

奈良女子大学生生活環境学部 増井 正哉

東京国立文化財研究所国際文化財保存修復協力センター 西浦 忠輝

モエンジョ=ダロ都市遺跡の保存・修復・整備の現状と問題点

立教大学文学部 小西 正捷

総合討議

座長：伊藤 延男，西浦 忠輝

11. 国際・国内交流

(1) 平成8年度職員の海外渡航

氏名	渡航先	目的	期間	旅費の出所等
松本 修自	イギリス	ICOMOS木の委員会国際シンポジウム出席	平成8年4月13日 ～平成8年4月20日	私費
中里 壽克	台湾	日中現代漆芸交流展セミナー出席	平成8年4月16日 ～平成8年4月21日	台湾省手工業研究所
西浦 忠輝	シリア イタリア ヨルダン	シリア・アインダーラ神殿遺跡の保存修復に関する調査及びイタリア、ヨルダン国内石造文化財保存調査	平成8年5月6日 ～平成8年5月26日	住友財団
宮本長二郎	中国	雲崗石窟、龍門石窟及び西安市内遺跡調査	平成8年6月2日 ～平成8年6月10日	私費
三浦 定俊	イタリア	ICCROM 財政プログラム委員会及び学術諮問委員会出席	平成8年6月4日 ～平成8年6月9日	ICCROM
青木 繁夫	韓国	考古遺物の保存科学的研究の技術交流	平成8年6月9日 ～平成8年6月11日	韓国湖巖美術館
島尾 新	米国	ボストン美術館所蔵水墨画の調査	平成8年6月18日 ～平成8年6月28日	鹿島美術財団
宮本長二郎	タイ	アユタヤ遺跡保存修復調査及び日タイ協力に関する協議	平成8年6月23日 ～平成8年6月29日	文部省科学研究費
西浦 忠輝	タイ	アユタヤ遺跡保存修復調査及び日タイ協力に関する協議	平成8年6月23日 ～平成8年6月29日	文部省科学研究費
松本 修自	タイ	アユタヤ遺跡保存修復調査及び日タイ協力に関する協議	平成8年6月23日 ～平成8年6月29日	文部省科学研究費
朽津 信明	タイ	アユタヤ遺跡保存修復調査及び日タイ協力に関する協議	平成8年6月23日 ～平成8年6月29日	文部省科学研究費
増田 勝彦	イタリア イギリス フランス	在外日本古美術品修復協力事業に関する相手国美術館との協議	平成8年7月3日 ～平成8年7月13日	国際交流基金
中島 健次	イタリア イギリス フランス	在外日本古美術品修復協力事業に関する相手国美術館との協議	平成8年7月3日 ～平成8年7月13日	国際交流基金

事 業

氏名	渡航先	目的	期間	旅費の出所等
勝木言一郎	中国	福建省泉州人形操り「目蓮戯」と日本浄瑠璃操り「目蓮記」に関する研究	平成8年8月12日 ～平成8年8月20日	私費
岡田 健	中国	中国仏教美術の調査研究	平成8年8月17日 ～平成8年8月29日	私費
鎌倉 恵子	中国	福建省泉州人形操り「目蓮戯」と日本の浄瑠璃操り「目蓮記」に関する研究	平成8年8月18日 ～平成8年8月26日	日本学術振興会
中村 茂子	中国	福建省泉州人形操り「目蓮戯」と日本の浄瑠璃操り「目蓮記」に関する研究	平成8年8月18日 ～平成8年8月26日	日本学術振興会
松本 修自	ドイツ	国際共同研究「建造物保存修復の理念と方法」に関する現地調査	平成8年8月18日 ～平成8年8月28日	文部省科学研究費
三浦 定俊	フランス デンマーク イギリス	フランスにおける洞窟等の環境調査及びIIC、ICOM-CC出席	平成8年8月18日 ～平成8年9月7日	私費
鶴田 武良	中国	近代中国絵画資料調査	平成8年8月19日 ～平成8年8月28日	私費
西浦 忠輝	デンマーク イギリス	IIC、ICOM-CC出席	平成8年8月24日 ～平成8年9月8日	外国旅費
中野 照男	中国	中央アジア仏教美術調査	平成8年8月29日 ～平成8年9月10日	私費
松島 健	フランス	奈良興福寺の宝物展陳列指導	平成8年8月29日 ～平成8年9月21日	国際交流基金 フランス美術館・ 博物館連合
宮本長二郎	中国	敦煌莫高窟壁画の保存修復のための第二期共同研究に関する協議	平成8年9月11日 ～平成8年9月14日	文部省科学研究費
勝木言一郎	中国	敦煌莫高窟壁画の保存修復のための第二期共同研究に関する協議	平成8年9月11日 ～平成8年9月14日	文部省科学研究費
中島 健次	中国	敦煌莫高窟壁画の保存修復のための第二期共同研究に関する協議	平成8年9月11日 ～平成8年9月14日	外国旅費
渡邊 明義	韓国	文化財における環境汚染の影響と修復技術の開発に関する共同調査及び協議	平成8年9月16日 ～平成8年9月21日	外国旅費 韓国国立文化財研 究所
青木 繁夫	韓国	文化財における環境汚染の影響と修復技術の開発に関する共同調査及び協議	平成8年9月16日 ～平成8年9月21日	外国旅費 韓国国立文化財研 究所

事 業

氏名	渡航先	目的	期間	旅費の出所等
川野邊 渉	トルコ	歴史的文化財建造物の建築材質の分析及び特性化に関する技術指導	平成8年10月1日 ～平成8年10月7日	国際交流基金
朽津 信明	トルコ	歴史的文化財建造物の建築材質の分析及び特性化に関する技術指導	平成8年10月1日 ～平成8年10月7日	国際交流基金
西浦 忠輝	ブルガリア ドイツ	第11回 ICOMOS 総会及び国際シンポジウム「文化遺産と社会の変容」出席	平成8年10月3日 ～平成8年10月12日	外国旅費 文化財保護振興財団
増田 勝彦	中国	敦煌莫高窟壁画保存に関する日中共同研究及び協議	平成8年10月14日 ～平成8年10月20日	文部省科学研究費
中野 照男	中国	敦煌莫高窟壁画保存に関する日中共同研究及び協議	平成8年10月14日 ～平成8年10月20日	文部省科学研究費
青木 繁夫	中国	敦煌莫高窟壁画保存に関する日中共同研究及び協議	平成8年10月14日 ～平成8年10月20日	文部省科学研究費
川野邊 渉	中国	敦煌莫高窟壁画保存に関する日中共同研究及び協議	平成8年10月14日 ～平成8年10月20日	外国旅費
中島 健次	中国	敦煌莫高窟壁画保存に関する日中共同研究及び協議	平成8年10月14日 ～平成8年10月20日	外国旅費
平尾 良光	中国	中国古代銅製品の調査	平成8年10月20日 ～平成8年10月29日	文部省科学研究費
早川 泰弘	中国	中国古代銅製品の調査	平成8年10月20日 ～平成8年10月29日	文部省科学研究費
尾立 和則	米国	在外日本古美術品保存修復協力事業に関する現地調査及び協議	平成8年10月24日 ～平成8年11月4日	国際交流基金
中島 健次	米国	在外日本古美術品保存修復協力事業に関する現地調査及び協議	平成8年10月24日 ～平成8年11月4日	国際交流基金
松本 修自	ドイツ	日独学術交流事業現地調査	平成8年10月28日 ～平成8年11月7日	文部省科学研究費
西浦 忠輝	パキスタン	遺跡の保存修復に関する調査及び協議	平成8年11月11日 ～平成8年11月24日	ユネスコ日本信託基金
勝木言一郎	英国、ギリシア、スウェーデン、ロシア、フランス、オーストリア、ドイツ、カナダ、米国	宗教図像を通じた古代文化の東西交流の研究のため	平成8年12月2日 ～平成9年10月1日	文部省

事 業

氏 名	渡 航 先	目 的	期 間	旅費の出所等
松島 健	フランス	バリ興福寺展の撤収	平成8年12月8日 ～平成8年12月20日	国際交流基金
宮本長二郎	タイ	日タイ共同研究事業に関する協議 及び研究調査	平成8年12月9日 ～平成8年12月20日	文部省科学研究費
西浦 忠輝	タイ	日タイ共同研究事業に関する協議 及び研究調査	平成8年12月9日 ～平成8年12月20日	文部省科学研究費
小関 仁志	タイ	日タイ共同研究事業に関する協議	平成8年12月9日 ～平成8年12月17日	外国旅費
松下 冬樹	タイ	日タイ共同研究事業に関する協議 及び研究調査	平成8年12月9日 ～平成8年12月17日	外国旅費
渡邊 明義	タイ	日タイ共同研究事業に関する協議 及び研究調査	平成8年12月12日 ～平成8年12月17日	外国旅費
松本 修自	タイ	日タイ共同研究事業に関する協議 及び研究調査	平成8年12月12日 ～平成8年12月17日	文部省科学研究費
朽津 信明	タイ	日タイ共同研究事業に関する協議 及び研究調査	平成8年12月12日 ～平成8年12月17日	文部省科学研究費
鶴田 武良	中国	近代中国油画の調査	平成8年12月13日 ～平成8年12月20日	私費
岡田 健	インドネシア マレーシア	法隆寺献納宝物と正倉院宝物の源 流に関する調査研究	平成8年12月16日 ～平成8年12月23日	東京国立博物館
長岡 龍作	インドネシア マレーシア	法隆寺献納宝物と正倉院宝物の源 流に関する調査研究	平成8年12月16日 ～平成8年12月23日	東京国立博物館
井出誠之輔	韓国	李朝美術展の見学	平成9年2月8日 ～平成9年2月12日	私費
三浦 定俊	イタリア	ICCROM 財政事業計画委員会及 び理事会出席	平成9年2月9日 ～平成9年2月16日	文化庁 ICCROM
鈴木 廣之	米国	日本美術史学の形成に関する研究	平成9年2月11日 ～平成9年2月21日	私費
松本 修自	ドイツ	建造物保存に関する日独共同研究 現地調査	平成9年2月22日 ～平成9年3月9日	文部省科学研究費
宮本長二郎	ドイツ	建造物保存に関する日独共同研究 現地調査	平成9年3月1日 ～平成9年3月8日	文部省科学研究費
川野邊 渉	韓国	日韓共同研究に関する現地調査及 び協議	平成9年2月25日 ～平成9年2月28日	外国旅費

事 業

氏 名	渡 航 先	目 的	期 間	旅費の出所等
朽津 信明	韓国	日韓共同研究に関する現地調査及び協議	平成9年2月25日 ～平成9年2月28日	外国旅費
本澤 英伸	韓国	日韓共同研究に関する現地調査及び協議	平成9年2月25日 ～平成9年2月28日	外国旅費
渡邊 明義	ドイツ	漆工品の調査に関する協議	平成9年2月26日 ～平成9年3月8日	外国旅費 文部省科研費
三浦 定俊	ドイツ	漆工品の調査に関する協議	平成9年2月26日 ～平成9年3月8日	外国旅費 文部省科研費
山代 文雄	ドイツ	漆工品の調査に関する協議	平成9年2月26日 ～平成9年3月8日	外国旅費 文部省科研費
中島 健次	米国	在外日本古美術品修復協力事業に関する協議	平成9年3月9日 ～平成9年3月14日	外国旅費
島尾 新	米国	海外所在日本文化財調査	平成9年3月11日 ～平成9年3月28日	文化財保存修復学会
野久保昌良	米国	海外所在日本文化財調査	平成9年3月11日 ～平成9年3月28日	文化財保存修復学会
岡田 健	米国	海外所在日本文化財調査	平成9年3月11日 ～平成9年3月26日	文化財保存修復学会
中島 健次	イタリア フランス	文化財保存に関する国際協力及びアジア文化財保存セミナー実施に関する協議	平成9年3月19日 ～平成9年3月27日	外国旅費
篠原 一夫	イタリア フランス	文化財保存に関する国際協力及びアジア文化財保存セミナー実施に関する協議	平成9年3月19日 ～平成9年3月27日	外国旅費
横山 直樹	イタリア フランス	文化財保存に関する国際協力及びアジア文化財保存セミナー実施に関する協議	平成9年3月19日 ～平成9年3月27日	外国旅費
宮本長二郎	タイ	遺跡保存に関する日タイ共同研究	平成9年3月21日 ～平成9年3月29日	外国旅費
西浦 忠輝	タイ	遺跡保存に関する日タイ共同研究	平成9年3月21日 ～平成9年3月29日	外国旅費
石崎 武志	タイ	遺跡保存に関する日タイ共同研究	平成9年3月21日 ～平成9年3月29日	外国旅費
朽津 信明	タイ	遺跡保存に関する日タイ共同研究	平成9年3月24日 ～平成9年3月28日	外国旅費

事 業

氏名	渡航先	目的	期間	旅費の出所等
青木 繁夫	イタリア	遺跡の保存概念に関する研究調査	平成9年3月23日 ～平成9年3月27日	外国旅費

(2) 招へい研究員等

国外招へい研究員

氏名	国籍	役職	招へい期間	共同研究課題	研究代表者
金正耀*	中国	中国社会科学院世界宗教研究所助教授	8. 6.17 ～8. 9.14	中国古代青銅器の自然科学的研究	保存科学部 平尾良光
姜 大一*	韓国	韓国国立文化財研究所専門職	8. 6.23 ～8. 6.29	文化財における環境汚染の影響と修復技術の開発研究	修復技術部 青木繁夫
韓 成熙*	韓国	韓国国立文化財研究所専門職	8. 6.23 ～8. 6.29	文化財における環境汚染の影響と修復技術の開発研究	修復技術部 青木繁夫
鄭 光貴*	中国	中国社会科学院考古研究所研究員	8. 8.20 ～8. 8.29	中国古代青銅器の自然科学的研究	保存科学部 平尾良光
王 増林*	中国	中国社会科学院考古研究所助理研究員	8. 8.10 ～8.10.18	中国古代青銅器の自然科学的研究	保存科学部 平尾良光
Hartwig SCHUMIDT*	ドイツ	アーヘン工科大学教授	8. 9.18 ～8. 9.27	建築遺跡における復原に関する研究	国際文化財保存修復協力センター 松本修自
Uta HASSLER*	ドイツ	ドルトムント大学教授	8. 9.18 ～8. 9.27	建造物保存修復における復原整備に関する研究	国際文化財保存修復協力センター 松本修自
Gerald GROEMER*	米国	アーラム大学助教授	8.10.10 ～8.10.19	辻能の研究	芸能部 浦生郷昭
聶 崇正*	中国	北京故宫博物院研究員	8.10.24 ～8.11. 6	乾隆期洋風画の研究	美術部 鶴田武良
孫 傳賢*	中国	河南省文物局副局長	8.11. 5 ～8.11.16	日本国内に所在する中国仏教考古資料の収集	美術部 岡田 健
呂 品*	中国	河南省博物館副研究員	8.11. 5 ～8.11.16	日本国内に所在する中国仏教考古資料の収集	美術部 岡田 健

事 業

氏 名	国 籍	役 職	招へい期間	共同研究課題	研究代表者
Robin E. RUIZENDAAL*	オランダ	ライデン大学博士 研究生	8.11.24 ～8.11.30	人形劇における劇場と 宗教の関連についての 研究	芸術部 鎌倉恵子
許 志浩*	中 国	上海亚太伝播公司 職員	9. 1.16 ～9. 1.30	民国期美術に及ぼした 日本の影響	美術部 鶴田武良
Jukka JOKILEHTO*	フィンラ ン ド	ICCROM 事務局 長補佐	9. 1.17 ～9. 1.26	建造物保存修復の理念 と災害復旧の在り方に 関する研究	国際文化財保存修 復協力センター 松本修自
蘇 伯民*	中 国	敦煌研究院保護研 究所研究員	9. 1.31 ～9. 3.31	敦煌莫高窟壁画の保存 修復に関する研究	国際文化財保存修 復協力センター 宮本長二郎
汪 万福*	中 国	敦煌研究院保護研 究所研究員	9. 1.31 ～9. 3.31	敦煌莫高窟壁画の保存 修復に関する研究	国際文化財保存修 復協力センター 宮本長二郎
張 羽新*	中 国	文物研究所副所長	9. 2.16 ～9. 2.22	中国文物研究所との共 同研究に関する協議	国際文化財保存修 復協力センター 宮本長二郎
曹 勇*	中 国	文物研究所助理研 究員	9. 2.16 ～9. 2.22	中国文物研究所との共 同研究に関する協議	国際文化財保存修 復協力センター 宮本長二郎
Gael de Guichen*	フランス	ICCROM 事務局 長補佐	9. 2.17 ～9. 2.28	我が国における Pre- ventive Conservation のあり方に関する 研究	保存科学部 三浦定俊
金 奎虎*	韓 国	湖巖美術館研究員	9. 2.27 ～9. 3.12	金属材料の化学組成の 研究	保存科学部 平尾良光
卓 新平*	中 国	中国社会科学院世 界宗教研究所副所 長	9. 3.13 ～9. 3.22	古代中国青銅器の研究	保存科学部 平尾良光
李 水城*	中 国	北京大学副教授	9. 3.13 ～9. 3.22	古代中国青銅器の研究	保存科学部 平尾良光
Anek THEPWONG*	タ イ	芸術総局考古博物 館局保存計画部建 築課技官	9. 3.10 ～9. 3.18	遺跡の保存修復に関 する調査研究	国際文化財保存修 復協力センター 西浦忠輝
Pichya BOONPINON*	タ イ	芸術総局考古博物 館局保存計画部建 築課技官	9. 3.10 ～9. 3.18	遺跡の保存修復に関 する調査研究	国際文化財保存修 復協力センター 西浦忠輝

事 業

氏 名	国 籍	役 職	招へい期間	共同研究課題	研究代表者
栗林久美子*	在 タイ	UNESCO / PROAP アソシエート・エキスパート	9. 3.24 ～9. 3.31	アジア地域の世界文化遺産の保存と活用の在り方に関する研究	国際文化財保存修復協力センター 松本修自
李 実*	中 国	敦煌研究院保護研究所副所長	9. 3.24 ～9. 3.30	敦煌莫高窟壁画の保存修復に関する研究	国際文化財保存修復協力センター 宮本長二郎
王 進玉*	中 国	敦煌研究院保護研究所研究員	9. 3.24 ～9. 3.30	敦煌莫高窟壁画の保存修復に関する研究	国際文化財保存修復協力センター 宮本長二郎

注1) *は研究所の予算による招へい、**は一部研究所の予算による招へいを示す。

2) 国際研究集会、アジア文化財保存セミナー及び紙の保存修復国際研修による招へいについては、各々の項に記載した。

(3) 平成8年度海外研究者等の来訪

氏 名	国 籍	所 属 等
Maria Leonor Fernandes	ポルトガル	ホセ・デ・フィグレイド研究所研究員
John Kwesi Addai	ガ ナ	カーナ博物館技師
Friederike Hertel	ド イ ツ	Fachhochschule fur Technik und Wirtschaft
Mary Ann Becker	米 国	
Dei Negri Jasmina	イ タ リ ア	ベネチア東洋美術館学芸員
Raymond Leeuwenburg	オ ラ ン ダ	
俞 在恩	韓 国	韓国国立文化財研究所研究員
Michael Kuhenthal	ド イ ツ	バイエルン州立文化財研究所修復部長
Katharina Walch	ド イ ツ	バイエルン州立文化財研究所研究員
Friederike Barbara Piert-Borghers	ド イ ツ	漆工品修復専門家
Marisa Laurenzi Tabasso	イ タ リ ア	ICCROM 事務局長補佐

氏 名	国 籍	所 属 等
James T. Ulak	米 国	フリーア美術館学芸員
加藤彰宏	米 国	フリーア美術館学芸員
Ronald Otsuka	米 国	デンバー美術館学芸員
Amy Poster	米 国	ブルックリン美術館学芸員
Faith Zieske	米 国	フィラデルフィア美術館紙修復担当
Gratia Sandy Williams	米 国	M&Jパーク財団学芸員
Peter Fetchko	米 国	ビーボディ・エセックス博物館学芸員
Sybille Girmond	ド イ ツ	ケルン東洋美術館学芸員
Prachot Sangkhanukit	タ イ	芸術総局考古博物館局長
Penpan Jarernporn	タ イ	芸術総局企画部対外研究協力課長
俄 軍	中 国	甘肅省文化庁辦公室主任

VI. 研究施設・設備

1. 蔵書

美術関係図書

日本・東洋古美術、日本近代・現代美術、西洋美術の全般にわたる研究書を中心に、関連図書、各種叢書、辞典類など漢書(43,552)、洋書(4,259)、計47,811冊のほか、各都道府県市町村教育委員会編集の文化財関係報告書、美術関係雑誌、紀要類、売立目録、展覧会目録などを所蔵し、所内及び所外の研究者の利用に供している。

芸能関係図書

雅楽・寺事・能・歌舞伎・文楽・邦楽・邦舞・民俗芸能・寄席芸、その他わが国の伝統芸能の研究に必要な図書10,262冊を所蔵する。演芸画報・歌舞伎新報・歌舞伎(第1次)・テアトロ(第1次)・新劇・上方・民俗芸術・日本民俗・芸能復興・郷土研究・旅と伝説などの雑誌、それに声明本・謡本・囃子手付本・丸本などの台本・譜本も収集している。

保存科学・修復技術関係図書

伝統的生産及び工芸技術書、技術史またはそれらの科学的究明を試みたもの、修理工事報告書及び化学・物理学・生物学部門の保存科学の関連和洋書、合わせて3,330冊を所蔵している。

本年度における収集数と総計は次表のとおりである。

区分	美術関係		芸能関係		保存科学・ 修復技術関係		計
	和漢書	洋書	和漢書	洋書	和漢書	洋書	
8年度	788冊	77冊	423冊	10冊	30冊	51冊	1,060冊
総数	43,552冊	4,259冊	10,436冊	176冊	2,202冊	1,128冊	60,173冊

2. 資 料

美術関係資料

実物よりの直接撮影を主にした写真資料の作成整理と、購入写真、複写写真による補足整備に加えて、印刷物中の図版をおさめるという方式で、当研究所設立当初より一貫して力を注いできた写真資料を有する。それらは日本東洋古美術、日本近代・現代美術、西洋美術の全域にわたり、それぞれ絵画、書籍、彫刻、工芸、建築等の諸部門に及ぶ。特別大型のものから小型のものまで総数凡そ26万点、原板保有量はほぼ3分の1にあたり、別にマイクロ・フィルム255巻がある。写真資料のほか、拓本、作家伝記資料、落款印章資料、近代・現代作家・団体・作品資料、資料スクラップ等と、図書カード、図版カード、各種索引類など多数。

芸能関係資料

レコード、録音テープ、シネフィルム、ビデオテープ、写真等による芸能資料を数多く備えている。レコードには、毎年各社から発売される伝統芸能関係レコードのほか、昭和35年度文部省機関研究費によって購入した安原コレクションレコード5,450枚が含まれている。安原コレクションは、明治・大正・昭和三代にわたって発売された各種邦楽レコードを網羅したもので、近代における邦楽の実態と変遷を知る上で貴重な資料である。録音テープ、ビデオテープ、及び写真は、雅楽・能・歌舞伎・邦楽・邦舞・寺院行事・民俗芸能その他の伝統芸能を対象に記録してきたもので、演奏法の解析を中心とした写真、テープ、あるいは各種文書の記録写真等も含んでいる。資料別の所蔵数は、つぎのとおりである。

区 分	録 音 テ ー プ		シネフィルム		ビデオテープ	
	analog	digital	8mm	16mm	β, VHS方式	8mm
平成8年度	55本	0本	0本	0本	29本	8本
合 計	2,977本	336本	198本	4本	514本	113本

区 分	音 盤		
	SP・LP	CD	VHD・LD
平成8年度	2枚	42枚	0枚
合 計	7,212枚	614枚	16枚

3. 主要機器・設備

美術部・情報資料部		
名 称	使 用 目 的	備 考
X線透過撮影装置	軟X線照射による絵画・彫刻の顔料・構造等の非破壊分析。	
紫外線照射装置	紫外線照射による蛍光物質の分析。補絹・補彩領域の明別。	
顕微鏡装置	双眼実体顕微鏡による美術作品細部の非接触観察。	KARL ZEISS
赤外線テレビ	赤外線照射による墨線の抽出。下図・銘文等の解読。	浜松テレビ
ビデオイメージスコープ	内視鏡による彫刻作品等の内部観察。	オリンパス
ローカルエリアネットワーク	LANによる情報処理の円滑化。情報の統合・共有化。電子メール・インターネットの活用	
画像処理装置	デジタル画像処理技術による多角的画像分析。画像データベースの試作。	NEXUS6800シリーズ
マイクロフィルムリーダー	マイクロフィルムの閲覧	富士フィルム

研究施設・設備

芸 能 部		
名 称	使 用 目 的	備 考
舞台（試聴室）	日本の古典芸能を実演するのに必要最小限の広さを持ち、実技者を招いて研究のための試演を行う。またその実演を舞台に続く調整室で撮影し録音する。	間口590cm 奥行き485cm 残響時間0.30/秒
録音室	実技者を招いて分析研究のための、良質な録音を行う。	間口421cm 奥行き670cm 残響時間0.15/秒アナログ・デジタルの録音可能。
メログラフ	音の高さと強さの細かい変化を正確に計り、分かりやすいグラフで記録して、音学的分析を行う。	型名 B/T
レーザー・ターンテーブル	レーザー光でアナログ・レコードを非接触で再生する。貴重なレコードを半永久的に使用できる。	エルプ LT-IX

保存科学部		
名 称	使 用 目 的	備 考
蛍光 X 線分析装置	金属、顔料、岩石、土器、ガラスなどの化学組成を非破壊的に測定する。理学電機製は可搬型である。	フィリップス PW2400SLL, フィリップス DX95SLL, セイコー SAE5230, 堀場製作所 XGT-2000K, 理学電機 TBF01
原子吸光分析装置	岩石、土器、金属などに含まれる元素組成を測定する。	セイコー SAE7500A
誘導結合プラズマ分析装置 (ICP)	岩石、土器、金属などに含まれる元素組成を測定する。	サーモジャーレル アッシュ POEMS
質量分析装置	鉛、ストロンチウム同位体比測定から、青銅、岩石などの原料産地を推定する。	サーモクエスト MAT 262, VG Sector J

名 称	使 用 目 的	備 考
イオンクロマト分析装置	岩石、鏽中の陰イオン濃度や空気中の NO_x 、 SO_x 濃度の測定を行う。	横河 IC7000RP
X線回析分析装置	岩石や鏽を構成する結晶組成を判別する。本装置は可搬型である。	理学電機 TBD10
電子スピン共鳴装置	遷移金属イオンや劣化に伴って生じるフリーラジカルの強度を測定し、劣化の進みかたや程度を推定する。	日本電子 JES-RE1X
化学発光計測装置	化学反応に伴って放出される微弱な光の強度を測定し、反応の進みかたや劣化の度合いを測定する。	東北電子 CL-100
走査型電子顕微鏡	高倍率で試料表面の状態を観察するとともに、構成元素の分布を調べ、構造・技法について情報を得る。	日本電子 JMS5100
低真空度走査型電子顕微鏡	高倍率で試料表面の状態を観察するとともに、構成元素の分布を調べ、構造・技法について情報を得る。	日本電子5800LV
工業用 X線検査装置	透視撮影によって彫刻・工芸・考古遺物・などの構造や光電子撮影によって絵画の顔料を調べる。	フィリップス MG321他
減圧燻蒸装置	文化財加害生物を防除するための燻蒸法の研究・開発を行う。	SK2
微生物検体作成装置	微生物胞子の発芽に及ぼす風の影響を調べる。	小林精機 CP 型
ガスクロマトグラフ質量分析計	有機質文化財の構成物質および劣化の判定のためにガス状として有機物を分離し、有機分子の判定を行う。	ヒューレットパッカード HP5890, 日本電子 Automass150
液体クロマトグラフ質量分析計	有機質文化財の構成物質および劣化の判定のために液体状態で有機物を分離し、有機分子の判定を行う。	ヒューレットパッカード HP, 日本電子 LX2000
DNA シーケンサ	文化財の劣化原因、生物等の遺伝子配列を調べ、種の判定を行う。	ファルマシアバイオテック

研究施設・設備

修復技術部		
名 称	使 用 目 的	備 考
太陽追跡曝露試験機	修復材料の耐候性試験をする。	スガ試験機
プラズマ装置	酸化した出土金属遺物を水素プラズマを利用して還元処理をする。	神港精機 MP1017
紫外線フェードメータ	塗料、有機質材料の耐候性試験をする。	スガ試験機
大型ステージ顕微鏡	文書、染織品等を平置のまま構造を観察できる大型移動ステージ（1×1 m）を備えた光学顕微鏡	三啓 SLP-1000
走査型レーザー顕微鏡	レーザーを走査して、天然物などをきわめて深い焦点深度で観察し、立体的な情報を得ることができる。	レーザーテック ILM21
耐候性試験機	修復材料他の耐候性試験をする。	スガ試験機、サンシャイン ウェザーメーター
凍結乾燥機	水漬有機物の乾燥処理を行う。	共和真空
ガス腐食試験機	修復材料他の汚染ガスの影響試験をする。	山崎精機
酸性雨試験機	酸性雨物質による修復材料の試験をする。	板橋理化
材料試験機	修復材料の曲げ、圧縮強度等の試験をする。	島津製作所オートグラフ
赤外分光分析計	文化財や修復材料物質の同定などを行う。	島津製作所 FT-IR8500

国際文化財保存修復協力センター		
名 称	使 用 目 的	備 考
微量部付全自動 X線回析装置	微量の試料で、顔料、金属、岩石などの鉱物同定を行う。	マックサイエンス MP-XHF-SRA
レーザー回析式粒度分布測定装置	土器や煉瓦などの粒度を調べ、その特性を明らかにする。	島津製作所 SALD-3000
比表面積・細孔分布測定装置	岩石や煉瓦などの劣化状況を把握する	島津製作所アサップ2400

4. 黒田記念室

黒田記念室は、本研究所が帝国美術院長子爵黒田清輝の遺言によって創立された経緯から、黒田の画業・功績を記念するために設けられた陳列室であり、黒田清輝の油絵・素描・写生帖等を収蔵している。

創立当時、主として黒田家から寄贈されたものは、油絵125点、素描170点、写生帖等であるが、その後黒田照子夫人、樺山愛輔、田中良氏等からの寄贈が加わった。収蔵品の主なるものは、「智・感・情」・「花野」・「湖畔」・「赤髪の少女」・「もるる日影」・「温室花壇」などである。

5. 閲 覧 室

本研究所情報資料部の図書写真及び各種研究資料は、週三日（月・水・金）、主として研究者・学者・美術関係専攻の学生（大学院）等の利用に供している。

VII. 関係法規

◎文部省組織令(抄) (昭59.6.28 政令第227号) (最終改正 平7.7.14)

第2章 文化庁

第3章 施設等機関

(施設等機関)

第108条 文化庁長官の所轄の下に、文化庁に国語研究所を置く。

2 前項に定めるもののほか、文化庁に次の施設等機関を置く。

国立博物館

国立近代美術館

国立西洋美術館

国立国際美術館

国立文化財研究所

(国立文化財研究所)

第114条 国立文化財研究所は、文化財に関する調査研究、資料の作成及びその公表を行う機関とする。

2 国立文化財研究所には、支所を置くことができる。

3 国立文化財研究所及びその支所の名称、位置及び内部組織は、文部省令で定める。

(研究施設の指定)

第115条 国立国語研究所及び国立文化財研究所は、法第5条第37条に規定する政令で定める研究施設とする。

◎文部省設置法施行規則(抄) (昭28.1.13 文部省令第2号) (最終改正 平7.3.31)

第5章 文化庁の施設等機関

第4節 国立文化財研究所

第1款 名称及び位置

(名称及び位置)

関係法規

第116条の9 国立文化財研究所の名称及び位置は、次の表に掲げるとおりとする。

名 称	位 置
東京国立文化財研究所	東京都台東区
奈良国立文化財研究所	奈良県奈良市

第1款の2 東京国立文化財研究所

(所 長)

第117条 東京国立文化財研究所に、所長を置く。

2 所長は、所務を掌理する。

(内部組織)

第118条 東京国立文化財研究所に、庶務課、次の5部及び国際文化財保存修復協力室を置く。

- 一 美術部
- 二 芸能部
- 三 保存科学部
- 四 修復技術部
- 五 情報資料部

2 前項に定めるもののほか、東京国立文化財研究所に、国際文化財保存修復協力センターを置く。

(庶務課の事務)

第119条 庶務課においては、次の事務をつかさどる。

- 一 職員の人事に関する事務を処理すること。
- 二 職員の福利厚生に関する事務を処理すること。
- 三 公文書類の接受及び公印の管守その他庶務に関すること。
- 四 経費及び取入の予算、決算その他会計に関する事務を処理すること。
- 五 行政財産及び物品の管理に関する事務を処理すること。
- 六 庁内の取締りに関すること。
- 七 前各号に掲げるもののほか、他の所掌に属さない事務を処理すること。

(美術部の二室及び事務)

第120条 美術部に、第一研究室及び第二研究室を置く。

- 2 第一研究室においては、わが国の上代、中世及び近世の美術並びに東洋美術に関する調査研究を行い、及びその結果の公表を行う。
- 3 第二研究室においては、わが国の近代及び現代の美術並びに西洋美術に関する調査研究を行い、及びその結果の公表を行うとともに黒田記念室に関する事務をつかさどる。(芸能部の三室及び事務)

第121条 芸能部に、演劇研究室、音楽舞踊研究室及び民俗芸能研究室を置く。

- 2 演劇研究室においては、演劇及びその保存に関する調査研究を行い、並びにその結果の公表を行う。
- 3 音楽舞踊研究室においては、音楽及び舞踊並びにこれらの保存に関する調査研究を行い、並びにその結果の公表を行う。
- 4 民俗芸能研究室においては、民俗芸能及び保存に関する調査研究を行い、並びにその結果の公表を行う。

(保存科学部の三室及び事務)

第122条 保存科学部に、化学研究室、物理研究室及び生物研究室を置く。

- 2 化学研究室においては、文化財及びその保存に関する化学的調査研究(分析化学的調査研究を含む。)を行い、並びにその結果の公表を行う。
- 3 物理研究室においては、文化財及びその保存に関する物理学的調査研究を行い、並びにその結果の公表を行う。
- 4 生物研究室においては、文化財及びその保存に関する生物学的調査研究を行い、並びにその結果の公表を行う。

(修復技術部の三室及び事務)

第122条の2 修復技術部に、第一修復技術研究室、第二修復技術研究室及び第三修復技術研究室を置く。

- 2 第一修復技術研究室においては、木、漆その他次項及び第4項の材料以外のものを材料とする文化財の修復に関する科学的、技術的調査研究を行い、及びその結果の公表を行う。
- 3 第二修復技術研究室においては、紙、布又は革を材料とする文化財の修復に関する科学的、技術的調査研究を行い、及びその結果の公表を行う。

関係法規

- 4 第三修復技術研究室においては、石、土又は金属を材料とする文化財の修復に関する科学的、技術的調査研究を行い、及びその結果の公表を行う。

(情報資料部の二室及び事務)

第122条の3 情報資料部に、文献資料研究室及び写真資料研究室を置く。

- 2 文献資料研究室においては、第118条第1号から第4号までに掲げる各部の所掌に係る文献資料その他の資料(写真資料を除く)の作成、収集、整理、保管、公表、閲覧及び調査研究を行う。

- 3 写真資料室においては、第118条第1号から第4号までに掲げる各部の所掌に係る写真資料の作成、収集、整理、保管、公表、閲覧及び調査研究を行う。

(国際文化財保存修復協力センター)

第122条の4 国際文化財保存修復協力センターにおいては、文化財の分野における国際的な貢献に資するため、世界の文化財の保存修復に関する国際協力、資料収集、調査研究及びその結果の公表並びに専門的、技術的な研修を行う。

(国際文化財保存修復協力センターの長)

第122条の5 国際文化財保存修復協力センターに長を置く。

- 2 前項の長は、国際文化財保存修復協力センターの事務を掌理する。

(国際文化財保存修復協力センターの二室及び事務)

第122条の6 国際文化財保存修復協力センターに企画室及び環境解析研究指導室を置く。

- 2 企画室においては、世界の文化財の保存修復に関する国際協力及び研修について、企画及び実施に係る事務を処理する。

- 3 環境解析研究指導室においては、世界の文化財の保存環境の解析に関する資料収集、調査研究及びその結果の公表並びに専門的、技術的な研修を行う。

(客員研究員)

第122条の7 東京国立文化財研究所に客員研究員を置くことができる。

- 2 客員研究員は、所長の命を受け、東京国立文化財研究所において行う調査研究に参画する。

- 3 客員研究員は、非常勤とする。

東京国立文化財研究所要覧 (平成8年度)

平成9年12月1日 発行

発行所 東京国立文化財研究所

〒110 東京都台東区上野公園13-27

電話 03 (3823) 2241 (代表)
